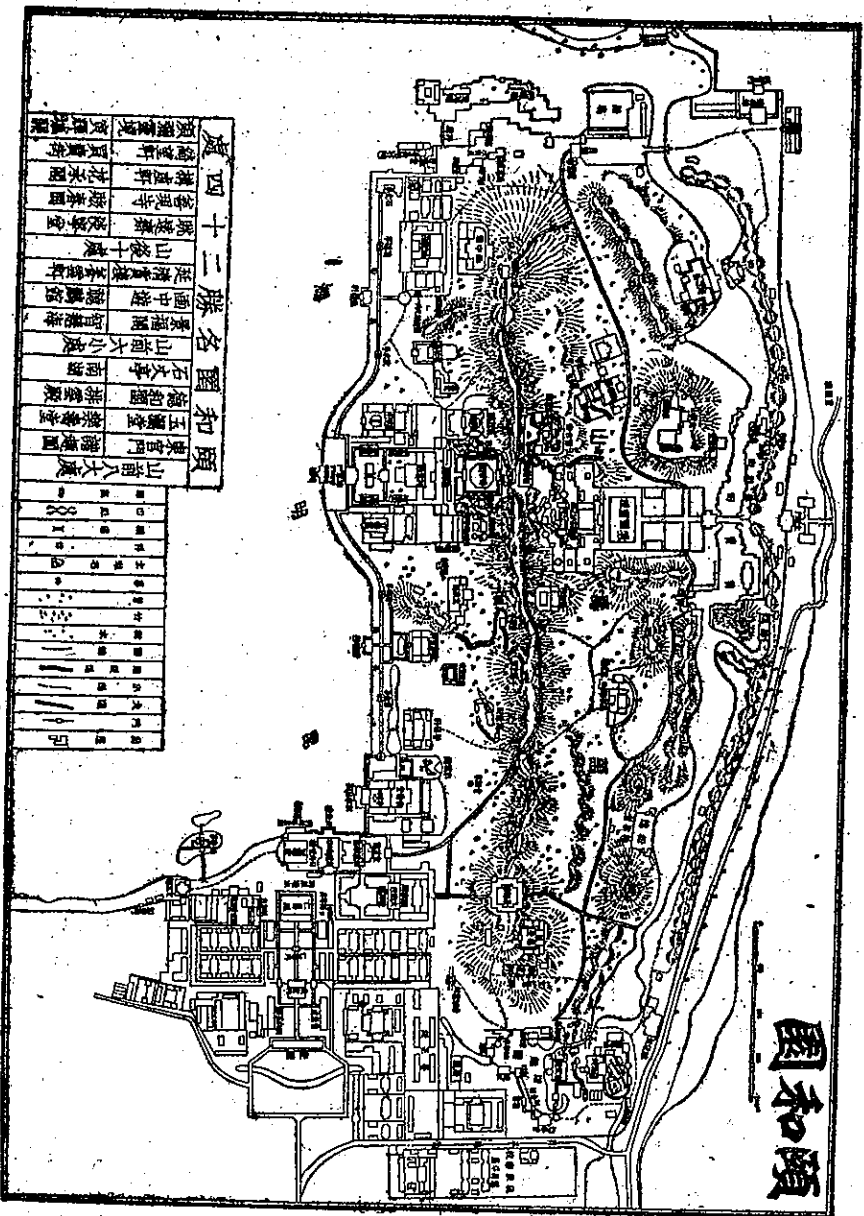


名勝蹟

寶座後方の戸棚中に格納せられた大冊は、聖祖康熙帝の勅撰に係る欽定古今圖書集成で、全篇一萬卷を算し、清朝時代には禁裡聽政の正殿乾清宮内にも寶座の左右に之を置いてあつた。又寶座の兩側に並べられた七寶の花瓶の中には日本製の物もある。只殿内の古銅器は其の全部が不手際極まる膺造品ばかりで、之は此所ばかりでなく園内各所の銅器殆んど皆然りの類があるが、北京の宮殿・離宮・壇廟等の古物散逸の経過を考へると、斯うした膺造品の演じる役目の大きなことに啞然たらざるを得ないものがある。

殿前の左右兩廡はもと接見後の賜餐の場所に充てられた所であつたが、殿前月台上の龍鳳銅缸は西太后當時の製作に係るもので、何れも「天地一家春」の五字を刻した新しい物であり、之に對して乾隆の香爐は曾て猛火の下に暴されて蒼然たる古色を一時失ひながらも、其の雅致なほ捨て難いものゝあるのを覺えしめる。

耶律楚材の墓・此所を見て左に廻ると西太后當時に設けられた發電所の隣りに、一世の高士として知られた元初の宰相耶律文正公の墓がある。もと仁壽殿の北に近い山麓に在つたものを、乾隆造營の當初此所に移したと傳へられる



颐和园



清中期好山園(唐名勝圖會)

が、前方の祠堂内には其の衣冠の塑像を安置し、後方の屋内に封土を設けてあるが、斯うして坟墓を屋内に置いたことは珍らしい例で、之は魏書勿吉傳にある勿吉の風俗などと相通するものあるのを思はしむると共に、北京附近に見られる女真式の墓と相類するものであると思ふ。祠堂前に乾隆の御碑があつて表面に乾隆十五年の御製詩を刻し、その序にはこの墓が好山園の園門に近いので、昔造園の時に土を培ねて山を作つたとあるのが即ち現状にした事を云つたものであらうが、裏面には汪由敦の書いた碑記があり、この入口の壁間にも湯嬰和の書いた石額が嵌入しある。

昆明湖・此所を出て湖畔に立てば昆明の清波眼前に展開する彼方に西堤の柳葉微風に揺るゝところ幾多の橋梁其の間を點綴して、身の宛然江南の客となつたかの感あらしめるが、これは乾隆の皇太后が非常に蘇州の風光を愛でさせられた關係から、帝は特に斯うした江南の景致を仿して此の造營を行はれたのであつたと云ふ。現在西堤の西方一帯は葦荻繁茂して沼地になつて居るが、本來この昆明湖は平

玉瀾堂



面的には杭州の西湖と相似た所があつて、この西堤は即ち西湖の蘇堤を想はしむるものがあり、湖中の小島南湖の涵虛堂は曾て武昌黃鶴樓の制を模したものと稱せられる望蟾閣の舊址で、十七孔橋は蘇州郊外の寶帶橋の縮圖である。この湖は乾隆造營の當時迄は一小池

に過ぎなかつた。と云ふが、東堤の築造に依つて急に水面が擴くなり且水深を増したものの様で、現在南湖東北の最深所は水深四米餘に達する。

玉瀾堂・湖畔を北に行つた玉瀾堂はもと光緒皇帝の便殿に充てられた所で、中央正面に



は皇帝の寶座を設け其の後方は西を寢室東を更衣室に用ひられ、東方の一室は休憩の場所に充てられて居たと云ふ。光緒二十四年(明治三十一年)康有爲の變法自強の論議を容れて、新政を行はんとせられたことあり、西太后は素じて舊守派の人々に依つて稽起され、其の故を

西太后は一時皇帝を此所に幽閉したのであつたが、今尙ほ残つて居る堂前兩廡内の磚牆は、この時内外の連絡を遮斷する爲めに造られたもので當時はこの後方の宜芝館に居られた皇后とも中間の門を塞いで全く往來を停められたが、帝は其の後間もなく北京城内に遷されて南海の瀛台に幽せられたのであつた。斯うした關係から堂後にある皇后の便殿宜芝館から此所に通じる門も今尙ほ堵塞の儘の姿で残つて居る。

樂壽堂・宜芝館の西の一郭は即ち樂壽堂で西太后の便殿として用ひられた所である。其の前方湖畔に高く聳る大アーチは當時之にアーチ燈を掛けるに用ひられたもので東西兩廊の小窓に輝く電燈と共に、湖面を煌々と照して不夜城の觀あらしめた名残である。

堂内中央には西太后の寶座が設けられ其の東室は供佛の場所に、西室は寢室に充てられたのであつたが、西室には當時の寢床や化粧道具等も殆んど其の儘に残つて居り、東室の佛像は殆んど無くなつて居るが、此所には天津の人物として名を一世に擧げた泥人兒張の手になる、「木蘭從軍」と「張獻監眉」の兩傑作が、今尙ほ名匠の技倆を偲ばし

むべく保存されて居る。この堂内や兩廡の調度は非常に洋式化されて居る様であるが、之は皇太后の晩年に漸く歐米人との接近が多くなつた關係からで、英佛語に堪能でその儀禮にも通じた德菱・龍菱の姉妹が特に召されて奉仕したのも當時のことであるが、德菱の著に成る「Low Years in the Forbidden City」(清宮二年記)は、その内容に關しては兎角の批評もあるけれども、西太后晩年の日常を記したものと一として有名である。また此の後方の一字は太后の諸調度を藏した所、其の東方の永壽齋の一郭は太后晩年の寵を一身に集めたと謂はれる有名な太監李蓮英に、特に其の居所として賜つた所で、この中の家具類等を見ると寧ろ光緒皇帝を凌ぐものがあるのを思はしめる。

堂前の大石は青芝岫と稱し之にまつはる色々なローマン・スモ傳へられて居るが、實は乾隆朝に京西房山邊から搬入されたものと云ふのが正しい様である。此所には海棠・梧桐等の間に玉蘭花があり、花時には一層の趣を添へる。

長廊・堂西の邀月門から續く二百七十餘間の長廊は其の全長約七〇〇米に達し、簷下に描き出されて居る風景畫は西山から北京城内にかけての四季の景色であるが、今では

其の寶景亡びて僅かにこの繪によつて昔を知る様なものもある。門西に近い養雪軒の一郭は西太后駐蹕中に、女官達の休憩所に充てられた所であつたと云ふ。

排雲殿・長廊の中央に當る排雲門は排雲殿の正門で、門外には立派な銅獅と十二支の形をした太湖石とが排せられて居る。この中の一帯は既記の通り大報恩延壽寺の舊址で、特に周圍に圍壁を繞らして一郭を爲して居る。排雲殿はこの離宮の正殿で西太后駐蹕中の朝儀に當つては此所で百官の拜賀を受けられた所である。もと殿内には米國婦人カール Kaimine A. Carl 女史の描いた西太后の肖像が奉安されて居たが、熱河聖戰の際他の古物貴重品と共に南方に劫運されてしまつた。このカール女史は曾て總稅務司として在勤したサー・ロバート・ハートの親戚に當る人であつたと謂ふが、當時の駐支米國公使コンガー夫人より、セントルイスの世界大博覽會に出品する爲め、西太后の肖像畫を描く様に勧められ、この勸誘に應じて光緒二十九年（明治三十六年）より翠春迄北京に滞在して二枚を描き、一枚を米國に送り一枚を萬壽山に残したのであつたが、其の北京滯留中に見聞した清朝宮室の事情を纏めて著したものが

With the Empress dowager of China の一書で、西紀一九〇六年倫敦で出版せられ、この漢譯に『慈禧宮照記』があつて、かの徳菱の『清宮二年記』と共に西太后の晩年を知ることによい參考書である。

現在此の殿内から東西兩廡の芳輝殿と紫霄殿には南運を免れた寶物の殘品を陳列してあるが、特記すべき逸品として無い様である。

排雲殿の西廊を登つて上に進むと、乾隆帝御筆の榜聯を刻した見事な石坊が立つて居て、之を通つて門を上ると寶雲閣の前に出る。約五米平方の小亭であるが全屋銅のみを以て造り寸木を用ひず、中に置かれた銅卓でも重量二千斤を有すると謂ふ。乾隆二十二年の建築で、その形式は熱河離宮にある珠源寺の銅亭と相似たものであるが、熱河のものが當時朝鮮國王の寄進に係るものであつたのに對して、之は乾隆帝が特に有司に命じて建造せしめられたもので、亭の南窓下には東西に造營關係者の氏名が刻まれて居る。此所はもと毎月の朔望及び慶典に際して北側にある五方閣の壁間に佛像を掛け、喇嘛僧をして續經せしめた所と傳へられて居る。

ことを想はしめるものがある。たゞ、閣後象牙界の琉璃牌樓を飾る琉璃碑の色は、乾隆の昔ながらにその美しい輝きを存して遊人の眼を惹いて居る。

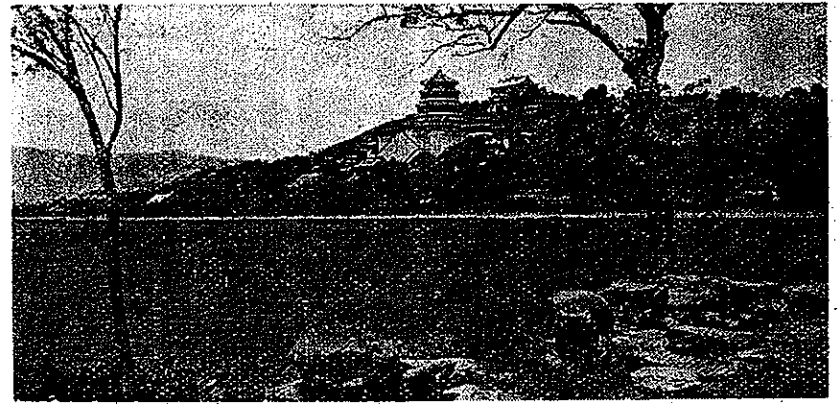
佛香閣の東西に設けられた小亭は東を敷華西を攝芳と稱し、中には大時計が置かれて居るが、東方敷華亭の後方を岩洞傳ひに下ると萬壽山昆明湖の御碑下に出る。碑は杭州法雲寺の藏經閣を摸して造られたと謂ふ轉輪藏の前にあつて、兩側には藏經閣に連る小亭の中に轉廻自在の木塔が立つて居るが、轉輪藏の名はこの木塔に因つたものでこの經藏の中にはかの傳大士とか笑佛とか呼ばれる東陽大士の像は見當らぬが、昔はこの中に俗に擦々佛と呼ばれる西藏式の泥製小佛像が數千體あつたと云ふ。

萬壽山昆明湖の御碑は乾隆帝の御筆に成るもので、其の幅約二米三、高さ約一〇米に達し、その裏面には御製の萬壽山昆明湖記を刻してある。乾隆十六年の御筆であるが、斯うした豐碑は明の十三陵の陵道碑亭にある大碑と共に北京近郊に於ける巨擘であらう。特に碑面の文字を上部の幅を狭くして下部に至るに従つて幅を増した所など王者の周到な用意が見られる所で、この碑は遙かにかの寶雲閣の銅屋

名勝蹟

し、船として観るべき所はむしろ鏡の方の部分に存する様である。

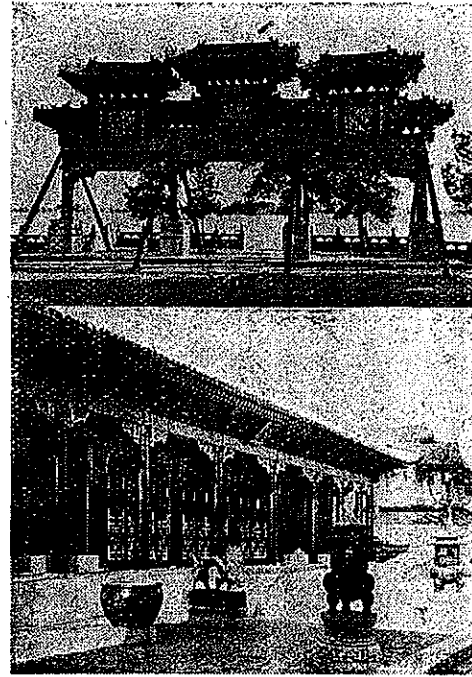
石舫の北にある橋は苕橋でこの名は橋下の水色澄泓で底に苕藻の羅々たるを見るに因つて起つたものと謂はれるが、今でもこの附近には苕藻軽く水面に浮んで、橋下の清澄なる水を透して銀鱗點々其の間に戯るゝ風情を窺ふことが出来る。この橋の北方近くに西太后始め帝后御用の畫舫を藏した船塢があつて、現在數十の小舟を納れてあるが何れも舳舟の類のみで、舳船一隻も無いのは頗る物足らぬ感がある。本来光緒皇帝の御船は水雲郷と稱し、西太后のものも鏡春艦と呼ばれて居たが、何れも數年前に沈没してしまつて現在界湖橋の東に其の残骸を横たへて居り、光緒皇帝御用の衛鳳は船塢の奥に沈んで居る中に、洋式型の安瀾編のみが僅かに浮び残つて居る。明治四十一年五月日本政府から西太后に贈呈した小汽船永和號も、二十數年間この船塢の西方に沈没して居たのを、昭和十五年の秋我が鐵道省の手で引き揚げて保存してあるが、之はかの日露戦争の時に清國政府から山東の塩を貰つたことに對して謝意を表する爲め、我が川崎造船所の手で建造せしめ、北京に運ん



英壽山佛香閣遠景

と東西相對して金石相應する位置になつて居る様であるが、此の碑を見て排雲殿の東を降れば、入口の排雲門に出られる様な順路になる。

排雲門から長廊傳ひに西に行くと、聽鸚館の小舞台を右に見ながら石丈亭に達する。即ち長廊の終る所で、其の北方には光緒皇帝の後宮宮女達を置かれたと云ふ西四所があ



排雲門前の御殿

勅政殿

り、有名な石舫はすぐその前にある。

石舫・石舫は今清晏舫の名を以て呼ばれて居る。乾隆帝の時に造られたもので、もと銀漢浮槎の意に則つたものと謂はれ、西太后の晩年になつて上に西洋式の二層樓を建てたり外輪を設けたりしたので、舊態とはすつかり變つた俗悪のものとなつてしまつたが、清晏舫の名に更められたのもこの時のことである。長さ約三二米、幅員七乃至八米を算

で此所で組立てたものであつた。

船塢の東に建つ城關式の建物は貝闕と稱せられ、額には宿雲簾となつて居るが、貝闕の意は蓋し楚辭の九歌河伯篇にある「紫貝闕兮朱宮」の句に出たものと思はれるから、蓋しこの水邊の城關を河伯の宮殿に擬した名であらう。道は此の邊から山上に登るものと山後に進むものとが岐れて居るが、右の山上への方を登ると湖山眞意の下に畫中遊の一郭がある。

湖山眞意は昔の清音山館の舊基で、今の名は光緒改建後に易へられたものであるが、此所に登れば西北一帯の山村水田悉く一目の裡に集り、まことに湖山の眞意を集めた観がある。またこの下の畫中遊は聽鸚館の舞台からでも道は通じて居るが、此所は中央の大事に配するに左右の兩小樓を以てし、亭後の山洞廻廊相接するところ其の排列の妙眞に人をして感嘆せしむるに足るものがあり、此所に登つて一瞰すれば山水映發人をして應接に暇あらしめざるを思はしむるものがある。

山の正嶺の一郭は智慧海で、丁度佛香閣正後に立つ紫香界の琉璃牌樓の後方に當つて居る。三楹琉璃磚の大殿で俗

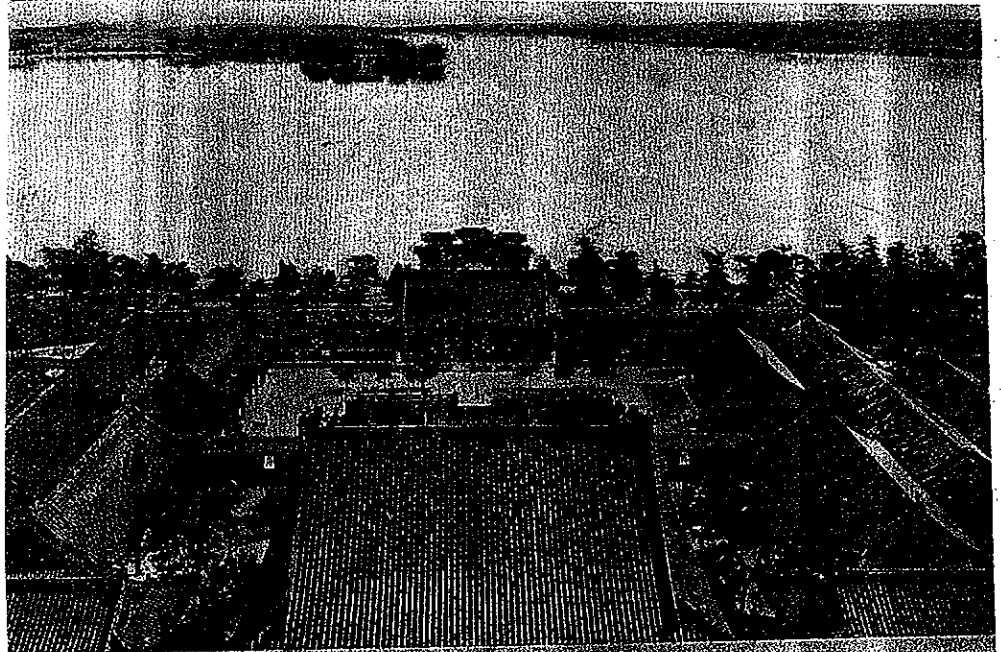
に無極殿と稱するのは棟宇窓戸等悉く疊むに磚瓦を以てし、寸木を用ひず全く樑を缺くに因る名稱で、また無量殿と呼ばれるのは中に無量壽佛を供するにも因るものであり。此所も乾隆の創建後英軍放火の時にやはり其の餘燼を蒙つたので、西太后の重修に依つて漸く現状に復したもので、殿圍を飾る外壁の琉璃磚に刻まれた佛像が十數年來盛んに毀ち取られて居るのは惜しいことである。

智慧海より少しく東方に偏在する中心を正面として、山後に須彌靈境の大喇嘛廟廢墟がある。即ち俗に後大廟と稱せられ、後方の北宮門を正門として建てられた西藏式の喇嘛廟でその制は大體に於て熱河八大喇嘛廟の一なる普寧寺(大佛寺)に象られたもの、様であるが當時この北宮門は實に清漪園の正門であつたのである。この一帯は英軍の兵火に焼かれた後殆んど手を加へられて居らぬ關係上、廢墟の間にも乾隆大造營の昔を偲ばしむるに足るものがあるが、只此の中に香巖宗印之閣だけは西太后の復舊當時に新築されたので、周圍の殘壁と不釣合に其の中央に立つて居て、この廢墟特有の氣分を壞す様な觀を呈するが、これは山前排雲殿の新建に際して、大報恩延壽寺の焼けた跡に残つて

居た佛像を移す爲めに、此所に新たに建てられたものである。斯うした西藏式建築は北京には珍らしい存在で、之を除いては香山に昭廟の一郭が残つて居る位なものである。

また昔この萬壽山の正門をなして居たと云ふ北宮門内には、もと蘇州街と呼ばれた一衢があつた。之は乾隆末年に建てられたもので清漪園内に住む人々の爲めに日用品を賣る商肆が設けられて居た所で一に買賣街とも稱せられ、店主や店員にはもつぱら宦官を以て之に充てゝ居たが、其の布置は大體に於て蘇州の縮圖とも稱すべきものであつたと傳へられて居る。

須彌靈境の東方に小關城があつて、東に寅輝西に挹爽の額を掛けてあるが、昔はこの邊の山阜に桃李相雜りて茂り花時に於ては紅白交々色を競ふて美觀を極め、特に牡丹の良種が澤山有るので有名だつたが、これは西太后の時に宮中に移したので其の後株を絶したとのことである。  
有名な多寶琉璃塔はこの東方に立つて居る。即ちむかし此所に花承閣と稱せられた直徑約五〇米の半圓形の台城があつて、塔はこの西院に建てられ、八面七級、高さ約一五



萬壽山下  
佛香閣  
昆明湖眺望

名勝舊蹟

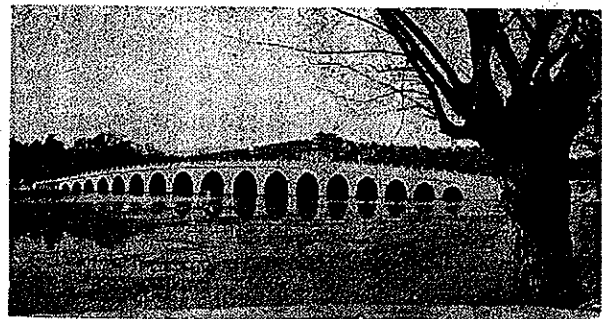
米、基壇約二米五、合計一七米五に及び頂玉の黄金は乾隆そのかみの光りをそのまゝに燦然と輝いて居るが之は玉泉山及び香山に残る多寶琉璃塔と共に珍らしいものである。塔の東方に稍離れて景福閣がある。乾隆の曇花閣の舊基で光緒十八年（明治二十五年）の重建に係り、もと西太后萬機の餘暇觀月の場所に充てられた所と云ふが、境内は眺望まことに絶好で、前は昆明湖に浮ぶ十七孔橋の姿が繪の様に眺められ左には圓明園の大廢墟も指呼の間に通つて居る。この東に近く山の中腹には樂農軒・益壽堂などがあり、更に山を下れば諧趣園がある。

諧趣園は即ち初名惠山園の名を以て知られて居る。乾隆十六年皇帝南巡の砌り、江蘇省無錫の惠山々麓に營まれた秦松齡の私園を見て其の幽致を喜び、其の布置を描き歸つて本園を造營し、中に就て八景を撰んで惠山園八景と稱し御製の詩を題せらるること三度に及んで居る。諧趣の名は其の御製詩の序文中にある「一亭一徑。是諧奇趣」の句に因んで光緒十九年の重修後に改められたものであるが、此所は特に秋の幽趣と蓮花の季節とが良い様である。諧趣園を出で南に赤城起霞の城關を過ぎれば徳和園に出る。即ち乾隆の怡春堂の舊基で光緒十八年の改建であるが、此所が西太后の觀劇に用ひられた大舞台で、臺三層を重ね上層から福台・祿台・壽台の名で呼ばれて居る、臺下には井戸六個所が穿たれ、正面西太后以下帝后等の觀賞に充てられた所を頤樂殿と稱し、その中には太后及帝后の寶座も設けられて居り、東西には特に王公大臣等の陪觀の席も設けてあるが、斯うした大規模の舞台としては故宮の暢音閣と熱河離宮の清音閣とが大體に其の制を同じくして居る様である。以前は此所に上演する劇の爲めに正門外の一郭に昇平署と云ふ役所があつて、其の管理をして居たのであつて、當時は北京の名優悉く園内に召されて入神の技を獻じ京調各派の諸優その優遇に感じて清末梨園の發達を招來したのであつたが、此等の老優も今や殆んど亡くなつて現在は僅か一兩名を残すに過ぎない。

舞台の中央に陳列してある自動車は光緒二十九年に兩廣總督の獻上したもので、蒸汽に因る動力で駛る装置になつて居る。西太后は文昌閣より十七孔橋に至る東堤の往復に數回用ひられたと云ふが、何分夏季を中心とする駐蹕中に於て火氣を使用するこの乗物は餘り喜ばれなかつたもの、



1 徳和園の園門 2 西太后の共周園 3 玉泉堂の帝寶座 (永和水鏡) 4 永和水鏡 (玉泉山) 5 石頂塔 (玉泉山) 6 天下第一泉 (玉泉山)



十橋であつたと云ふが、自動  
橋車としては珍らしいもので  
あらう。また舞台裏に當る

徳和園の門内一帶は宦官居  
住の場所に充てられた所と  
云ふが、當時の宦官は現在  
では一人も園内に居なくな  
つてしまつた。  
斯うして徳和園の門を南  
に下れば入口に近い正殿の  
仁壽殿前に入る順路となる  
のである。

昆明湖の西堤は杭州西湖  
の蘇堤に模して六つの橋梁  
を架して之を連ねて居る。即ち北から界湖・幽風・玉帶・  
鏡・練・柳の順序で、この中の幽風橋は乾隆の桑梓橋で西  
太后當時の政稱であるが、其の他は皆乾隆の舊名に依つて  
居る。此等の諸橋は色々な形を以て楊柳茂り並ぶ長堤上を  
點綴し、江南水郷の景趣を描き出して居るが、昆明湖の一

大水源をなす玉泉山の水は玉帶橋下よりこの湖中に注いで  
居る。昔乾隆の頃にはこの堤上を行人の通遊に委して居た  
ども云ふが、今は園圍に頑丈な圍牆が繞らされてその長さ  
十三里と稱せられ、之に十三の門を開いてあつて、西太后  
當時は門禁嚴重を極め、有名な李鴻章の如きも曾て勅許を  
得ずして園内に入つたと云ふ賑で、一切の官職を褫奪され  
た上に三萬九千兩の  
罰金を徴せられた様  
な例もあつた。

湖中の島は南湖と  
稱し俗に龍王廟とも  
呼ばれて居るが、周  
圍約四〇〇米の島内  
には廣潤靈雨祠と稱  
せられる龍王廟があ  
つて、清朝時代には  
天子祈雨の靈場であ  
つたが、此所の龍王  
は西方鎮護の神たる。



西太后御用の洋車

關係から金面の珍らしいもので、また遙かに排雲殿や佛香

閣と相對して島の北岸風翠閣の上に立つ涵虛堂は、乾隆  
當時の望蟾閣の舊基に建てられたもので、昔の建物は既述  
の通り武昌の黃鶴樓を模したものであつたと謂はれて居  
る。また島の東南に在る鑑遠堂は曾て西太后の手に擁立せ  
られた大阿哥の學問所として用ひられた所と傳へられ、現  
在此等の建物を利用して萬壽山管理事務所ホテルを經營  
し、其の西岸の一帶は夏季の游泳場として使つて居る。

湖水は島南の繡漪橋下より園外に出で運河となつて北京  
に流れて居るが、西太后は好んでこの運河を溯航して行啓  
されたもので、其の時は西直門外高梁橋の傍にある倚虹堂  
の離宮から乗船し、途中の廣源閣で船を乗り替えて繡漪橋  
外に達せられるのを例としたと云ふ。

湖の東堤は知春亭の東南の文昌閣から繡漪橋近く迄及ん  
で居り、乾隆の築造で十七孔橋の東際にある八方亭の北に  
は、この長堤の鎮物として置かれた有名な銅牛がある。

この外西堤外の治鏡閣の舊址、その南方の暢觀堂、藻鑑  
堂の舊址等を始め、水師學堂の舊址、東八所、發電所の舊  
址等相當な歴史と由緒とを有つものはまだ相當に多いし、

此等の舊址を通じて乾隆文化の片鱗を窺ふことも出来る。

擬て萬壽山を見て考へ度いのは、此の大離宮が乾隆造營  
の當初は全く皇帝の母后に對する孝養の爲めの造營であ  
り、又この昆明の大湖水も之を入旗水師の訓練に利用する  
と云ふ様な、王者としては非常に立派な目的の爲めに創め  
られたものであつたが、後に西太后の復舊重修は之を以て  
専ら自己享樂の場所に充てられる爲めであつてこの時は北  
洋水師の創設費の大半を之に投じた上に、已設の水師學堂  
をも撤裁してしまつたのである。明治二十八年威海衛に於  
て丁汝昌が北洋艦隊を以て我が軍門に降を講ふた時に、清  
廷若し我が議を容れて頤和園の造營を中止して居たら今日  
の敗はあるまいと言つて泣いたと傳へられるが、國家の  
興隆と衰亡とは實に慙うした所からも岐れるものである。

### 玉泉山

玉泉山は萬壽山の西約四軒にある。山の成因としては昔  
北京平野の大陥没があつた時に取り殘された大岩塊と考ふ  
べきもので、地質學的に見ると古生代の奥陶紀から石炭紀  
二疊紀に屬する岩層部が多い様で、此等の斷層面は山の到

る所に見受けられる。

此所には古くは金の章宗（皇紀一八五〇年……一八六八年）の時に、芙蓉殿と云ふ離宮が山頂に建てられて、皇帝游幸避暑の場所に充てられたと傳へられ、また所謂西山八院の一なる香水院の離宮も亦此所に造營せられたとも謂はれるが、章宗が屢々此所に幸したことは金史の章宗本紀に據つても明かである。然しながら西山一般の歴史から稽へると、この山はもつと早くから開かれて居たことを想像せねばならないと思ふ。

更に元に入つては、世祖（皇紀一九二〇年……一九五四年）の時に此所に昭化寺と謂ふ寺が營まれたと傳へられるが、當時此の玉泉の流を開いて漕運を通じ山の樵采漁を禁じ河を疏したこと等も元史に見えて居る。また明の時には、英宗の正統年間（皇紀二〇九六年……二一〇九年）に、上下の兩華嚴寺が建てられて天子之に額を賜ふたこともあつた。

斯くて清に入つてから聖祖の康熙十九年（皇紀二三三四年）に離宮を建て、澄心園と稱し、同三十二年に靜明園と名を改められたが、高宗の乾隆（皇紀二三九六年……二四

五五年）の初年に大規模な増築が行はれ、同十八年には特

に親ら園内の佳景十六を撰んで、四字を以て各景の名を定め、御製の詩を作つて此等の諸景を稱へられた。更に同五十七年には園内一般に亘つて大修繕が加へられて、其の舊觀を全く一新してしまつたのである。然るに其の後咸豐十年（皇紀二五二〇年）にはかの英佛聯合軍の侵入があり、此所は英軍の手によつて、園内を擧げて一炬灰燼に歸したので、其の後西太后の時にかの萬壽山と共に一部を復舊せしめられたけれども、北清事變に際しては又々洋兵の占領する所となつて再び其の狼藉を蒙り、其の後一部には修繕を加へられたが到底舊態に復するには至らなかつた。かくて民國三年から萬壽山頤和園の離宮と共に入園料を徴して一般に開放せられたが、此所は有名な天下第一泉の所在地として知られ、殊に初夏から晩秋にかけては都塵を避けて清遊を試みる人が多い。

現在入口になつて居るのは小東門で、もと東西南の三宮門が開かれ、南宮門がその正門となつて居たのであつた。

この門を入つて含輝堂の前を南に進むと裂帛湖の畔に出る。裂帛湖光は園内十六景の一で、對岸の岩壁に龍首の備

に刻せられた裂帛湖の三字は乾隆帝の御筆である。湖心に圓石の積み累ねられて居るのは海眼（鹽分を含んだ水の噴出する孔）鎮壓の石塔と傳へられるが、この邊の水中には自然生の車軸藻の一種があつて、透明な水中に黒緑色の美しい球形藻の生じて居る所は、まことに玉藻の名をも聯想せしむるものがある。

湖畔を西に松柏繁茂する間を行くと翠雲堂の前に出る。天を摩して立つ二本の老栢（白松）は其の樹齡實に一千年と稱せられ周圍も約四米半を算するものがあつて、堂陰の壁間に乾隆御製に係る古栢行の一首が石に刻してある。この邊にはなほ數本の老栢があるけれども惜しいことにはこの數年來枯死するものが多いが、これは曾てこの翠雲堂を汽水の製造所として用ひた當時、藥液を地下に流し込んだのに因ると謂はれて居る。

翠雲堂裏の華滋館はその昔乾隆帝臨幸に際して駐蹕の場所に充てられた所で、楠木の丸柱に桃柳木の楹板を配した所は人をして一驚を吃せしむるものがあるが、この建物はかの英軍侵入に際して幸にも只一つ其の魔手を免れて焼失しなかつたものであつたと云ふ。

翠雲堂の西に船塢があつて、もと畫舫を格納した所であるが、天下第一泉に連るこの水は、透澄その度を逸して色青く光るところ寧ろ一種の凄みをさへ感ずる位で、昔は遊人が銅貨を投げ込んでその運々として沈む姿に興がつたものである。

此所から湖岸に沿つて進むと龍王廟前が出るが此所に玉泉趵突の碑が立つて居る。即ち乾隆帝の御筆に係る北京八景碑の一つであるが、この碑だけは他の八景碑に比して著しく小さく、碑亭の設けも無いのは斯うした崖上に立てられた關係からであらう。この八景の一なる玉泉趵突は古くは玉泉垂虹とも稱し、玉泉を飛瀑と見て垂虹の名を與へられて居たのを、乾隆帝は其の不當を稽へて趵突の文字に改められたもので旁の龍王廟は清朝時代には祈雨の靈場として、歷代皇帝の崇信厚かつた所である。

天下第一泉はこの龍王廟下の岩隙から噴出する靈泉で、上の岩壁には乾隆帝御筆の天下第一泉の額と、其の傍に御製天下第一泉記とを嵌入してある。この天下第一泉記はこの靈泉を天下第一に治定した經緯を記したもので、それに據ると帝は當時天下各地の名泉に就て各々其の比重を測定



し、其の軽いものを夾雑物の少いものとして等位を定められたもの、様であるが、今其の碑文を摘録して見ると、「水の徳は人を養ふに在る。其の味は甘きを貴び、其の質は輕きを貴ぶ。水を辨ずる者は恒に其の質の輕重を以て泉の高下を分つ。嘗て銀斗を製して比較して見た所が、京師玉泉の水は一兩で、塞上伊遜の水も亦一兩、濟南珍珠泉は一兩二厘、楊子金山の泉は一兩三厘、惠山虎跑の泉は玉泉より重きこと四厘、平山の泉は玉泉より重きこと六厘、清涼山・白沙・虎邱及び西山碧雲寺の泉は玉泉より重きこと一分である。然るに玉泉より軽いものがあるがそれは泉で無くて雪水である。雪を煮て之を玉泉と比べれば輕いこと三厘であるが之は恒に得られるもので無い。故に山下より湧出する冽泉は玉泉に勝るものは無い。故に玉泉を以て天下第一と定むるものである云々」と云ふのである。

この泉は陶突孔の外にも附近各所から湧出して居るのを見受けるが、昔はその噴出旺盛で遙かに水面を衝いて沸き上り、恰も濟南趵突泉の觀があつたが、民國十七年の夏から急に其の勢を減じてしまつたのである。然し斯うしたことは時々あるもの、様で、傳へられる所によると同治

年間（明治初年頃）に此の水が一時殆んど涸渇に瀕したこともあつたと謂ふが、本來西山一帶の湧水量は永定河の水と密な關係を有するもの、様に考へられる。

此所の水は玉水又は御水と稱して、清朝時代には毎日八十罐を北京に運搬し、以て宮中の御用に充てたのであつたが、今でもこの水が茶に適すると云ふので愛用する人もあるとの事である。この泉に玉峰塔の影の映る所はまた實に壯觀で水の清冽と相俟つて他に其の例を見得ざる所である。

天下第一泉の南にある湖心の平台にはもと芙蓉暗照・廓然大公等の諸景があり、中の島には樂景閣と云ふのがあつて芙蓉暗照の額は此の中に掲げられて居たと云ふが、金の章宗の芙蓉殿も此所に有つたとも傳へられて居る。廓然大公はもとの勤政殿で、乾隆帝の臨幸に際して聽政の場所に充てられ、其の前に園の正門が設けられて門外には立派な牌樓があつたが今は只その礎石のみを留めて僅かに昔の佛を偲ぶのみである。

天下第一泉の西南山上に華藏海の舊址がある。梵宇は夙に亡びて只八面七級の石塔を残すのみであるが、この石塔

は下段に釋迦出家の顛末を刻し上段には觀音金剛等の立派な彫刻があるが、近頃破損の度を急に加えた觀がある。この邊から山上を仰げば玉峰・瑠璃・妙高等園内の諸塔遠近に散見し、西洋人がこの山を稱して塔山 Pagoda Hill の名を以てするのも首肯出来る。

尚ほ天下第一泉の西の方からこの石塔下の眞武廟附近にかけては、觀音洞・地藏洞・呂祖洞等の洞窟があつて、洞の名に應じた佛像がまつられて居る。

石塔の北の方にある一郭は仁育宮の舊址で、俗に西大寺と稱せられ、乾隆二十一年の創建で、もと正殿に東嶽大帝を祀り其の後方の玉宸寶殿には玉皇上帝を祀つてあつたが、英軍の手に一炬殆んど烏有に歸してしまつたのである。此の邊には多數の老松が林をなして生ひ茂り、松籟風韻相和して樹間をわたるところ、人をして身の塵外にあるを覺えしむるものがある。

仁育宮の東南に接して聖緣寺があつて、もと境内には天王殿・能仁殿等の建物があつたが何れも夙に荒廢に歸して、今僅かに寺後に七級の多寶瑠璃塔が残つて居るが、これは萬壽山後大廟の東にある花承閣舊址に残るものや香山

の瑠璃塔等と共に珍らしいものである。

瑠璃塔後方の小徑を辿つて山上に登れば華嚴寺がある。即ち明の英宗の時造營せられた上華嚴寺の址で、この東方に下華嚴寺の舊址があり、園内十六景の一なる雲外鐘聲はこの邊の景觀である。内に特に見るべきものとも無いけれども寺後に資生洞があつて送子娘々が祀つてあり、この邊から下華嚴寺の後方にかけては華嚴洞・羅漢洞・水月洞伏・魔洞等の洞窟があるが、この中で華嚴洞だけは一覽に値すると思ふ。

この華嚴洞は上華嚴寺の東方約二〇〇米に在つて、洞内には中央石龕内にある觀音菩薩を中心として、其の左右から天井にかけては、無數の小佛像を刻してある。彫刻の時代は大體乾隆朝の様で、餘り古いものでは無いけれども其の姿態千種萬様で、格別の趣があり、洞口や石龕には乾隆御筆の詩や聯も刻してある。

山頂の玉峰塔は即ち園内十六景の一で玉峰塔影と稱せられ、塔はその制を鎮江府金山江天寺の慈壽塔に取つたものと云ふ。七級八面高さ二百尺と稱せられ、中は螺旋形の階段を廻つて七層の上まで登攀することが出来るが、由來

北支那の塔は風の多い關係から窓を開いて登攀に供する構造のものが少いが、北京でこれに類するものとしては崇文門外法塔寺の塔を有するのみで、それが金時代の建築に成るのに對してこの塔は乾隆朝の建築の様であるから、之と同時に代同形塔としては熱河避暑山莊の塔などを擧ぐべきものであらうが、この塔が斯うして山嶺高く吃立する雄姿は北京の近郊に於ても他に見られざる偉觀である。頂層に登れば萬壽山や西山の諸峰も脚下に俯瞰せられ、近郷の水田は恰も棋盤の面の觀がある。各層にはもと銅製の佛像を供奉してあつたと謂ふが、北清事變の時皆外國兵に持ち去られたとのことである。

この頂上には塔南に香嚴寺の舊刹があつたが、昔外兵の爲めに燒かれて久しい間荒廢して居たのを數年前修繕を加へて、大略原狀に復したと謂ふ。寺の建築は大體に於て山形に從つた三段建築の様式で、塔下には丈餘の磨崖を思はしむる石壁が屹立し、もと心經と心經塔圖とが刻せられて居たと云ふが、火災の爲めに壁面漫漶として判明しない程度に荒れて居る。又西側の小樓中にある接引佛は丈餘の大像であるが、場所の關係上訪ふ人の少いのは氣の毒であ

る。

塔後の山頂は即ち妙高台で今尚ほ舊建築の基石を存して居る。此所に立てば東方遙かに帝城を望み萬壽山や昆明湖は眼下に其の姿を横へるかの觀がある。又程近い功德寺の古刹や、明の景帝陵、金山から紅山の大礪、健銳營の小礪など何れも指呼の間に眺められ、西方遙かに碧雲寺や香山も望まれる。

此所から北に山を下ると峽雪琴音の一郭が小峽を間にし、南に建て連ねられて居る。麗曜軒・俯青室等を連ねるに曲廊を以てした所また格別の趣があるが、昔はこの小峽の石罅より泉水の湧出もあつたと云ふ。

此所を過ぎれば東側の阪路を辿つて山を下るのが普通の觀光路であるが、峽雪琴音の東方に當り、右手に高く山の中腹にある廢墟の一郭は叢雲室の舊址で、その形によつて俗に椅子圈とも稱せられた所であつたが、夙くから荒廢に歸してしまつて居る。

また峽雪琴音から北の小山を越して進むと妙高寺の舊址があるが、今はたゞ寺内に有つた妙高塔のみが風雨に暴されて残つて居る。この塔に就て注意すべきはそれが印度式

の建築であること、其の制は德勝門外黃寺の塔に類似したものであるが、強いて其の同系統のものを尋ねれば五塔寺や碧雲寺の金剛寶座もこの類例である。

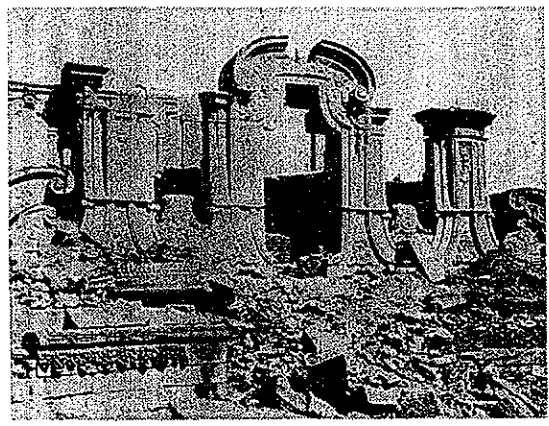
塔下にある楞伽洞外の壁間から塔下の岩壁にかけては、諸々に怪神奇像を彫刻したものが、見られるが此等は所謂八部の惡神像と謂はれ、その傍の磨崖に刻まれた小飛來の三字はこの邊を造營した印度僧の名であると云ふ。

かくて山下に降つて寒墟洞の前を過ぎ試墨泉の傍を通るともとの入口に出る順路となるのである。

圓明園址

萬壽山頤和園の東北にはもと圓明園の大離宮があつて、其の東から東南にかけては長春・萬春の兩國も之に連り、一大離宮地を形成して居て、俗に此の三園を總稱しても亦圓明園と呼んで居た。清初の康熙年間の造營に係るところであつたが、康熙帝は之を雍正帝に賜ひ、雍正帝の手に重修を加へられた後更に乾隆帝は大規模な改修を行はれ、殊に乾隆初年には當時北京に居た西洋人耶蘇會士の手によつてかのヴェルサイユの宮殿に模したと云ふ西洋建築も竣工し、

之に幾多の大噴水を配して輪奐の美を極め、爾後來朝する西洋人共も其の盛觀に驚嘆して「萬園中の園」とまで歎賞した程であつたのみならず、園内に藏せられた珍寶は清初康熙乾隆の美術の粹を集めて支那全國の珍寶その半は圓明園に在りともて稱せられた程であつた。斯くて歴代皇帝の好んで駐蹕せらるゝ所となり、四百餘州の政令の多くは此所から發せられたのであつたが、乾隆帝の曾孫に當る文宗の咸豐十年（皇紀二五二〇年）萬延年。西紀一八六〇年）十月英佛聯合軍の手に占領せられ、佛國兵の手に散々大掠奪が行はれた揚句、兇暴な英軍の手に放たれた業火に園内悉



圓明園址 (一) 遠音殿の廢址

から發せられたのであつたが、乾隆帝の曾孫に當る文宗の咸豐十年（皇紀二五二〇年）萬延年。西紀一八六〇年）十月英佛聯合軍の手に占領せられ、佛國兵の手に散々大掠奪が行はれた揚句、兇暴な英軍の手に放たれた業火に園内悉

蹟 舊 勝 名



臥佛寺の涅槃像

唐代の創建で清の雍正帝の時に十方普覺寺の名を賜ひ今それに依つて居る。後殿に安置せられた銅の臥佛は長さ二丈餘と稱せられ、釋尊涅槃の像で周圍の脇侍と共に出色の作である。前殿の

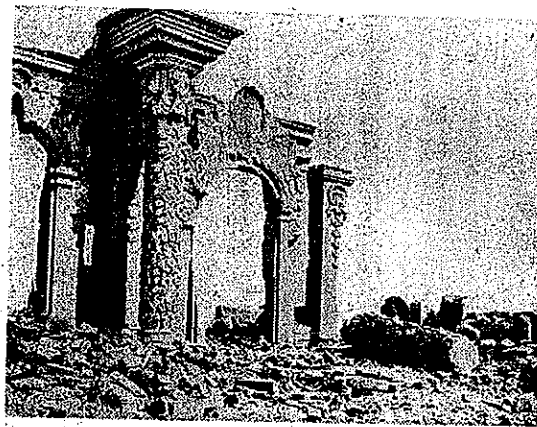
前に植ゑられた二株の老木は涅槃に因む沙羅双樹で、開基當時に印度より齎らされたものであると云ふ。臥佛の大像は北京城内にも二箇所ばかりあるが何れもこれに及ばざること遠きものがあり、また沙羅双樹もこの外監製廠の西頂廟・香山・八大處の香界寺等に

もあつたが、其の樹齡に於て又其の花の大きさに於て此所の物に一步を輸する觀がある。五月下旬が開花期である。寺の西北に有名な退谷の勝があり寺内の西郭にはブールの設けもある。

碧雲寺

臥佛寺の西約二軒にある。元の耶律楚材の裔阿勒彌が其の宅を喜捨して建立したもので後臺の金剛寶座は乾隆十三年（皇紀二四〇八年）西藏僧の齎らせる印度須彌山の金剛寶座の型に據つて築造したものでかの五塔寺の塔座と略類似したものである。民國十四年三月孫文の北京に客死するや其の遺骸を此所に移して安置し、十九年五月南京に遷葬したのであつたが、其の後この跡を孫文衣冠塚として之を保存して居る。寺内羅淨堂の五百羅漢は杭州淨慈寺のものに横して乾隆年間で作られたものである。

金剛寶座後方の圓丘はかの明の奸宦魏忠賢の墓地と傳へられるもので、清初御史の上奏によつて取り毀されたものである。



明景帝陵

く灰燼に歸し、其の後同治年間に一部の重修再建が行はれたが、北清事變に際して附近暴民の荒す所となり、一大廢墟として空しく慘憺たる姿を横へるに至つたのである。

現在萬壽山の東北に近い邊から清華園附近に亘つて展開する大廢墟園址は、至る所に残る苑池・假山の間に、宮殿樓閣の殘礎白石礎々として、往昔の盛観のあたりに指觸

せられ、殊に長春園の北郭一帶に殘る西洋建築の殘骸は、當時の意匠彫刻歴然としてその跡を留め、ルネッサンスとロココとの交錯を東洋の一角に見受ける點などは頗る趣の存する所である。

民國以來園内の珍岩奇石の盜賣が

多く、第一歐洲戰爭當時には礎石石柱等の接合に用ひられた鐵材を地底深く掘つて取り去る輩があり、更に近來煉瓦や石材をも盜取する者が横行し、由緒ある大離宮の廢址も漸く湮滅を見んとしつゝあるかの觀があるが、斯うした廢墟を見るにつけても最も痛切に感ぜさせられるのは敗戦の悲哀である。

明景帝陵

玉泉山の北にあるさやかな舊陵である。景帝は明朝第六世の天子英宗の弟であつた、英宗が奸宦王振に勧められるまゝに蒙古也先の入寇を親征して軍を還す途中八達嶺の北で蒙古軍の重圍に陥つて虜へられた時に即位して第七世の帝祚を踐み景泰と改元したのであつた（皇紀二二〇年）が、後英宗歸還して復位するに及び在位七年にして退位し後に王禮を以て此所に葬られたのである。陵は久しく荒廢して居たのを光緒皇帝の時宦官に命じて修繕せしめられたものである。

臥佛寺

### 香山及び開武樓並に洞

香山は碧雲寺の西南にある。古く遼の中丞阿里吉が私宅を喜捨して建てた香山寺があつたが金世宗の大定二十六年（皇紀一八四六年）之を重修して大永安寺と謂ひ又甘露寺と稱し清の乾隆十年（皇紀二四〇五年）に離宮を營み靜宜園と名づけられた。境内には老樹が林をなして茂り北京八景の一なる西山晴雪の碑は山の中腹にある。今では紅十字醫院・慈幼院・女學校等が設けられ甘露寺の建物は旅館として用ひられて居る。東北の一郭には西域式喇嘛廟として建てられた昭廟の廢墟があり立派な七級の琉璃塔が残つて居る。香山東南の小坂を越すと開武樓がある。乾隆朝に於ける金川土司の征伐に偉功を立て、爾來香山を中心としてこの一帯に屯田せる健銳營八旗の閑兵を行つた所で、東西の村落間に點在する烽火臺の建物は當時金川土司の城塞に模して作られた礮（註）の遺物で附近の村落には當時投降した苗族酋長等の子孫も居住して居る。

（註）乾隆十二年（皇紀二四〇七年）二月四川の金川土司（成都の西）が反したの下之を征伐せしめられたけれども敵は山地に礮を作り之に據つて防禦す

る爲め官軍苦戦を續くも平定すること能はず攻めあぐんで居た。當時礮を作つて礮を攻むるの獻策をした者があつたけれども帝は北京西山の地に礮を作つて之を攻むる練習を爲さしめ其の技に通ずる者三千人を得、大學士忠勇公傅恒をして之を率ひしめ金川を攻めて遂に亂を平したのであつた。斯く其の凱旋後此等八旗の精銳に西山に地を賜ふて屯田せしめ之を健銳營と稱し毎年孟夏頃の攻撃演習を行はしめて之を閑兵したことが開武樓西方に近い實勝寺の御製碑文に見えて居るが之に據ると礮の名稱は結局金川土民の其の棟屋を稱する土語である様に見られる。此の健銳營の子孫は今尚ほ香山を中心とした東西に居住して居り礮の遺物としては萬壽山の西方に六群の大礮があり健銳營諸部落の間に七十二座の小礮があるが要するに點在する後継で即ち一種のトーチカである。

### 西山八大處

香山の西方遙かに翠微、平坡、盧師の三山が鼎立する間に八個の名利が連つてゐる。これが俗に八大寺と稱せられるもので、多くは明代の創建であるが古くは隋唐の開基に係るものもある。麓の方のものから名を示すと長安寺、靈官寺、三山庵、大悲寺、龍王堂、香界寺、寶珠洞の順序で東方に離れて秘魔崖の一古刹がある。今は山麓に西山ホテルも經營せられて自動車の便があり、殊に紅葉の名所として

て秋の行樂に好い所である。

### 黑龍潭、温泉並に大覺寺

萬壽山の西北にある西北旺の部落から西に西山の陰を行くと黑龍潭の勝がある。明清時代皇帝祈雨の靈場で龍王廟には當時の御碑數基がある。龍池は徑約二〇米の圓池で清水滾々として湧出し中に龍が棲んで居ると云ふ傳説がある。附近に畫眉山と云ふ小山があつて黒色の石を産し、昔はこれを用ひて官女の眉を畫いたと云ふ。

潭西の自家噴を過ぐれば温泉村がある。低溫の炭酸泉で夏季の入浴に適し、傍の娘々廟には曾て温泉女子中學が設けられて居た。又温泉の西北に大覺寺がある。もと金章宗の設けた西山八院の一なる清水院の舊址と傳へられ明宣徳三年（皇紀二〇八八年）の建立に係り西山屈指の大刹である。

### 妙峰山

北京の西北八十餘支里の北安河から、更に山を登ること四十餘支里と稱せられる峻險な靈山で山頂は標高實に一一

三〇米を示す、天仙聖母碧霞元君に子孫、眼光の兩娘々を配して奉祀し、毎年四月一日より半月に亘る開廟があり北京、天津方面からの參詣者が絡繹として股賑を極める。登山の路は四路あつて即ち三家店より登る南道、大覺寺より登る中道、北安河より登る北道、石佛殿より登る老北道である。開廟中は北京より乗合自動車の便もあり事變前には邦人の參詣者も多かつた。この廟は密雲縣の南にある髻髻山と共に北京に於ける娘々信仰の二大靈山で此等の開廟は北京に於ける主要な年中行事の一となつて居る。

### 農事試驗場

西直門外の農事試驗場は俗に三貝子花園、萬牲園等と稱せられ、邦人の間には植物園の名で知られて居る。西直門の西約二軒に正門を有し、萬壽山昆明湖より北京に通ずる運河として知られた長河の南岸から、西苑や西郊飛行場に至る新街道の北に沿ふて、東西約一軒半南北約半軒の地域に亘る場内の面積は一、〇一二畝（約我が一八八、五〇〇坪）と稱せられて居る。

場域はもとの樂善園及び繼園の舊址に、廣善惠安兩寺の

名勝舊蹟

したのであつたが、その後成豊、同治の間に屢々所有主を替へ、光緒四年（明治十一年）に再びその舊主某貝子の裔の手に回贖せられて名を繼園と改めたと云ふが、其の後に何かの事情で官有に歸し、樂善園に併合せられて内務府奉宸苑の所管となり、後遂に農事試験場の域内に編入せられたものである。

清末光緒三十二年（明治三十九年）四月に商部の奏を准して、此所に農事試験場を新設せられることになり、誠璋を總辦に任命して創立費六〇萬兩を投じて之が經營に當らしめ、二年の日子を費して落成したのであつたが、當時端方が獨乙から購入した獅子・虎・象・豹等をも此所に飼養して動物園も設けた。當時の商部尙書は慶親王勳奕の長子貝子銜載振で、即ち振貝子と稱せられた人であつたが、この人は明治三十六年に第五回内國勸業博覽會の我が大阪に於て開催せらるゝや、特に派遣せられて日本の商工業を視察し、歸つてから商工農部の設立を奏請して商部尙書に任ぜられ、其の後光緒三十三年三月收賄の廉によつて父の慶親王と共に彈劾を蒙つた男である。當時光緒皇帝も西太后も、この農事試験場の創立に對しては非常な興味を有せら



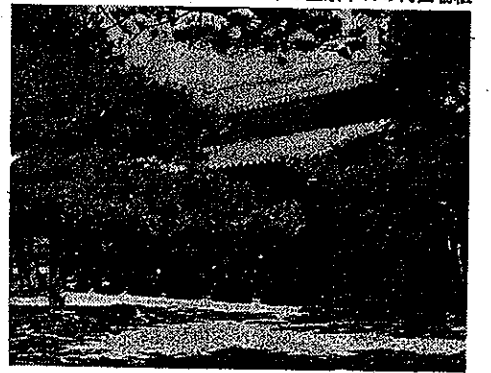
植物園内のサレン風亭

廢址を取り入れて、之に民有地約一〇〇畝を加へたもので、即ち東方の過半部はもとの樂善園の舊址、西半部はもとの繼園の舊址で、西南の一部はもとの廣善・惠安兩寺の地域、東南隅の一部が民有地を買ひ上げた個所である。

此の中の樂善園は古くは康親王家の別業であつたが、久しく頽廢して居たので乾隆十二年（皇紀二四〇七年）に修葺を加へて御園とせられた。當時この規模を見ると北纏三楹の宮門を有し、中には大小幾多の亭榭や堂宇が池塘の間に相接して何れも乾隆御筆の額を掲げられて居て、地の長河に面する關係上、高梁橋畔の倚虹堂から

萬壽山に到る行幸には、龍舸必經の場所として輪煥の美を極めたのであつたが、清末に至つては國庫漸く乏しく、頗る荒廢の模樣が窺はれて、遂に光緒三十二年に農事試験場の地域に入れられたのであつた。この康親王家と云ふのは

植物園内の日本家屋の一



清太祖の第二子禮烈親王代善の孫に當る康親王傑書之裔であつたが、乾隆の當時この別業の荒廢して居たことに就ては乾隆御製詩にも『題樂善園詩』の中に

宴遊既冷落。草樹就荒蕪。亭榭早無存。半立餘頽墻。等の句があるのを見ても知られる所で、これは乾隆十七年の御製である。

また繼園は即ち所謂三貝子花園で、道光年間（皇紀二四八一年—二五〇一年）に某貝子の別業となり、可園と稱

れたとのことで、境内林木の保全に對して迄も屢々有司に注意を與へられ、又再三行幸して親しく視察せられたと傳へられて居るが、現在残つて居る日本家屋や洋式樓房の暢觀樓なども當時の建築である。

當時は恰も慶親王・榮祿・袁世凱・李連英等が西太后を取り圍んで居た關係から、振貝子を中心とする貴顯の會合も屢々此の日本家屋でも催はされたのであつたが、何分日本風の風習に慣れぬ人々のことよて、此等の貴顯の顔が揃つた時には、土鞋のままで疊の上を濶歩したり、脇息に腰を掛けて兩肘を張つたり、泥鞋を大事そうに正面の床の上に並べたりして、當時席に侍した日本人達を苦笑させたものであつたと謂ふ。

清朝が滅んで中華民國になると農商部は從來の方針を變更して重きを農事試験場に置き、遊覽の人士に觀せる動植物の類は只從來のものを保存する限度に止め、園内の六〇〇畝を田畝としてしまつた。斯くて民國四年には特に中央農事試験場と改稱し、同十七年に南京政府に接收せらるゝや更に北平農事試験場となし翌十八年になして天然博物院としたが、二十三年の冬には北平市政府の管理に移され、二二

十七年春に北京特別市公署の手に依り樂善公園として開放せられたが、後實業部の管理に歸し再び農事試験場として公開せられ民國二十九年秋からは境内正門の西の方に華北觀象臺まで出來て居る。

正門には見上げる様な大男が番人として立つて居るが、此所の門番は代々こうした男で承け續いで居て、初代の劉玉清と云ふ大男の如きは身長七尺三寸五分・體重二百五十斤と稱せられ、當時世界三巨漢の一人と云ふので遙々米國に連れて行かれたことさへあつた有名なものであつた。正門を入つた正面は試験場の事務所で、その後方には農産標本室になつた蒼芬軒や、辛亥革命前後に不軌を計つて處刑せられた所謂四烈士なるもの、碑がある。

事務所の前を東に行くと動物園があるが、現在では珍らしい動物類は殆んど居なくなつてしまつて、特に見るに足る様な物は少い様である。

また事務所の前を西に行くと華北觀象台があり、次に左側の動物標本室と相對して右側に陸謙克堂と稱する新築の大洋館がある。之は有名な佛國生物學者故陸謙克 Lamack 氏を記念する爲めに、民國二十二年十一月佛國の團匪賠償

金の一部を以て建てられたもので、中には生物學研究室も設けられて居る。本來中央研究院で管理して居たが事變勃發後急に佛國の國旗を掲げて居る。

此所から西の方は果樹園や實驗園になつて居るが、この間を西にずつと進むと蓮池の間に暢觀樓の洋館が建てられて居る。即ち清末に光緒皇帝及び西太后の便殿として造營せられたもので、光緒三十四年(明治四十一年)には西太后と皇帝とが相先後して臨幸された所であつたが、今尙ほ階上には其の當時の兩宮の寢室を始め諸調度の主なる物をそのままに保存してある。この屋上に上げれば西方遠く連亘する西山の翠峰は一眸の裡に入り、東方近く北京城の大觀手に取る如く集る間に、五塔寺の古塔は脚下にその雄雅な姿を見せて居る。また南に近く豐春堂と稱する瀟灑な一構があつて、此所は曾て革命黨の新進として知られた宋教仁が、民國初年その農林總長として在任時代に居住した所であるが、彼は北京を去つて後間もなく民國二年三月には上海停車場に於て刺客の手に斃れたのであつて、今此所にはその記念碑が立つて居る。

暢觀樓から蓮池の北側を過つて東に進み、植物園の前を

通つて停雲軒から南に曲ると柿樹園の傍に出るが、この柿樹園から南の蓮池を隔てた島に京都の金閣寺を模した日本茶室風の建物が残つて居る。之を右に見ながら東に行けば幽風堂の前を過ぎて、南に曲ると入口の事務所裏か動物園かの方へ出る順路となるのである。

この境内は長河に沿ふた一帯に蓮池や溝渠や水田が相通り、且到る所に樹木が多いのと動物園や植物園の設備もある上に、城内から比較的近い場所なので、都塵を避けて清遊を試みる人が多く、殊に家族的な散策に適すると云はれて居るが、又近頃は釣魚の好適地としても知られて居る。

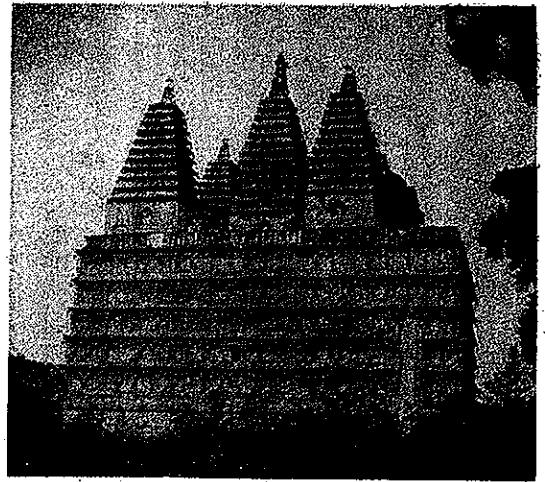
それから此の後方を流れる長河の、西直門に近い所で舊萬壽山街道と交叉する所は即ち高梁橋で、傍にはもと倚虹堂の小離宮が設けられ、河を挟んで數個の船場があつて、清朝時代には萬壽山への舟行の起點となつて居たが、今は僅かに其の遺址を残すに過ぎぬ程度に止まつて居る。有名な高粱河の戦は約二千年の昔此の河岸に展開せられた大血戦であつたが、時は北宋太宗の太平興國四年(皇紀一六三九年)七月で、天下統一の餘勢に乗じた太宗が、燕雲十六州の失地を恢復せんとして燕京を急襲した時に、遼の名將耶

律休哥の反撃に遭ふて大敗を招いたもので、當時遼軍は宋帝を逐ふこと三十里、斬首一萬級に上つたと云ふ。現在の橋は元の至元二十九年(皇紀一九五二年)に橋下の高梁閣を設け、上に石橋を架したのに始まるものであるが、この外園北の五塔寺を始め白石橋、嗎哈喇廟・鄭王墳・大佛寺・極樂寺・萬壽寺・蘇州街等この附近には澤山の史蹟がある。

#### 五塔寺 (正覺寺の金剛寶座)

三貝子花園の北正覺寺の舊址にある。寺は明の成化九年(皇紀二一三三年)の創建であつたが今は全く廢れてしまひ、永樂年間印度僧の齋らした模型に仿して建立したと云ふ五塔寶座のみが残つて居る。此の寶座は釋迦牟尼成道の靈蹟として有名な印度佛陀伽耶の塔を模したものと傳へられ、北京附近に之に類するものは西山碧雲寺の金剛寶座を始めとして他にも二三あるが、其の時代に於て又其の作に於て何れも一掃を驗するものがあり、其の結構彫刻は實に見事なものである。

もと民間の所有になつて荒廢して居たのを、民國二十七



五塔寺金剛座

年北京特別市に買収せられ爾來市の管理になつて居る。

萬壽寺

西直門外農事試験場の前を西に進んで白石橋を渡る、長河の左岸約一軒の所

に萬壽寺の巨刹がある。明の萬曆五年(皇紀二二二七年)三月に漢文大藏經を藏する爲めにと勅して創建せしめられたもので、翌六年六月の竣工と謂ふが、萬壽の名は神宗の勅賜に係り、清朝になつてからも數次の重修を行はれて居るが、光緒二十年西太后六旬の賀に際しても内帑二十萬兩を賜ひ大修繕を加へられて居る。

正殿は延壽殿と稱する九層の大殿で、殿後には石を疊んで一段高い壇を造り亭を設けて佛像を供してある。

民國以來支那兵の駐割と、一時戒煙所に利用して火災を起したこともあつて、相當荒廢の模様も見られるが、尙ほ盛んなりし昔の佛を留めて結構壯麗を極むる一大伽藍たるを失はない。

寺の東郭は僧房佛堂相連り其の後方に石の假山を配した有名なるものであるが、西の一郭は清朝の行宮として用ひられたもので、西太后が長河を溯つて萬壽山に行かれる時には、この寺の東にある廣源閣で御船を替へこの行宮に少憩して茶を召されるのを例としたと傳へられて居るが、明朝の末に於ても天子十三陵への行幸に際しては此の寺内に一泊せらるゝのを例とした時代もあつた。

昔此所には大鐘一個が置かれて居た、之はもと宮裡中正殿にあつた明初の鑄造のものを萬曆年間創建の際此の寺に移したものであつたが、乾隆十六年(皇紀二四一一年)に覺生寺に移されたもので、今同寺の大鐘樓に懸つて居る大鐘が即ちそれであり、大鐘寺の名も之に因つて來たものである。また寺の西から北方海澱に連る大路は即ち有名な蘇

州街で、之は乾隆帝の生母皇太后が非常に蘇州の風光を愛せられた所から、帝は特に母后の爲めに蘇州の人を呼び蘇州風の家屋を造らせて同地の産物を賣らしめ、母后を奉じて此所を逍遙しつゝ其の喜色を見て親らも欣然たるものがあつたと云ふ、高宗孝養の逸話を留める舊址である。

大鐘寺(覺生寺)

西直門外薊門烟樹の西方にある。後院の鐘樓に懸けられた大鐘は、明の永樂年間(皇紀二〇八〇年頃)帝師姚廣孝の鑄造したもので、高さ一丈五尺、徑一丈四尺、重さ八萬七千斤と傳へられ、内外兩面に學士沈度の筆になる華嚴經を刻してある。もと萬壽寺にあつたのを乾隆八年(皇紀二四〇三年)に此所に移したものである。

大佛寺(大懺寺)

西直門外畏吾村にある。明正德年間(皇紀二一七〇年頃)の創建で乾隆三十年(皇紀二四一五年)の重修に係り、後殿に高さ約五丈の大佛が置かれてある。

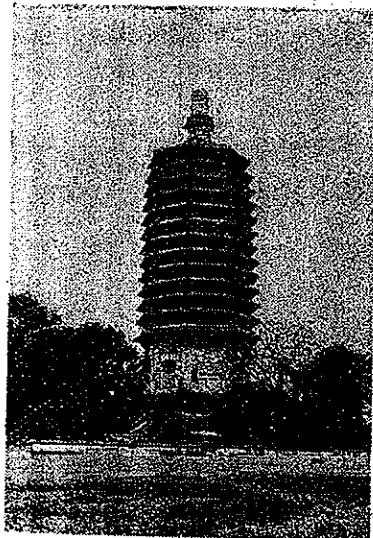
月壇

阜成門外にある小壇で城東の日壇と相對して居る。毎年秋分の夕二十八宿北斗等を配して夜明の神(月)を祭つた所で、壇垣周圍約七百米、その中に方形の一壇がある。

傳道師の墓

阜成門外馬尾溝の上義師範學校の境内にある。有名な伊太利人マテオリツチ(利瑪竇)、獨逸人アダムシャル(湯若望)、白耳義人フェルウェスト(南懷仁)等の墓を中心として多數の封土がある。北清事變の時に荒された此等の人々の墓を亂後此所に改葬したものである。

かの雍正から乾隆にかけて清朝の畫院(如意館)に供奉して澤山の名作を残して居る。伊太利の宣教師カステイリオーネ(郎世寧)の墓も北清事變の時に破壊せられ、其の墓碑も亦長い間行方を失して居たが、宣統三年(西紀一九一二年)に長辛店に於て發見されたので現在墓前大堂の西壁に嵌めてある。



天寧寺の塔

として建築様式から見ると遼時代のものと考えられ、高さは實

八里莊の塔(永安萬壽塔)と摩訶菴

阜成門外八里莊にある永安萬壽塔は明の神宗が萬曆年間(皇紀二二五〇年頃)に李太后の爲めに建立したものと謂はれるが、其の建築様式には遼金時代を彷彿せしむるものがある。十三層二五〇尺と稱せられ、結構の美は人をして驚嘆せしむるものがある。塔後の兩碑は李太后の筆に成るもので關帝と魚籃觀音とを刻してある。もと慈壽寺と云ふ寺があつたが清朝の中頃に圯滅してこの塔のみが残つて居るのである。塔東に摩訶菴と雲ふ小寺があつて、其の東堂に鑲められた三十六書體の石刻は珍らしいものである。

白雲觀

白雲觀は西便門外にあつて北方道教を代表する全眞教の總本山である。唐の天長觀の舊址で金の明昌三年(皇紀一八五二年)の重建に係り、其の後太極宮、長春宮と改稱せられ、元の時には世祖の帝師であつた長春真人邱處機が此處に居て國政の樞機にまでも參與したが、邱處機の弟子尹志平が名を白雲觀と改め明清の重修を経て現在に及んで居ると云ふが其の舊址は西方の小丘であらう。「洞天勝地」と



白雲觀の道士

一つで、此の點から考へ南方道教の一大本山格たる地位にある朝陽門外の東嶽廟と相對照して此所を見ると一段の興味があふることと思ふ。

天寧寺

白雲觀の東南にあつて後魏孝文帝(皇紀一二三五年)頃の建立に係り北京第一の古刹である。初め光林寺と云ひ隋に安業寺、唐に天王寺、金に大萬寺、明に元寧寺と稱し後に天寧寺と改めた。元末兵火に罹つて明初に重修され更に再次の加修を経て現在の堂宇は乾隆二十一年(皇紀二四一六年)の重修である。境内に隋文帝(皇紀二二五五年)の建てたと云ふ十三級の大塔がある。高さ二百七十餘尺と稱せられ北京最古の建物であるが、其の外部の修飾は別と

測に據ると約五八米と算せられる。創建以來數次の重修を経て居るが、最近では民國二十七年に建設總署の手で大修繕が加へられて居る。

五顯財神廟

彰義門約三軒駒馬場の南にある五顯財神として趙玄壇、招財、招寶、利市、納珍の五神を祭つて居る。陰曆正月二日の開廟には未明から參詣人で雜踏を極め、借元費・帶福還家等の風が今尙存して居る。

支那人の財神に對する信仰は我が國の稻荷信仰と相似た點があるが、財神廟に就て特に注意すべきは其の祭神中に猶太人的相貌の像が存することで、之に就ては色々な俗説もあるが猶太人の理財的手腕は支那でも古くから認められて居たものと思はれる。

蘆溝橋

蘆溝橋は廣安門の西約一三軒にある永定河に架せられた石橋で、曾て伊太利の旅行家マルコポーロに依つて世界的に紹介せられた所から、歐米人共の間にはマルコポーロ橋



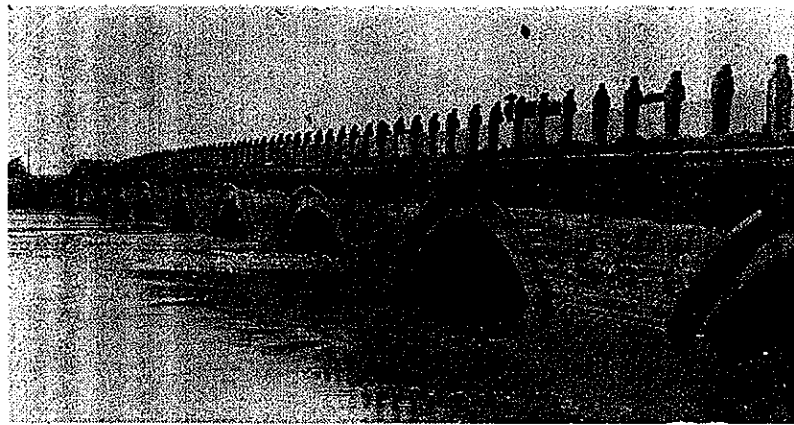
名勝舊蹟

八一六年)十月祖陵を滿洲の地から京西房山に移した爲め、其の參道としてこの橋を造り上げたもの、様である。この河の上流は即ち有名な桑乾河で、山西の北部地方に其の源を發して涿鹿の平野を東流し、南に太行山脈を横斷して北京平野に落下東南に流れて白河に入つて居るが、古來小黃河・渾河・無定河・蘆蕪河・黑水・濕水等と稱せられ、永定河の名は清朝康熙三十七年の勅賜に係るもので、蘆溝の名に就ては異説も存するけれども、黒を盧と稱する所から考へると、河水の涸濁甚しいのを形容して起つた名稱の様で、乾隆帝の如きも「水黒曰盧。故以名之。」と極めて簡單に斷定を下して居られる。

蘆溝曉月は北京八景の一つで、乾隆帝の御筆に係るその碑は橋東の路北に立てられて居るが、これは八景の一なる金台夕照と共に帝京の東西に日月を按して配された曉と夕との絶景である。この意味に就ては戴司成集に

兩崖多旅舍。以其密邇京師。驛通四海。行人使客。往來絡繹。疏星曉月。曙景蒼然。亦一奇也。云々

とあるが、昔は西南諸省から京師に來る人々は、日没までに餘時を存して到着する様にと、この橋を拂曉に渡つて入京



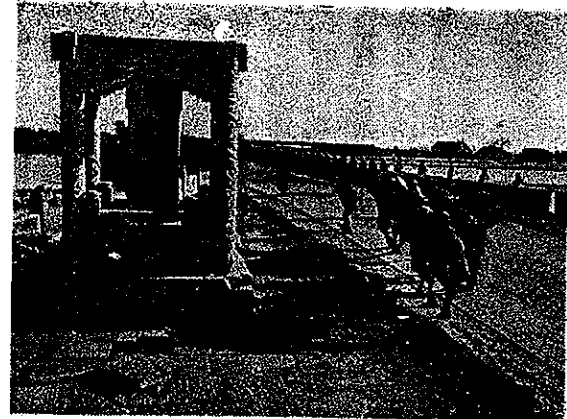
蘆溝橋

する様な行程を取つたもので、此等の人々は東天高くかゝる下弦の月を仰ぎながら、月下にある華やかな王城の地に多大の憧憬を持つてこの橋を渡つたものであらうが、又昔は官吏が西南諸省に赴任する時には、之を此の橋上に見送つて陽關三疊の曲を唱ひつつ之に餞するのを例としたのであつたと云ふ。

マルコポーロ旅

の名を以て知られて居たが、更に今回聖戰勃發の地として東亞新秩序發祥の上に重大な意義を有するに至つた。橋は幅約八米、長さ約二五〇米で橋脚に十二の拱を有し、橋欄上部の石獅は各其の姿態を異にして造られて居て、一獅に數頭の小獅を抱へて居るものであるのが、昔か

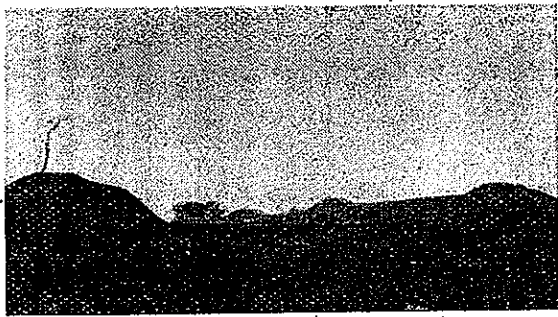
同(海朝時代)



乾隆帝御筆「蘆溝曉月」の碑

ら此の全獅の正確な數を計へた人が無いと云ふのも有名であるが、其の個々の作に就て見ても古雅まことに捨て難いものがあるのを覺える。

橋の造營は金の章宗の明昌三年(皇紀一八五二年)で、その以前に於ては木橋や舟橋を以て行旅の便を計つたこともあつたが、當時燕京に都した金の海陵王は正隆元年(皇紀一



遼金土城址

山の東麓には數萬人を容るゝに足る大廣場が造られて、北京の在留邦人の鍛練道場に充てられて居るが、毎年七月七日に此所に集合することは我々日本人に與へられた大きな光榮である。

遼金の土城

廣安門の西南約三軒を隔て、豊台へ通ずる道路上に鳳凰嘴と云ふ小さな部落があるが、此所を西南の隅角として北と東とに延々と連亘する土城址がある。東方に向ふものは約六〇〇米にして萬泉寺と稱する小刹の西で一旦盡きて居るが、而も此所から東方に點在する幾多の土城址を連ねると、永定門外の東莊と密崗子とに残る兩土城址に依つて東

行記を見るとこの橋下に二十四の拱を有し、橋下を上下する買舟のあることなどを擧げて居るが、之はこの橋を距る西南約三四軒の琉璃河に架せられた石橋と錯つたもので、彼が此の橋を始めて見た元の世祖の時代は丁度橋の竣工後約百年を経た時分であつた。

蘆溝橋月

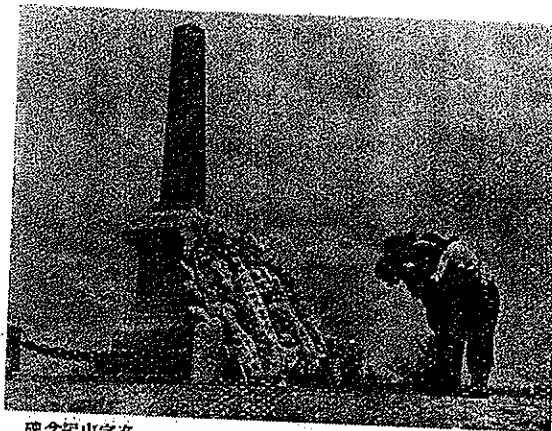
乾隆帝(十六年御製)

茶店寒鴉啼曉鳴。  
半鈞留照三秋淡。  
入定稍憇心共印。  
灑來每踏海西道。

曙光何處欲登樓。  
一線分波夾鏡明。  
懿程客子影猶驚。  
願景那忘豈帶情。

一文字山

廣安門事件で有名な廣安門から約一二軒を隔て、京山・京漢の兩線を連接する線路の傍に一大砂丘がある。之が今次聖戰發端の聖地として有名な一文字山で、山上高く聳え立つ記念碑に見える一文字山の文字は當時此所に立つて彈丸雨飛の間に三軍を指揮した牟田口將軍の筆である。昭和十二年七月七日の夜當時豐台駐屯中であつた我が一部隊が夜間演習中に、兇暴なる支那軍から不意に射撃せら



一文字山紀念碑

れたのはこの山の西北方に於ての出來事であつたが、爾來支那軍は我が方の不擴大方針を裏切つて抗戦を續け、遂に當初始め蘆溝橋事件として局地的解決を見るべかりし事件を、日支事變に擴大せしめたのであつた。山上に立てば西方に近い宛平縣城を始め、蘆溝橋・永定河の堤防・龍王廟・七本柳・大瓦密の部落・蘆溝橋停車場・東西五里店より豊台・長辛店・北京城・八寶山等當時の戰史に現はれる各地は指呼の間に望見せられ、山麓の喇嘛塔は三百年の夢を包んで方に成らんとする東亞新秩序建設の急調なる成功に微笑みつゝ聖地の一角を飾つて居る。

南角を形成し、又鳳凰嘴から北に向ふものは約二軒に亘つて其の斷續を見せて居るが、廣安門外の深州館西方から南に下る道路は丁度この土城址の東縁下に沿ふて鳳凰嘴に通じて居る。

元がこの北京の地に都して至元九年(皇紀一九三二年)に大都の築城を見るまでは、北京の都城は遼金の舊城を襲用したものであつたが、この土城址が即ち古來其の遺址と稱せられるもので、現在殘存する部分の大きさは高さ三米乃至六米、厚さは二〇米に及ぶ個所があつて凸牆の跡も見られるのみならず、西南角の外方には城濠や複郭の跡が判然と看取せられ、東南角に於ても之を見ることが出来る。

遼史によると當時の遼の南京即ち燕京の城郭は高さ三丈衛廣一丈五尺で敵樓戰櫓八門を具へ周圍三十六里を算したと云ふが、其の皇居は此の西南隅に偏して設けられて居たものと據である。現在東南・西南の兩隅角は相距ること約五軒であるが、之を基點として一邊九支里の正方形を描けば大體に於て舊時の城址は復原せられるのであつて、之に關しては異説もあるけれども、大體に於て唐の幽州鎮城の舊を襲ふたものでは無いかと考へられる點がある。

遼の後に燕京の地に都した金の海陵王は一時周圍七十五里の城郭を築いたこともあつたが、之はこの遼の城郭を基點として其の東・北の兩面を伸ばしたものと考へられること既述の通りである。(北京の沿革参照)

この土城址は北京に始めて都した遼朝の舊城址として北京に於ては最も大切な歴史的遺物の一であるが、昭和十五年の春頃から煉瓦甍が其の上に築かれて土城の破壊甚しきものがあり、全く舊觀を損じたのみならず、斯うした由緒ある史蹟が一年と心無き人々の手に壞たれて潰滅しつつあるのは惜しいことである。

### 豊台

廣安門の西南約八軒にある、地名は金の拜郊台の名に因んだものと傳へられるが明かでない。もと此邊の住民は花卉を栽培して生業となし來つた者が多く附近には立派な花神廟もある。京奉鐵路の開通に引續き京漢京綏兩線の交叉點となつてから新市街が出来たのであるが、住民には北京や通州からの移住者が多い様である。昭和十一年春兵營の新設後邦人の居住者漸く多く、同年十月には警察派遣所

も設けられたのであつたが、事變後急に邦人の進出が加はつて今日の大繁昌を來し居留民會・小學校・神社等も出來て居る。

### 〔南郊の部〕

#### 南苑

南苑は即ち元時代の飛放泊の舊地で一名を南海子とも稱し歴代の遊獵地である。明初に其の地域を擴大して圍垣を新設し南苑と稱したが、其の界は南は黃村から東は馬駒橋に、北は大紅門から西は豊台に接して周圍一百二十支里と稱せられる。

清時代には海戸千六百を設けて専ら苑を守らしめ更に數個所の行宮が營まれたが、黃村に近い圍河の舊行宮の如きは荒廢の裡にも舊態を窺ふに足るものがある。清朝歴世の皇帝は毎年大閱を此所に行はれるのを例として居たが、民國以後は軍隊の駐屯地として兵營を築造せられ、飛行場の設備も出來て軍事上の要地となり、外城永定門より輕便鐵道を通じて、附近には大なる市街地の發達を見るに至つた

のであつた。

昭和十二年七月七日支事變の發生後、宋哲元麾下の第二十九軍主力は此所に駐屯して皇軍に抗したので、七月二十八日朝我が軍は空軍と協力して猛撃を加へ、僅か數時間にして之を奪取し、敵は師長以下無数の死者を殘して四散したのであつたが、舊支那兵營南側の一帯と北方大紅門に近い天羅莊とは當時の激戦地で今兵營人口の西側に當時の記念碑が立てられて居る。

戦後邦人の此の地に進出する者漸く多く、領事館警察署の派出所も夙くから設けられ、民國三十年夏からは市公署經營の競馬場も開かれて居る。北京からの距離は營市街の入口までが正陽門から約一軒五で永定門から約八軒である。

### 燕墩

永定門車站の南にある一墩で方約一〇米、高さ約一〇米と稱せられ、上に乾隆御筆の帝京篇を刻した碑が立てられて居る。古くから帝京鎮火の鎮物として重んぜられ、昔は重陽の日に士民登高の所となつて居たと云ふ。北清事變

の時我が杉山書記生は聯合軍の到着を迎へるために馬家堡の停車場に赴かんとし、永定門を出た時捕へられ此の附近で慘殺せられたのであつた。近頃某石油會社の用地内に取り入れられたが、希望者には縦斷を許すことになつて居る。

### 〔北郊の部〕

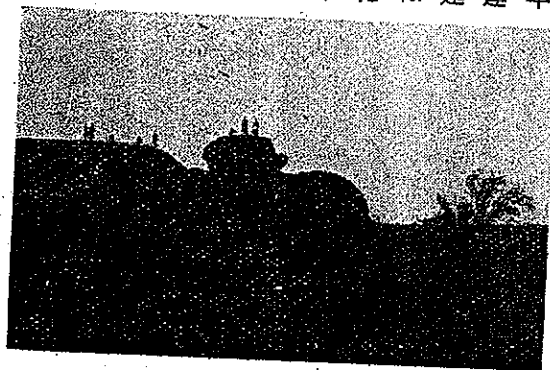
#### 地壇(市民公園)

安定門外にある大壇で方澤壇とも謂ふ。毎年夏至の日天子親しく皇地祇を祭られた所で、明の嘉靖九年(皇紀二二九〇年)の創建である。周圍の垣牆は約二三〇〇米、壇は天圓地方の説に據り地に象つた二成の方形で各層の高さ約一・八米(六尺)、下層方三三米(一〇六尺)と稱せられ周圍には濼を廻らし水を湛えてある。壇上には碑を敷いて五嶽、五嶺、五陵山、四海、四瀆の石座を設け、壇南に皇地祇の神位を奉安せる皇祇室がある。此所の祭祀は毛血を地に塗める瘞坎の儀を主とした關係上大小八個所の瘞坎があり今尚ほ原形を存して居る。民國十四年九月京兆公園とし

て開放せられ更に十八年市民公園と改稱せられた。

### 黄寺及び黒寺

黄寺は安定門外教場の北にある喇嘛廟で東西の兩寺から成つて居る。屋根に黃琉璃瓦を葺いてあるので俗に黄寺と呼ばれて居るが、東寺は普淨禪林と云ひ順治八年(皇紀二三二一年)に達頼喇嘛駐錫の所として建てられたもので、西寺は建慈寺と呼ばれ一に清淨化城とも稱せられ順治九年の勅建である。境内の大白塔は高さ八丈(約二四米)、乾隆四十四年(皇紀二四三九年)勅に應じて來朝する班禪喇嘛が途中に於て入寂したので、帝は其の衣を此所に埋めて



元土城址

この塔を建てさせられたのであつた。事變前支那兵の棲む所となり境内大に荒らされたのは惜しいことである。

黒寺は德勝門外にある喇嘛廟で前後の兩寺に分れて居る。もと屋根に用ひられた瓦の色から斯く呼ばれたのであつて前寺は慈度寺と云ひ明代の創建で後寺は前寺の北にあつて察罕喇嘛廟と稱せられ順治二年の創建であるが兩寺とも近來兵荒や火災で頗る損ぜられて居る。黄寺黒寺の兩喇嘛廟には十數年前迄打鬼の儀が行はれること雍和宮と同様であつたが今は全く廢れて居る。

### 元の土城址

元の世祖忽必烈汗によつて建設せられた首都大都の規模は、其の周圍六十里に及び十一の城門を有したと傳へられるが、今此の大きさを遺址に就て測つて見ると

東西約	七・四	支里	四・六
南北約	八・〇	一三・九	五・〇
周圍約	三〇・八	五三・六	一九・二

と云ふ南北に稍長い方形であつたものと様である。この周

### 蹟 舊 勝 名

圓の數字は宋時代の尺度及び里程で換算すると六十里と合致しない結果となるし、又マルコポーロ旅行記にある新都は方六哩の方形で周圍二十四哩と云ふ記載とも大分隔つたものとなるのである。この大都城は明の洪武元年(皇紀二〇二八年)八月に、大將軍徐達が元帝を追ひ出して大都の經理に任ずると、其の部將華雲龍をして都城の北方約三分の一を削縮せしめて光熙・肅清の兩門を廢し、安貞・健徳の兩門を新たに築いた北側の城壁に設けて安定・德勝と改稱したのであつたが、元時代の城址は舊のままに放置したので現在その土城址は北京城の北郊に近く存して居る。

即ち西直門の北方から薊門煙樹の北を東に折れて、舊健徳安貞の兩門址を連ね、東北隅に近い龍道村の東南を南に曲つて東直門の北に連る大土城址は、其の延長實に一四料に及ぶ大規模なもので、高さ七乃至八米、厚さは基底に於て一〇乃至一七米を算し、七〇乃至一〇〇米を隔て、設けられた凸牆の跡も判然と看取せられるし、また北側にあつた健徳・安貞の兩門址を始め東西に開かれて居た光熙・肅清の門址も歴然と残つて居て、健徳門址の西方土城上には當時用ひられた大きな三合土の土塊が残り、其の月城の址

も大體に於て判定せられるのである。

元の大都の南際は今の東西長安街を連ねる一線上に存したもので、即ち現在の天安門前に近く麗正門が設けられ、東西兩單牌樓の地點に文明・順承の兩門が開かれて居たが、西長安街の双塔慶壽寺の前は金代に建てられたこの兩塔を避けて特に南方に彎曲せしめて居た所など、あの漠北不毛の地から勃興した民族でありながら古い文化の保存に留意した美談を残して居る。

また今の内城東面にある朝陽・東直の二門は元の齊化・崇仁兩門の舊址で、西面の阜成・西直の二門は當時の平則・和義兩門の跡であるが、朝陽・阜成の兩門は今尙ほ元時の舊名をそのままに齊化・平則の名を以ても呼ばれて居るのである。

### 薊門煙樹

德勝門の西北約四料を隔てて元の土城の西北隅に近い所を古薊門の地と稱して居る。即ち薊門又は土城關等とも謂はれる所で、古の薊の舊址と稱し、かの薊丘も此の邊に在つた様に書いたものもあるけれども確然たる根據としては無

い説である。もとこの邊には樹木鬱蒼として茂り附近には樓館も存した勝景の地であつたとのことで、薊門煙樹は古くは薊門飛雨の名を以て燕山八景の一に擧げられて居た。現在乾隆帝御筆に係る北京八景の大碑が土城上に立つて居るが、御碑亭は夙に其の屋蓋を失して僅かに四隅の柱を存するのみである。

### 〔遠郊の部〕

#### 明の十三陵

明の十三陵は北京の北方約五〇杆、昌平縣城の西北に設けられた明朝十三帝の陵寢で、天壽山の陽にある成祖永樂帝の長陵を中心として、其の東西に諸陵を配して造營せられて居る。

明朝第三世の成祖が北京に遷都したのは永樂十九年(皇紀二〇八一年)で、爾來第十七世の懷宗(恩宗又は毅宗等の諡もある)が景山に崩じた崇禎十七年(皇紀二三〇四年)まで、二百二十餘年間に亘り十五世の列帝は皆北京に都したのであつたが、陵は實にこの間の造營に成るもので、之

は我が室町時代の中期から徳川時代の初期に至る間に該當し明の帝系を見ると第六世の英宗は第七世の景帝を廢して復辟し、第八世の帝祚を踐んだ關係から十五世十四帝となるのであるが、この中で景帝は廢位後王禮を以て西山に葬られた爲めに帝陵は十三となるのである。

この十三陵の陵域はもと周圍八〇支里に亘つて居たと云ふが、今東方から順次に其の陵名を擧げて見ると次の通りである。

德陵	太宗皇帝	(天啓)第十六世
永陵	世宗皇帝	(嘉靖)第十二世
景陵	宣宗皇帝	(宣德)第五世
長陵	成祖文皇帝	(永樂)第三世
獻陵	仁宗昭皇帝	(洪熙)第四世
慶陵	光宗貞皇帝	(泰昌)第十五世
裕陵	英宗睿皇帝	(正統・天順)第六・八世
茂陵	憲宗純皇帝	(成化)第九世
泰陵	孝宗敬皇帝	(弘治)第十世
康陵	武宗毅皇帝	(正德)第十一世
定陵	神宗顯皇帝	(萬曆)第十四世
昭陵	穆宗莊皇帝	(隆慶)第十三世

#### 思陵 懷宗皇帝 (崇禎)第十七世

この中で慶・裕・茂・泰・康の五陵は長陵西北方の谷間に集つて居り、思陵は昭陵から遠く西南に離れた場所に設けられて居る。

昌平縣城の西門を出て北に折れると一杆餘にして陵の正門である大石坊に達する。嘉靖十九年(皇紀二二〇〇年)の建造に係るもので、幅約三一米、高さ約一一米を算するが、其の彫刻の精妙なる人をして恍惚たらしむるものがある。この北にある大紅門は昔陵域に繞らされた大陵垣の基點となつて居た所で、其の周圍は約四六杆(八十支里)に及んだと謂ふが、明時代にはこの陵域に各陵の園と監とを設けて其の管理に任せしめて居た。次の大碑亭には仁宗洪熙帝御製の大明長陵神功聖德碑が立つて居る。高さ約九米にも及ぶ稀有の大碑で裏に清高宗御製の哀明陵五十韻を刻してある。

有名な石人石獸はこの大碑亭の北方に排列せられて居て、之は宣德十年(皇紀二〇九五年)の建造に係り、其の順序は

獅子・獅多・駱駝・象・麒麟・馬・武臣・文臣・勳臣

となつて居て何れも二宛對神道の左右に相對して居るが、其の用材の犬にして其の作の非凡なる人をして感嘆措く能はざらしむるものがあり、明代にはこの邊は老樹枝を交へた大森林であつたが此等の樹木は明末に伐採されたものの様である。此所から櫺星門(龍鳳門)を過ぎて阪路を下ると七孔橋の廢址があり、更に約一杆米を隔てた五孔橋を渡つて阪路を登ると凡そ一杆にして長陵の陵門に達するのであるが、大石坊から此所に至る陵道は其の長さ約八杆を算する。

長陵は十三帝陵中規模最も宏大なるもので、この陵門に連る圍牆は其周圍約一杆を算し陵の構造は陵門・碑亭・稜恩門・神帛爐・稜恩殿・内紅門・牌樓・五供石座・方城及び寶頂を順序に連ねた配置になつて居るが、此等の中で特に見るべきものは稜恩門・稜恩殿・五供石座・方城・寶頂等である。

稜恩門は紫禁城の太和門と略ぼ規制を同じうする大門で、門内神道兩側の神帛爐に用ひられた琉璃磚は其の色澤炫耀目を奪ふに足る出色の作で、北京太廟の燎爐と共に此の種の物の中の双壁である。

陵恩殿は三層白石基壇の上に建てられた重層四注造の大建築で、其の大きさは間口九間約六七米、奥行五間約三〇米を算し、其の制は太和殿や太廟の前殿と相似たものであるが、殿内の大圓柱は直徑一米長さ一〇米を越ゆる一本の大楠木で、特に中央の四大金柱の如きは直徑一米二を算し、實に明代建築の粹とも稱すべきもので、其の柱根に方形或は圓形の小孔を穿たれて居ること共に注意すべき點である。この殿の前に設けられた陸の彫石の彫刻は明初の手法をそのままに、極めて薄淺の文様が刻まれて居て其の軟かな感じは斯うした當時の石刻から受ける特有のものであらう。殿内正中に成祖文皇帝の神牌が奉安されて居るが、之に大明の大字を省略してあるのは清朝時代に作られたことに因るものである。

五供石座は一に五供桌又は石祭座等とも稱せられるもので、座石の間には中に水を湛て之は永年滴瀝しないと傳へられて居る有名なものである。

次に高く聳え立つ方城は又寶城とも稱せられ、其の上には明樓が建てられて居る。約三五米四方の磚砌で高さ約一五米に達し、中央に甬路を通して上に登る様になつて居る

が、甬路の北端は即ち寶頂下に穿たれた地宮の入口である。上に建つた明樓は方約一八米に及び、上に長陵の陵額を掲げ中に十字形の穹隆を通して、其の中央に長陵の大碑石が立てられ、「大明成祖文皇帝之陵」の九字を刻してある。

明樓後方の圓墳が寶頂で、此の下に成祖文皇帝と仁孝徐皇后との靈柩を奉安した地宮があり、上は大小の樹木が生ひ茂つて小森林を爲して居る。

方城上に立てば左右に近く諸陵樹間に隱見し、後方高く天壽山脈の連峰相續く間に、前方は遠く田畦果園相通りて曾て流れし清流の河床は宛轉として乾巽の間に横たはり、遙かなる陵道の石人石獸を指呼の間に俯瞰するところ、流石に大明二百有餘年の帝陵として撰はれたる地形の凡ならざるに感服せしめられるものがある。

十三帝陵の中でこの長陵が規模最も大きく之に次ぐものは永陵で、思陵が最も小であるが中には盜掘を蒙つたものや火災に損じたもの等もあつたりして相當に荒廢を極めて居る。本來此等諸陵は清朝に於ては再三重修を加へられ、殊に乾隆五十年(皇紀二四四五年)の大修繕の如きは、三個

年の日子と百萬金の國帑とを費したと傳へられるものであつたが、其の後も毎年十月には工部の官吏を特派して修葺の事を調査せしむるを例とし、又康熙の朝には明太祖の第十三子であつた簡王桂の裔朱之璉を封じて世襲承恩侯となし、専ら明陵の祭祀を掌らしめたのであつたが、清末以來國帑の窮乏と共に修繕の事無く、幸にして長陵のみは民國二十四年重修を加へたけれども、他の諸陵は殆んど荒廢に委した儘であり、殊に德陵の如きは民國二十五年の春、英人に使嫉せられた冀東保安隊の手に盜掘せられたと傳へられて居る。

尙ほ明清兩朝に於ける帝陵造營の特に異なる所は、清朝の諸帝陵が皇帝崩御を以て劃期としてその後の皇后陵を別に營んだ點や、妃陵を帝后陵の近くに設けたのに對し、明の帝陵は一帝一陵の制に據り、而も皇后は其の原配のみを附葬し、他の后妃陵は之を別所に設けたこと等である。

### 湯山温泉

北京の北約三〇軒を隔て、燕山々脈の南麓に近く、大湯山と小湯山との兩岩山が平野の間に屹立して居て、東方に

ある小湯山の東南麓から温泉の湧出がある。小さい寒村であるが清の雍正年間(皇紀二三九〇年頃)に行宮を設けられたから、歴代萬機の餘暇を臨幸の所となり、殊に乾隆朝には善美を盡した林苑や泉池も造營せられたが、咸豐同治の頃に至つては打ち續く内亂外寇に國庫漸く乏しく自ら行幸も中絶の姿となり、特に北清事變後は境内全く荒廢に委して居たのを、民國六年に湯山公司の手に借用經營を見るに及び、湯山別墅の洋式旅館を設け電話を架設し行宮の禁苑を開放して浴客の便を計り、また苑池に沿つて貴紳の別荘も建築せられ繁榮を見つゝあつたのに、民國二十年蔣介石政府の強奪に遭ふて官の手に歸し、爾來舊に依つて營業を續けて居たが、昭和十二年七月支那軍が此所に據つて熱河より進出した皇軍を阻止せんとした爲め、鎧袖一觸忽ち反撃を蒙り激戦少時に我が手に歸してしまつた。

東西に相並んだ湯池は何れも長八角形に大理石を以て疊まれ、深さはもと三十尺に及んだと云ふが今では殆んどその半に埋れて居る。温度は東池攝氏三九度、西池同五〇度で、昔は之を夏の湯(温泉)、冬の湯(熱泉)と稱し、性分も兩池稍異つて居るが、大正十年支那駐屯軍病院に於て分拆

した結果に據れば次の如くなつて居る。

	(東池)	(西池)
透 明 度	稍濁	清澈
温 度	三九度	五〇度
臭 味	微臭	同上
反 應	無	同上
比 重	アルカリ性	同上
固 形 分	一、〇〇三三	一、〇〇二八
酸 素 費 消 量	〇、五一八九	〇、四四三三
硝 酸	〇、〇六	〇、〇二
亞 硝 酸	痕跡	痕跡
アムモニア	痕跡	痕跡
硫酸カルシウム	〇、二二六七	〇、一〇七四
重炭酸カルシウム	〇、二四六二	〇、一七八一
重炭酸マグネシウム	〇、一一八四	〇、二四三三
クロールカルシウム	〇、〇二二四	〇、〇二〇〇
クロールナトリウム	〇、〇二二五	〇、〇二一八
重炭酸ナトリウム	〇、〇三三〇	〇、〇三三二

### 居庸三關

京包鐵路の南口から八達嶺に至る約二〇料の隘路は即ち居庸關の溪谷で、南口を其の關口としこれに居庸關及び上關を加へて居庸三關と稱せられるが、かの八達嶺と共に燕都の北門を扼する要害である。

日支事變に於て皇軍は八月十一日より此の一帶に據れる敵の大部隊に對し攻撃を開始した。敵は中央軍の精銳で、此の天嶮を利用して堅固な陣地を作り、一年間の防禦を察語して死力を盡した抵抗を試みたのであつたが、我が軍は炎天酷熱の下によく饑渴に堪えて行動し、激戦又激戦、自ら肉弾を抛つて苦戦惡闘約半個月、遂に此の天嶮を奮取して敵に致命的打撃を與へ、八月廿六日には早くも八達嶺を占領して、古來難攻不落と誇つた居庸三關の嶮を完全に占領したのであつた。仰げば二千歳の歴史を語る長城の下、其所には無心の木石の陰にも皇軍將士の貴い鮮血が濺がれて居ることを忘れてはならぬ。

### 南 口

北京西直門を距る約四一料、昔は下口又は夏口と稱した

もと一寒村であつたが京綏鐵路の開通後急に開けて今では鐵道工場、水道、電燈、ホテル等の設備もあり此處から明の十三陵に遊ぶ人が多い。關城は明の洪武二年(皇紀二〇二九年)に改築されたもので、東方に有名な龍虎台があり其の附近は民國十五年、奉國戰當時の戰場で今國民軍南口戰役陣亡將士の記念碑が建てられて居る。

昭和十二年八月十一日皇軍は此の嶮に據れる敵の大部隊に對し攻撃を開始し十三日午後完全に南口を占領したのであつた。

其の後此所には邦人の在住する者逐次増加して、領事館警察署も設けられて居る。

### 居 庸 關

南口より上ること約一〇料にして居庸關に達するが、この途中東園の東方に北京八景の一なる居庸疊翠の名を以て知られた疊翠山がある。居庸關の建設年代は詳かでないけれども前漢書には居庸縣に關のあることが出て居て、昔から天下九塞の一到に數へられ太行八陁の一到に擧げられて居る。現在の關城は明の洪武二年(皇紀二〇二九年)大將軍徐達の改築した所で周圍約四料、西方の城角は標高六七五米

の高所に設けられ、更に西北の角樓頂は同八三〇米の天嶮を擁して築かれてあつて、古來正攻法に依つては假令八達嶺に勝つても此の關を抜く事は出来ぬと謂はれて居た。關城の南門内に一塔座があつて中にアーチ形の路を通じて居るが幅七米五、長さ十五米上部に立派な佛像の彫刻を施し、兩壁には入口に四天王を配し中央に漢・梵・西藏・回紇・蒙古・西夏の六種文字を以て尊勝陀羅尼を刻してある。此れが即ち有名な居庸の過街塔で元代の創建に係り、東洋美術史上に重要な地位を占めるものである。今關東に長さ三六五米の居庸關トンネルを通じて居る。

皇軍は昭和十二年八月廿二日此の關城の攻撃を始め、兀然たる岩山の間隙を利用して苦戦惡闘の後猛烈なる夜襲を敢行し遂に翌朝此所を占領したのであつた。

### 上 關

居庸關を出で約三料にして上關に達するが其の南の東谷に碾盤灣の絶景がある滿谷一望斷巖絶壁、實に「居庸金剛」とでも名づけ度い所である。上關は周圍約八〇〇米の小城で南北兩門を有して居るが、これから八達嶺迄の間には仙枕石、彈琴峽、石佛等の名跡がある。

八達嶺の長城

萬里長城は現在東山海關より西嘉峪關に至る間に築かれて居るもので、北京の北方と蘭州の北方とが二重に成て居る外、河北山西兩省界を南下する一支線があるが、北京北方の二重部は外邊を極邊牆、内邊を次邊牆と名づける。東西の長さ約二千六百料、子午線を亘ること約二一度三〇分と算せられる一般に秦始皇の築いたもの(皇紀四五〇年頃)と思ふ人が多い様であるが、實は周初から既に築造の形跡が見られ戦國時代(皇紀二六〇年頃—四一〇年頃)には各國で築かれて居たものを、始皇帝は只此等を増築連結したに過ぎないのであつて、更に其の後兩漢、南北朝、隋、唐諸朝の修繕増築を経て明代に至り大々的に修築が加へられ磚を以て鋪裝せられて漸く今日の形を成したのである。

此の八達嶺の長城は次邊牆の一部であるが、これが築造は北齊文宣帝時代(皇紀一二二五年頃)に行はれたもので其

の後隋、唐、明等に大修繕を加へられ殊に明末に殆んど改修されて今の様に磚を以て外を包まれたものである。城牆の高さは五米乃至一〇米、幅四米内外で、用材としては下部に石、上部に磚を用ひてある。

嶺上には二重の門が設けられ、東門の額に「居庸外鎮」西門の額に「北門鎖鑰」と記されて居るが、實に北京より蒙古に通ずる唯一の官道である。南口よりの距離は約二〇料で標高は南口附近の約一五〇米に比し嶺上兩門の邊が約六六〇米、東北の最高烽火台が八五五米、西南に見える最高烽火台が八二二米で嶺下には長さ一、一四五米の八達嶺トンネルが通じて居る。

昭和十二年八月二十六日夕皇軍は此の地帯を占領したのであつたが、丁度青島に於て居留民の總引揚が決定され、其の第一船が出發したのも亦此の日であつた。

(石橋 丑雄)

観光日程及び費用

北京を観光せんとするには到底一日、二日で見切れる譯はないが、現代の如き時代に悠々と物見遊山でもないから最少限三日で悠久一千年の古都を廻る位が適當である。若し旅程の都合で止むを得ず一日で見物する場合には次に掲げてある市観光バスで一通り北京の景觀に觸れるのが便利である。

一日で見物する場合(市観光バスに依る)

觀光箇所	入場料	乗物料金	所要時間
北海	乗物、入場料、案内料共	八時間	
紫禁城	大人 六、〇〇 小人 三、〇〇	北京站出發	
萬壽山	大人 六、〇〇 小人 三、〇〇	午前九時半四月—十月	
天壇	大人 三、〇〇 小人 一、〇〇	午前十時十一月—三月	

註 餐食は萬壽山食堂にて、一人前約一圓五十錢、

二日で見物する場合

第一日 市観光バスを使用す(前掲)  
第二日

觀光箇所	入場料	乗物料金	所要時間
中央公園	〇、〇五		八時間
東安市場			郊外三時間 市内四時間
日本大使館 (北京招魂社、 北海革命紀念碑)		自動車 大約三〇圓〇〇錢 運轉手心付	
故宮博物院	〇、五〇	一圓五〇錢	
觀象台			
景山	〇、〇五		八時、十一時半、 三時、前門出發。
太廟	〇、〇五	廣濟橋廣安門方面 は長辛店行往北交 通聯合自動車に依 ると便利である	
蘆溝橋			
廣安門			

註 東安市場は夜見物する方がゆつくり出来る。

三日で見物する場合

第一日 観光バスに依る(前掲)



第三日 前掲のコースに依る

觀光箇所	入場料	乗物料金	所要時間
喇嘛廟 孔子廟 國子監 鼓樓、鐘樓 中南海公園 琉璃廠 天橋 先農壇 法源寺	〇、四五 〇、四五 〇、四〇 〇、〇五 〇、〇五 〇、〇四 〇、〇四	自動車 約一時間 約五圓四錢 洋車 一日 約三圓	自動車ならは約八時間

故宮博物院の見物は、毎日見せる場所が違ふし興味も亦異つたものがあるから第三日も暇があれば訪れるべきであらう。尙、天橋、天壇を訪れた歸りは西に廻つて牛街清眞寺、白雲觀、天寧寺、廣安門、戰跡等を見物するも一興である。以上の見物コースは四五人連れで自動車を借切り乗廻すなら兎に角、一人ならば大體地圖でその日見物すべき場所

所を探して置き、その邊は洋車で廻り、電車、バスで目的地の近く迄行く様にするのが経済的である。尙外に北京遊覽案内所（西河沿）に依れば料金六圓五〇錢にて天壇、萬壽山、故宮、北海（午前十時遊覽案内所前出發）正午萬壽山着、着食を取る。午後五時北海公園前着の自動車遊覽コースもある。

### 長城 見物

北京から萬里の長城を見物に行くには八達嶺が適當である。古北口でもよいが、少し遠過ぎ又汽車の便も悪い。八達嶺へは京包線により、張家口行き午前六時三十五分北京發、途中南口、及び居庸關を過ぎ、青龍橋站に九時四十九分着、約三時間の行程、料金は三等一圓五〇錢、驛からは驢馬か山籠か徒歩數町、十五六分で八達嶺に着き延々と起伏する長城の大觀を望み得る。歸途は十六時四十九分北京行きに乗る。

古北口へ行くには北京站午前七時三十分古北口行きに乗る。十三時十分古北口着、日歸りの豫定では、十四時五十分發北京行きに乗らないと間に合はない。

北京遊覽地一覽表

名 稱	所在地	觀覽料	文 天 祥 祠	東 嶽 廟
北京神社	内一區黃院址		雍 和 宮	東郊朝陽門外
招魂社	東交民巷日本大使館内		觀象臺及欽天監	東郊朝陽門外
英靈奉安殿	内三區六條胡同西本願寺内		北平圖書館	東郊朝陽門外
歷史博物館	天安門内午門	二〇錢	近代科學圖書館	東郊朝陽門外
古物陳列所	故宮東華門	一〇錢	隆 福 寺	東郊朝陽門外
故宮博物院	内六區景山前街	五〇錢	護 國 寺	西郊西直門外
三 大 殿	紫禁城	五〇錢	白塔妙應寺	西郊白石橋
武 英 殿	紫禁城	一圓	新民教育館(鼓樓)	西郊西直門外
文 華 殿	紫禁城	一圓	鐘 樓	西郊西直門外
圓 城	内六區文津街	一〇錢	東安市場	西郊西直門外
中央公園(社稷壇)	内六區東三座門大街	五錢	西單商場	西郊西直門外
中海公園	内六區府右街南門	五錢	國貨陳列所	西郊西便門外
北海公園	内五區文津街	五錢	天橋市場	西郊阜成門外
景山	内六區景山前街	五錢	平民市場	西郊阜成門外
國子監	内三區成賢街	四〇錢	先農壇	西郊廣安門外
孔子廟	内三區成賢街	四〇錢	法源寺	北郊德勝門外

# 旅 館

北京の旅館は、居住する人々が各人種混淆である如く旅館の種類も亦、洋式ホテルあり日本旅館あり支那飯店ありといふ状態であるが、事變後邦人の急激なる進出につれ、このいづれにも投宿して居るので、支那飯店でも亦日本人馴れがして大抵の事は日本語で通ずるから安心して宿泊出来る。その反面又この三者の差別も次第に無くなる状態で、日本旅館といへども支那式家屋を改造して畳を敷き、又はベッドを置いたのが多く、支那飯店と稱しても實質は洋風の模倣であり、堂々たる洋式ホテルであつてもお客が主として邦人であれば自然それに適したサービスの方法に改められてゆくのは

當然で、其處に各自特色ある雰囲気は失はれつつあるが、邦人の北京に旅する人は些かも外地たるの感を抱かずに済む状態である。

近頃は北京の旅館も一時程の股賑さには無いが仲々の繁昌であるから、旅行者は前もつて電報なり電話なりで部屋の豫約を申込んで置くがよい。驟には大抵ホーターが出てゐるし、乗物も不自由はない。

## 日本旅館

事變後の邦人の激増に依り日本式旅館も雨後の筍の如く開業するもの續出、今

や日本旅館組合加入の旅館業者は六十有餘を數へるに至つてゐるが、その大半が東城及前門外に在つて、西城方面には僅に五六を數える程度なのも市の中樞部が東に寄り、邦人が多く東城方面に居住する現在では致し方ない。

旅館の設備は多く支那家屋を改造したものであるが翠明荘の如く外觀を堂々たる支那風とし内部を日本風にした新建築を誇り、内地一流旅館にも劣らぬ施設と資本を以て進出して來たものもある。

左に有名旅館の大體を掲げる。

名	稱	所在地	室數	宿 伯 料	電話番號	備 要
翠 明 莊		東安門大街	四二	七圓—三三圓	三四三三	主に日本間
近 水 樓		景山後大街	二〇	十四圓—二五圓	北二五三一	日本間
日華ホテル		東城羊後胡同	一九	七圓—十四圓	東二三八九	日本間
日華ホテル別館		東華門大街	二三	六・五圓—十八圓	東一五三七	”
扶 桑 館		東單大街	二二	一〇圓—十五圓	東一三三二	”

# 旅 館

ヤシマホテル	景山西門前	三〇	八圓—一六圓	北二七一六	洋室アリ
東京旅館	新開路	一七	六圓—一〇圓	東一一三二	日本間
燕京ホテル	東城屈担胡同	二二	八圓—一二圓	東三一四五	”
昭和ホテル	東四南大街	一四	六・五圓—一五圓	東一〇二六	洋室アリ
富士屋ホテル	西總布胡同	二〇	六圓—一四圓	東五〇三七	日本間
都ホテル	崇文門大街	二五	五圓—一五圓	東三四三一	日本間
北京花壇	東城南河沿	三〇	四・五圓—五圓	東一八九七	洋室アリ
櫻ホテル	東四南大街	二五	六圓—九圓	東四四七五	日本間
愛國旅館	米市大街	一二	五圓—七圓	東三〇〇八	日本間
別館	米市大街	一〇	七圓均一	東五三八七	”
伊勢屋ホテル	五區萬明路	二七	六圓—一〇圓	南一〇三九	”
松風館	廠線胡同	一三	七圓—八・五圓	東三六六五	”
黃城館	府右街黃城根	二〇	六圓—一〇圓	西六一八	”
ナニワホテル	前門外小四眼井	一一	五・五圓均一	南一六七九	”
新京旅館	西裱糊胡同	一一	四圓—七圓	東五〇一	”
鶴屋ホテル	蘇州胡同	一六	七圓—八圓	東一六八四	”
南洲館	蘇州胡同	一一	七圓均一	東二七七	”
増田旅館	廠線胡同	一六	七圓—九圓	東二三五五	”
黎明館	東裱糊胡同	一一	八圓—一〇圓	東三五七七	”

## ホテル

國際都市としての北京は外人の觀光客も多く、以前にはまた中國の首都として外交、政治の中心地でもあり外人經營の純洋式のホテルも榮えたが、事變後は長安飯店、中央飯店既に轉身し、北京飯店亦日本人經營に移つて純然たる洋風ホテル



北京飯店南側正面

ルといふものは少ないが、左に掲げる三つは夫々ホテルとして遜色なき設備とサ

ービスを有して居る。

ホテル名	所在地	室数	料	金	電話	備	要
北京飯店 (Grand Hotel-Peking)	東長安街	一五三	九圓—三三圓	東二二三—		バス付洋室	サービスタク
六國飯店 (Wagon's Hotel)	東交民巷	一六〇	九圓—三八圓	東二五三—		バス付洋室	サービスタク
德國飯店 (Hotel du Nord)	崇文門大街	四六	二圓—二五圓	東二四三六		全部 バス付洋室 サービスタク	サービスタク

### 支那旅館

飯店、客棧、旅社、等の名稱で呼ばれる支那式旅館は、大抵洋式のホテル化した宿屋である。勿論その設備に於ても、サービスの點でも近代的ホテルには匹敵すべくもないが、それ丈に安直で気がおけなくてよいかから邦人旅館の型に嵌つた接待を好まぬ向に此等支那式旅館に一夜の宿をとるも悪くない。

原則として、支那旅館は食事は都室代に含まれない。従つて食事は各自外でと

るのが當然であり、又その方が北京に滞在する客には便利でもある。

又その部屋代も純然たる部屋料であつて、同じ部屋に二人泊らうと三人泊らうと宿泊料は變らない。言葉の點で支那旅館は些か不便であるが現在北京の支那旅館の使用人なども大分日本人馴れがして來るので簡単な支那語の二三を心得て居れば用は足りる。

唯一番氣をつけなければならぬ事は、之は支那旅館に泊る場合のみではないが、先づ支拂金額をはつきり問ひ訊して置く事

である。そして大體一割程度のチップを前もつて帳場へやつて置くのと何かにつけてサービスが違つて來るから便利である。それ以上はチップを欲しがらぬ様な態度が見えても、無暗に與へずに、用事を頼んだ時、宿料の清算を済ました時に少額づゝ分け與へる様にする。支那人は一般に金銭には信用が置けないものと考へて好い。従つて部屋の出入には必ず鍵を下し、貴重品は賬房に預けて、盗りにホ

ーイ等に部屋の出入を許さず、金銭の出入、勘定等はあまり彼等の眼の前で行ふべきでない。

次に支那旅館に泊つて不快を感じる事は、南京虫、白蛉、蚊等に惱まされる事である、北京の一流支那旅館では左様な事も無いけれども稀には南京虫も居り、白蛉に食はれて腫れ上つた痕が一週間もかゆい事もあるから夏場は通風よく窓に金網を張つた部屋、南京虫の有無をよく聞

### 旅館

いた上で契約する事が大切である。又支那飯店では一週間とか一ヶ月の長期滞在の場合でも慣例上宿泊料の割引はしないのが普通である。がこの點も最初に部屋を決める時の交渉如何によつてある程度の割引をさせ得る事もある。最近或る支那旅館などでは、日本人に對する場合に純粹の宿泊料に一割位のサービス料を附加した金額を一日分として計算して來る事も有るからよく確かめる必要がある。

左に北京の信用するに足る支那旅館を挙げる。

店名	所在地
中國旅行社	西交民巷
招待所	燈市口
北辰宮	燈市口
花園飯店	西單捨飯寺
西湖飯店	壽長街
振聲飯店	西河沿四五
華安飯店	瑞金大樓内
長安大飯店	西單舊刑部街

### 公寓

舊を歩してゐるとよく〇〇公寓と云ふ看板を見受けるが、これは日本のアパートに相當するものである。この公寓の由來が一寸變つて面白。民國以前科擧制度のあつた時代に、はるはる地方から及を賣つて受験に附せ参じた秀才は、同郷會で建てた會館に落ちつくことになつて居たけれども、何しろ全國から集つて來つてゐる受験者達を收容しきれなかつたので、これらの受験者を宿泊せしめる公寓と云ふものが増へて來た。店名も集賢とか進賢とか謙超のよいのを見かけるのもこう云ふところから來たらしい。ところが民國になつて科擧制度が廢止になり、この公寓も動人や學生相手の下宿屋に轉向した。當時は男女同宿であつたが、風紀上面白くないので、禁止したため經營上の困難から同一廓を二つに仕切つたりして、男女別に經營することに

したところもある。

以前は附屬もあつたが、現在ではアパート式が主である。

事變後は日本人もこの公寓に住みつゝいる者が大分ある様だ。

次に主なる公寓を挙げる。

大一公寓	皮庫胡同
大興公寓	東西南大街
北京公寓	米市大街
朝陽公寓	海運倉
新華公寓	前孫公園
大鳴公寓	西長安街
亞洲公寓	石驢馬溝沿
華興公寓	粉子胡同
會賢公寓	西河沿路南
聚賢公寓	西西南大街
雙龍公寓	二龍路

# 土産物

北京名物といへば骨董、毛皮、翡翠と一口に言はれてゐるが、何れも高價なものであり、現在ではむしろ土俗的な民藝品の中に面白い趣味的なものがある。値段も大體二、三圓から十圓程度位迄のものゝ列擧したが、内地、滿洲へ持ち歸るには税關の關係もあるので注意を要する。

七寶・支那の七寶は清の乾隆時代が最盛で代表的な物は大抵この時代に作られた。紫禁城に在る名作を見て、當時の進歩した技術の程が窺はれる。惜しい哉、現在ではすっかり技術も低下して、殊に事變後は日本人向の粗製品ばかりになつた。併し非常に廉價であるから土産物として手頃である。

- 七寶製帶止 五〇錢—二圓
- 同 酒盃 六五錢
- 同 德利 六圓八〇錢—七圓五〇錢
- 同 煙草セツト 六圓—一七圓
- 同 風鏡 一—二圓
- 同 シガレットケース 五圓—八圓
- 同 パイプ 二圓—五圓
- 同 菓子鉢 四圓五〇錢—一五圓
- 同 茶壺 四圓—七圓
- 同 花瓶 四圓—一〇圓
- 同 カラス鉤 二圓五〇錢—六圓
- 瑪瑙・玉髓の一種で紅・青・綠等の色彩を帯び、美しいこの寶石は古來から支那人間に愛用されて來たが、紛ひ物も随分多いから買ふ時は良く注意する必要がある。
- 瑪瑙製帶止 二圓—二圓
- 同 カラス鉤 二圓五〇錢—五圓
- 同 指輪 三圓五〇錢—五圓
- 黒ダイヤ

- 黒ダイヤ帶止 一〇圓—二五圓
- 同 指輪 五圓—一五圓
- 琥珀 五圓—五〇圓
- 帶止 五圓—五〇圓
- カラス鉤 三圓—五圓
- パイプ 五圓—五〇圓
- 珠數 五圓—五〇圓
- 翡翠・北京の到る處に翡翠、玉類を賣る店を見受けるが、遠く雲南・ビルマに産する翡翠が歴代王城の地であつた北京の貴人達の裝飾品として遙々運ばれたもので、加工の技術も發達してゐる。翡翠はその色が眞青で、青さに斑がなく透明で、一見清涼の感じを受けるものが良質とされてゐる。細工物の種類も多種多様で價格も亦質・技巧・大小によつて格段の差があり、又巧妙な偽物も作られてゐるから、信用ある店か、よく明るい人に連れて行つて買ふのが安全である。
- 翡翠帶止 五圓—一〇〇圓

# 土産物

- 同 指輪 五五圓—二〇〇圓
- 同 カラス鉤 五圓—五〇圓
- 同 インキ壺 二〇圓
- 同 メタル 五圓—五〇圓
- 同 パイプ 五圓—三〇圓
- 毛皮・毛皮の産地は主に滿洲、蒙古、シベリヤであるが、北京は清朝時代から毛皮の需要地として取引が盛んであつた。今でも外城東珠市口の邊りには大商店が軒を並べてゐる。

主に羊皮、山羊皮で兎、狐、麂、獺、狼、熊、虎、栗鼠等、總ゆる類を産し、衣服、寝具用、襟巻用其他に常用されるが、現在外地へは持出禁止である。絨氈・天津絨氈の名は有名であるが、多く北京で産する獨特の手工業であつて古く清代の王侯、貴族が盛んに賞用した。現在羊毛が容易く手に入らぬ爲、産出額も少く、天橋、東珠市口、前門外等で賣られてゐるのも花鳥、龍虎等の古い

圖案が多いが、最近のものは洋化された外人向きの模様も出來てゐる。大小種々あり又用途によつても違ふので値段は様々である。

支那刺繡製地・外城東珠市口に多く在る古代美術刺繡店は明清の貴人、高官の禮服の古衣を賣つてゐる。満足なものはそのまゝ、取物は適當に斷ち切つて細工するのだが、刺繡された花模様を抜取つて紙に貼り付けたものもあり、帯、ハン、ドバッグ、洋装婦人服の襟等に喜ばれる。

- 古代刺繡布地 三圓—一〇〇圓
- 同 紙張 三圓—五〇圓
- 壁掛、卓布(テーブルクロス)・北京名所、風俗繪、花鳥を刺繡して支那趣味豊かな壁掛も、華やかな模様テーブルクロスも日華洋の室に調和して良い物である。又清代高官の衣服の金銀糸の刺繡を裁ち縁を付けた高級なものもある。

刺繡テーブル掛 二、三圓—一五圓  
レース編テーブル掛 七、八〇圓—一〇圓  
花瓶數 三〇圓—二圓  
織物・支那服の特徴であるすつきりした簡単な仕立方は着る人の姿態美を良く生かして、殊に女性の夏服姿は全く北京を彩る花であるが、その支那服生地も多種多様、土産品としても良否は一概に云へないが、邦人の洋服用にも、カーテン、卓布等にも色々と利用價值はある。

北京市内に綢緞店(吳服屋)は到る處にある。綢は縮緬で堅縞の湖州から出る湖綢と云はれる物が優良品である。値段は尺一圓前後からある。

緞子、主に上海、蘇、江省方面で作られるが、南京から出る南京緞子は良品の名が高い。北支では天津、青島から出て、北京が集散地と成るが、人綢緞子の安物もある。



- 麻 二〇錢—一〇圓
- 影戲人形 一〇錢—一五〇圓
- 虫細工 二五錢—一五〇圓
- パイメン細工 八〇錢—二圓五〇錢
- 針さし 八五錢—一圓一〇錢
- 動物(ラクダ、犬等) 五〇錢—一五圓
- 高梁細工 七〇錢—二〇圓
- 人形 二五錢—三圓
- 樂器人形 二錢—五錢

路傍の風屋

採送つけて賣つてゐる。



呉服屋の店開き

北支全體が綿花の大きな産地である丈に木綿製品は主要な産物であり、中國人の生活必需品でもある。内地から來た許りの人が北京に驚く事の一つは反物屋の店先に積まれた品物の豊富な事であらう。而も今時内地の貴重品である純綿製品が無難作に並べられて、色とりどりに買手を待つてゐる事だ。この邦人旅行者を刺激する綿布の中でも内地の中形に類する印花布、通稱どろ染の鮮かに浮き出た花模様、しかもしつとり落ち付きのある味など、中國娘が初夏の候から清

だすのであるが、邦人の好みによく適したものである。

値段大巾一尺 一圓程度  
ハンカチ 赤、青、桃色等支那風色彩で花鳥、風景を刺繍したもの、値段は

麻製刺繍ハンカチ 一圓—二・三圓  
ハンドバツク 高級品には清朝

貴人の金銀糸で織つた服地を加工した美術的な物もあるが、現在主に蘇州から出る綾織で作つた物、レース編等がある。古代表服の布地を應用したものは高麗なもので、喜ばれる。

古代衣服加工品

二〇圓—三〇圓

綴織

一五圓—三〇圓

皮製

一五圓—二〇圓

レース編

一〇圓—二〇圓

麻製刺繍入

三圓五〇錢—八圓

支那玩具、風、人形、芝居の面・エエエマ、風車、麵製風俗人形、驢馬、高粱細工等々であるが、一般に泥製品や紙張

に泥を塗つた物に極彩色を施した支那民藝趣味の豊かなものが多い。

風は鳶風、仙人風、仙女風、孫悟空、金魚、蟄(月を象徴したもの)、俗に百足蟲風といふ、長さ五間に餘る龍風などその姿態は千様萬態で、彩色美しく日本へ持つて歸れば喜ばれること疑ひなしだが、尙張つて壊れ易いものだから持ち歸るのには困難だ。

影戲(影芝居)に使ふ驢馬の革で作つた人形も上品で趣味のある好土産品である。普通の人形は大抵泥で作り、嫁入、葬式の形、芝居の一場面を表はした風俗人形等あり、ガラスの小箱に入れて一組になつたものもある。

支那の人々に一番親まれてゐる芝居の立役を表はした極彩色の隈取面も又、土産物として面白い。赤、白、紫、又は金銀等の色によつて色々の役割を表はしてゐるのだが、又武將、大官を表はす長い

芝居面

五錢—一圓

鐵製壁掛(鐵華)

元來蕪湖方面を主

産地として鐵板を打抜き、山水、花鳥、風俗繪等を畫きこれを臘付して懸額、屏風等に作つたもので、現在北京でも多數製作される。

植設

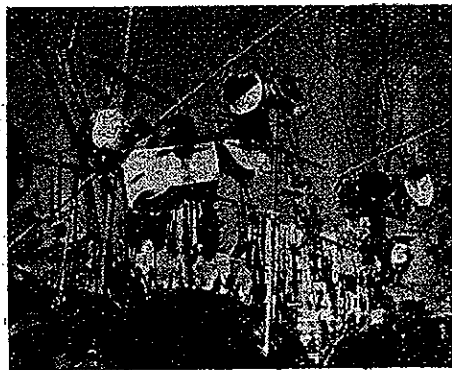
六五錢—三圓

燈籠・支那燈籠は、誰にも喜ばれる美しい土産品である。色々な形が考案され現在では蠟燭の代りに電燈を入れる様にも工夫され、絹、紙張に花模様、芝居繪を美麗に畫き、角々に赤、青の房を下げた宮燈(釣燈籠)又走馬燈、壁燈(壁懸用)臺燈(スタンド式)等色々ある。皆組外しが出来、角形のは疊むことが出来るので荷物としても尙張らずに便利である。燈籠を賣る店は前門外廊房頭條胡同一帶に軒を並べてゐる。

値段は

三圓五〇錢—一五圓程度

支那扇子、團扇・支那扇子は大變優



影芝居の玩具屋

雅なもので、骨を麝竹、香木、象牙等で作る吉祥圖案等彫つてあり、地紙は本来骨とは別々にして賣つて居るので、自分で氣に入つた骨を摸び地紙の方も白いまゝのもの畫や字を書いたものもあるから、それを好みに應じて摸び、貼りつけさせるのである。

地紙も蕭縣中、張大千、齊白石あたり

のものになると一枚で四、五十圓から百圓以上もする。日本のやうに出来合ひで貼つてあるものには上物はない。夏になるとこの美しい蓋の地紙が店頭に並ぶのは爽やかな観物である。

團扇の方は貼つてある、

値段 扇子 一圓—二〇圓

團扇 五〇圓—三圓

額・額縁は華やかな模様を透し彫りにし、繪は名所寫眞や、花鳥模様を表はして支那趣味なものである。

値段 五〇圓—五圓

キルク細工の額は少し値段が高く、キルクに加工して繪に貼付け人物、花鳥等を浮出させた美麗なものがある。

値段 三圓—二〇圓

又鐵板に名所風景を彫り、銀メッキして彩色した夾銀製額と謂ふものもある。

値段 三圓—一五圓

刺繍針箱・元來香箱（香匣子）である

が花鳥、風俗模様を刺繍した布を貼つた蒲鋒型の小箱で、内地の人々には針箱、切手入等に喜ばれる。

値段 三圓—一五圓

堆朱製品・支那に於ける堆朱工業は古く宋代に初まつたもので、清の乾隆時代が最も盛んで、胎を金、銀、銅で作

り、上に何十回となく漆を塗り固め、その面に美麗、精巧な彫刻を爲したものでその大小、技巧に依り値段も異り、現在では胎を錫か鉛で作し、セルロイドと漆と繪具を混用して塗つた粗悪な物が多い。

値段 煙草ケース 四圓—一〇圓

切手入 一圓七〇圓—四圓

紫檀細工・卓、盆、花壺、茶篋司、佛像、香爐台、椅子等があるが値段も一定せず、中には花木、カリン等の贗物もあるから充分氣をつけねばならぬ。

象牙細工

バインブ 三圓—二〇圓  
 筆 一圓—一〇圓  
 その他帶止、ボタン等色々細工されてゐる。

珠數・橄欖樹で作られたものが多く、又七寶、琥珀等のもがある。

檜櫛櫛 一圓—五圓

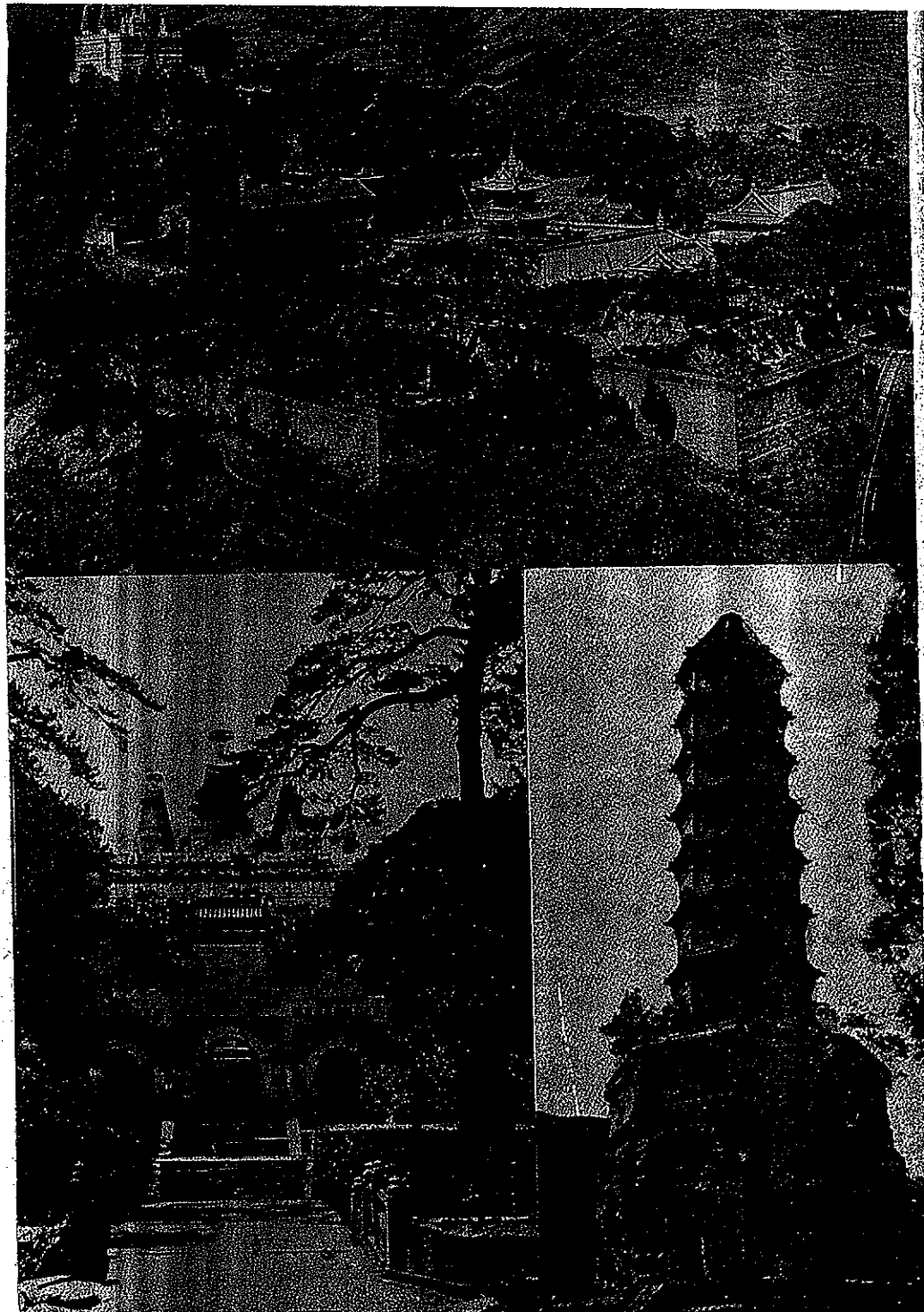
麻雀牌

麻雀牌 三十圓前後

同（セルロイド） 一五、六圓

筆・主に湖州産のもので、俗に湖筆徴と並稱する位である。材料は羊毛が主で、兔、犬、雞なども用ゐる。兔は紫毫といひ、よく筆軸に七紫三羊毫など、彫つてあるが、これは七分が兔で三分羊毛が使つてあるといふ意味である。北京で出来るものは犬、羊の毛が多い。有名な筆屋には胡開文、戴月軒、賀蓮青などがある。

値段 二〇圓—五圓



景全寺景雲(上) 塔瑞琉山香(右下) 座寶剛金寺景雲(左下)

朝の屋臺店  
 近所の邸に勤めるお茶  
 仁・茶・油・果・など賣る店  
 の客お・店賣をど  
 出が店屋から朝早はで京  
 の飯朝てて出が店屋から朝早はで京



墨・古い墨は骨董品として取扱はれるのでその値段も際限ないが、近頃の製品は、大低安徽、蘇州方面から産する。

値段

二〇錢—五圓程度

火鍋子・火鍋子とは支那料理の涮羊肉に使ふ銅製、台付きの鍋であるが、真中に火入れがあり、羊肉を煮乍ら食ふのである。

少々嵩張るので持歸るには不便であるが、邦人には湯豆腐に好く、水炊きに向くので喜ばれる。雅趣のある而も實用な飛れた點で重寶である。

値段

一〇圓—一五圓位

墨壺・銅製品で表面に山水、花鳥、詩文を彫り、墨汁を綿に滲ませて入れる。大小種々の型がある。

値段

二圓—五圓

文鎮・長方形の銅製文鎮で四個位一組に成つたのもあり、聯句、風景畫等彫刻してある。また古學の形を摸した風雅な

ものもある。

値段

一圓—二圓

紙・支那紙の種類も種々雑多で、南方産のものも南紙、北京近傍で出来るのを京紙といふが高級品は總べて南紙即ち安徽、江西、浙江、湖南、福建等で作られるもので、書畫用としての土産品には所謂宣紙、(玉版宣、六吉宣、煮硯紙等々)があり大抵四尺紙一枚四十錢見當からある。本の表紙とか對聯等に用ひる色物は虎皮宣、雨雲宣等一枚一圓から二圓前後で、普通品としては毛邊紙、所謂二番唐紙がある。

封筒・便箋・便箋は即ち詩箋と云はれ、半紙二分の一大の毛邊紙に赤い罫線を引いた普通品から、宣紙の高級品に花鳥、人物、詩文等を薄く、多色刷にし箱に入れて賣る支那趣味に富んだものもある。封筒も普通品は中央に太く赤筋を刷つたものであるが、高價なのは著名畫家

の筆になる繪畫を多色刷で刷り込んである。

値段は

便箋高級品一枚 二錢—一〇錢  
 同 箱入 一圓五〇錢—五圓  
 封筒高級品一枚 四—二〇錢

硯・最上品は廣東省から産する端溪であるが、この眞偽は仲々素人に鑑定し難く、其の他のものも種類が雑多であるから、案内知つた人に同伴見て貰ふ事が一番好い。大低中級品は二、三十圓程度である。

石摺

支那古來からの有名な碑文、畫像石等拓本したものを買つてあるのであるが、古いものや價値あるものは眞偽の程度は疑はしいのであるから、余程の鑑識眼がない限り、掘出しもの等探す氣を起さず、名の通つたものを買ふべきである。種類も多種多様、中には随分いかかはしく常識で考へても有り得ない物の拓

土産物

七、紫梗細工	裕生祥	崇文門外東大市
八、燈籠、扇	興隆號	崇文門外東大市
九、七寶製品	萬發恒	崇文門外東大市
十、支那酒	萬發恒	崇文門外東大市
十一、支那茶	天新和	崇文門外東大市
十二、鐵製壁掛	同興號	崇文門外東大市
品名	店名	所在地
一般土産物	高島屋	西單北大街九二
	北京物産館	米市大街二五一

紙卷	煙草	五十本迄	免稅
葉卷	芝居	二十五本迄	免稅
支那	各種	個	免稅
各種	風俗	個	免稅
人種	各種	個	免稅
琥珀	細工	個	免稅
ハンカチーフ	織	枚	三打
コブラ	織	枚	一打
麻雀	牌	組	課稅

主要おみやげ品と税關

一般土産物	北京站構内賣店
寶玉、翡翠	崇內孝順胡同一三
翡翠	依田忠
翡翠、寶石	依田新
翡翠、寶玉	玉屋翡翠店
七寶帶止、ヒスイ寶石刺繡	三浦商店
文具	崇文門内大街二八
古硯古墨骨董類	北京みやげ 東城蘇州胡同六八
	西湖堂 西便街胡同二四

トラン	組	一組
七寶燒花瓶	個	一個
古代美術刺繡	枚	五枚
支那素麵	兩	五兩
高粱酒	個	二個
七寶製帶止	個	一個
燈籠	個	一個
紹興酒	壺	一壺
支那茶	罐	一罐
支那扇子	個	一個
支那類	個	一個
寶石類	個	一個
名所繪ハガキ	組	三組
乾燥牛肉	函	五函

目下棉布類ハ輸入制限品ニ成ツテキル關係上、携帶必需品ノ範圍内ニ於テ免稅サレルモ、其數稅關吏ニ於テ不當ト認メタルトキハ課稅サレルコトアリ、現在ハ例ヘ給額ニ於テ免稅サレル狀態ニ付キマキハ携行ニハ同一種類ノモノヲ多量ニ携行スルコトハ出來ナイ。

注意 右ノ稅ハ山海關ヲ經テ滿洲國ニ入國或ハ通過ノ際ノ際ノ標旗ヲ示スモノヲ塔沽寄島ヨリ乘船ノ場合ハ多少相違アリ。

本を並べてゐる。事變後日本人が好んで買ふ乾隆帝の「蓬蔭曉月」は原碑を拓本させないから市販の拓本は大概贗物である。

一、二、三、四〇錢一圓前後

法帖 一圓一〇〇圓

支那酒・支那酒は大別して黄酒、白酒それに藥酒があるが、黄酒の最上品は浙江省、紹興を産地とする紹興酒で、外に山東黃、山西黃、花彫等あり、貯藏年限の古い程よいとされてゐる。

北支一帶から産するのは概ね白酒で高粱、粟、玉蜀黍等が主原料で白干兒、高粱酒、汾酒等の種類がある。無色で一才臭味がある。又非常にアルコール分強く多量に呑んで胃腸を害するので、脂肪分を食べて胃壁を防護する必要がある。

茶酒は白酒(白干兒)に果實の色、味をつけた風味の豊かなものである。

以上大體 一斤 二圓以上

支那茶・最近北京へ来る邦人も激増して、在留邦人の間にも支那風の生活様式が大分採り入れられる様になつたが、日常缺くべからざる茶も支那人の愛飲する支那茶を用ひる家が多い。又品質も日本茶に優るとも劣らぬ良品も有り、又一回入れる分だけの小包を、二、三錢から、二、三〇錢位迄でも賣るので便利であり、土産物としても喜ばれる。

入れ方はよく温めた土瓶に茶の葉を入れて熱湯を注ぎ、一二分してから茶碗に注ぐのが本式である。茶の葉の中には新鮮な茉莉花・木蘭花・橙花等を混ぜてあり芳香を發する香片あり、日本茶によく似た龍井や、蘭茶、素茶花など種類はいろ／＼ある。また薔薇の花や菊の花を乾燥させて茶に用ひる花茶もある。

値段は一斤 四、五圓一二十四、五圓位

一、硯、墨、文房具	胡開文	琉璃廠
二、便箋、封筒	寶善齋	前門外廊房二條
文鎮	清秘閣	前門外廊房二條
三、翡翠、玉	德源興	前門外廊房二條
四、毛皮、刺繡	德源興	東珠市口
五、布製品	華北商行	東四條樹胡同
六、象牙細工	裕盛公	前門外西河沿
麻雀牌	協和永	前門外西河沿

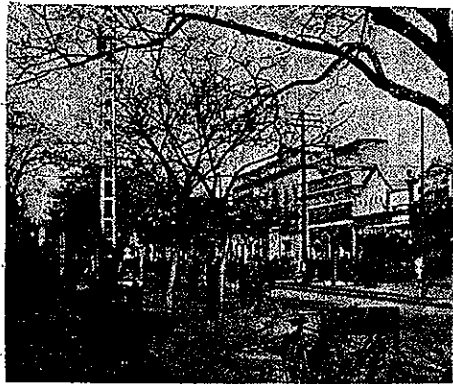
北京土産物販賣店(支那側)

品名 店名 所在地



# 買物の町

王府井大街 日本人は俗に北京銀座と呼び、英米人はモリソン・ストリートといふ。美しい洋槐の街路樹の蔭に、立ち並ぶ洋品雑貨店、貴金屬店、洋服店、喫茶



王府井大街

店、骨董屋、蓄音機屋などが透いて見える道路は舗装してあり、一寸明治時代の銀座を偲ばせるやうな、ハイカラな町である。名高い東安市場もこの町にある。(其項参照)といふよりは、東安市場があるために、この町は繁華を重ねてゐるのだといつても過言ではない。西洋人がモリソン・ストリート呼ぶのは、前清時代に有名な東洋學者にして且つロンドン・タイムスの特派員として「政治家の先見と史家の正確」を有すると稱せられたサヨオサ・エルネスト・モリソンがこの町の西側、今の安福樓の北側あたりに住んで居たのに因んだ名である。東京人が銀座に對して求めて居るやうなものを、北京人は王府井に求めて居ると云へば大體間違ひない。華北第一のデパート、中原公司もここに分館場を置いてゐるし、松坂屋北京支店、麗豐綢緞店、同祥和帽店など大商店揃比してゐる。

珠市口 前門大街を南へ真直ぐに下ると天橋の少し手前に電車の交叉點がある。そこが珠市口である。この附近は民國になつてから盛んになつた所で、北京に於ける最南端の盛り場をなしてゐる。東珠市口には毛皮屋や支那古代刺繍を賣つてゐる店が集つてゐる。刺繍は東安市場や、大柵欄あたりの綢緞舗でも賣つてゐるが、珠市口が一番品も揃つて居り價も安い。

天橋 別項「天橋」参照

前門大街 正陽門、即ち前門を南へ真直ぐに下つたあたり、兩側をいふ。北京のメイン・ストリートである。この大街にクロスする、大柵欄、鮮魚口、廊房頭條、廊房二條、梯子胡同、觀音寺胡同等の熱鬧と相待つて繁華な商業地を形成してゐる。前清時代には、内城は紫禁城を中心とした官廳街、外城商工業地域を形成してゐたのであるが、民國以後次第

# 町の物買

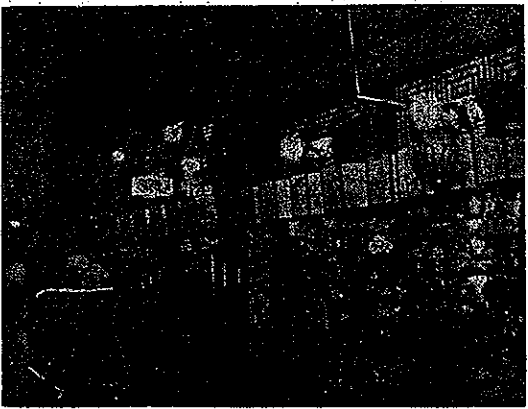
に商業の中心は北移して内城に遷り、殊に今次事變以後東單牌樓、西單牌樓、王府井の附近に集つた。然し前門外には未だに百年以來の老舗が八九割を占めて居るといふから大したものである。前門大街で眼立つものは五金行や銅器舗(金物屋)である。寄せ鍋に喜ばれる火鍋子や、喫烟具、燭基などお土産品に格好なものを賣つてゐる。



大柵欄

大柵欄 北京で最も賑やかな町といへば大柵欄である。降つても照つても、この町だけは肩摩鑿擊の盛況である。この町で最も眼立つのは瑞蚨祥といふ大百貨店で、店が皮貨店、綢緞店、茶葉舗など幾つにも分れてゐる、この店は絶対に懸け値をしない。靴屋には北方鞋店、茶葉屋には東西鴻記、張一元吳德泰、乾果舗には稻香村、など軒を並べてゐる。洋車が辛うじてすれ違へる位の狭い町だが、丁度、前門から琉璃廠や八大胡同への通り道に當るので、夜は殊更觀客を乗せた洋車や自動車の往復で混雑一と方でない。如何にも支那氣分の豊かな町である。

鮮魚口 大柵欄を東へ前門大街を横切つて向ふ側へ這入つたところが鮮魚口である。同じく賑やかで帽子屋の多い町である。小間物屋や點心舗、便飯館などが並んでゐる。東京で云へば神保町か小川



前門外

町あたりの横丁と云つた感じである。

西河沿 前門橋を渡つて直ぐ河沿ひに西へ這入る町。古來から象牙、海馬牙など獸骨細工の店が多い。首飾、飾ボタン、簪、指輪、箸、印材、置物など手頃なものも賣つてゐる。大體に東安市場あたり

の店よりはこの邊で買った方が格安で品物も安心できる。東安市場のは何といつても勤工場物である。

**廊房頭條** 燈籠屋の町である。燈籠に就いては前項に説いたから、こゝには贅せぬが、有名な燈籠屋としては華英齋、華美齋、文盛齋、文華齋等あり、絹張りの團扇、扇子、紗燈などが星羅してゐる様は見るとも美しい町である。北側には、餘り日本人には知られてゐないが、東安市場、西單商場に次ぐ大勸工場「新羅天」があり、土地の人を華客として繁昌してゐる。また寶玉、啓文、中原、天聚興、等の金銀玉細工店や、牙醫が軒を並べてゐる。

**廊房二條** 廊房頭條の一つ南の小路である。狭い胡同だが新古の玉器類を賣る店が揃比してゐる。従つて骨董屋も多い。近頃は少しさびれてゐるので日本人は余り行かないやうだが、落着のある

小じんまりした氣持のいゝ町である。大元號、和成號、永寶齋、義寶齋等が名高い。**花市** 崇文門を南へ抜け、更に一、二丁行つた左側が大市街である。俗に花兒市といふ。昔の宮廷御用造花街のあつたところである。今も造花屋、寶石店、骨董店、絨織店などが多い。

**琉璃廠** 別項「琉璃廠參照」

**東單牌樓** もとは電車通りの曲角附近に單牌樓があつたのでこの名がある。

日用食料品の市場として公設市場東單菜市があり、その向ひ側の忠信公司はお土産用の木綿物などを賣ふのに安くて品も揃つてゐる。東亞公司は北京村以來の日本雜貨店で大概の日本品は揃つてゐる。書籍部も併設してゐる。その南の谷水藥房は北京に於ける最大の日本藥舖である。東單三條を西へ這入ると軒並み靴屋がある。東安市場あたりで買ふより安い品物も確かである。

**東四牌樓** 美しい朱塗の大牌樓が四方を向いて睥睨してゐる。東四を西へ曲つたところが猪市大街で、豚の朝市の立つところだが牌樓から四五軒目の南側に清朝時代の衣帽や裝身具を賣つてゐる店がある。一寸した面白いものがある。お土産には格好である。大分掛値をするから注意を要する。

**西單牌樓** 西城第一の盛り場である。呉服屋や食料品店の大きなものがある。高島屋北京支店にはお土産品賣場の特設あり西單商場は東の東安市場に對する西の大勸工場である。西單菜市は西城一帯の食料品の中心的供給場である。

**西四牌樓** 東四に對する西四である。西安門大街の路南、西四寄りに佛學書局あり、佛教關係の書籍並に器具を賣つてゐる。喇嘛の小道具などに仲々面白いものがある。その隣りは香積園で支那の精進料理屋として名がある。(編輯部調)

## 北 京 年 中 行 事

はしがき・北京は全中國、各省人の寄合世帯と云つてもよい古い都なので嚴密には各々其郷土の習俗を守つてゐる。だから北京特有の年中行事を知ることには困難であるが、一般に共通して行はれる漢民族の行事習俗について概略を述べ参考に供したい。記述の方法は舊來の行事習俗が殆んど舊曆によつて行はれるので、特殊のものを除いて（この場合は特記する）舊曆に従つた。内容については華文資料が概ね非科學的且つ不確實な爲、實地調査を心がけては來たが完全とは云へないので、その邊豫め諒承を願つて置く。さて正月の行事その他すべて歳末と密接な關係にあるので十二月から起筆する。

### 十二月の習俗

八日 臘八節・臘八は即ち臘月の八日で年の暮の序幕である。此日は佛教で釋迦悟道の日として佛家では古來臘八粥を食ふことになつており、一般民家もこの例に倣つてゐる。この粥は糯米を普通の粳米の飯のやうに炊いてこれに八種の乾菓子（乾した果實即ち蓮の實、青梅の砂糖漬、栗、棗、百合、山楂子、玫瑰（薔薇の花を粉末にして入れた餡）精糕（山楂子で作つた羊羹）を混ぜたものでこれに白砂糖を適宜にかけて食べる。民家ではこの日早朝から粥の仕度忙しい。出來たら先づ祖先の靈に供へ、親戚知友近隣にも贈物とする。臘八前になると市中の雜穀店ではその材料を取揃へておく。尙この臘八粥は當日市中の飯館で簡単なものを食べさす所もある。

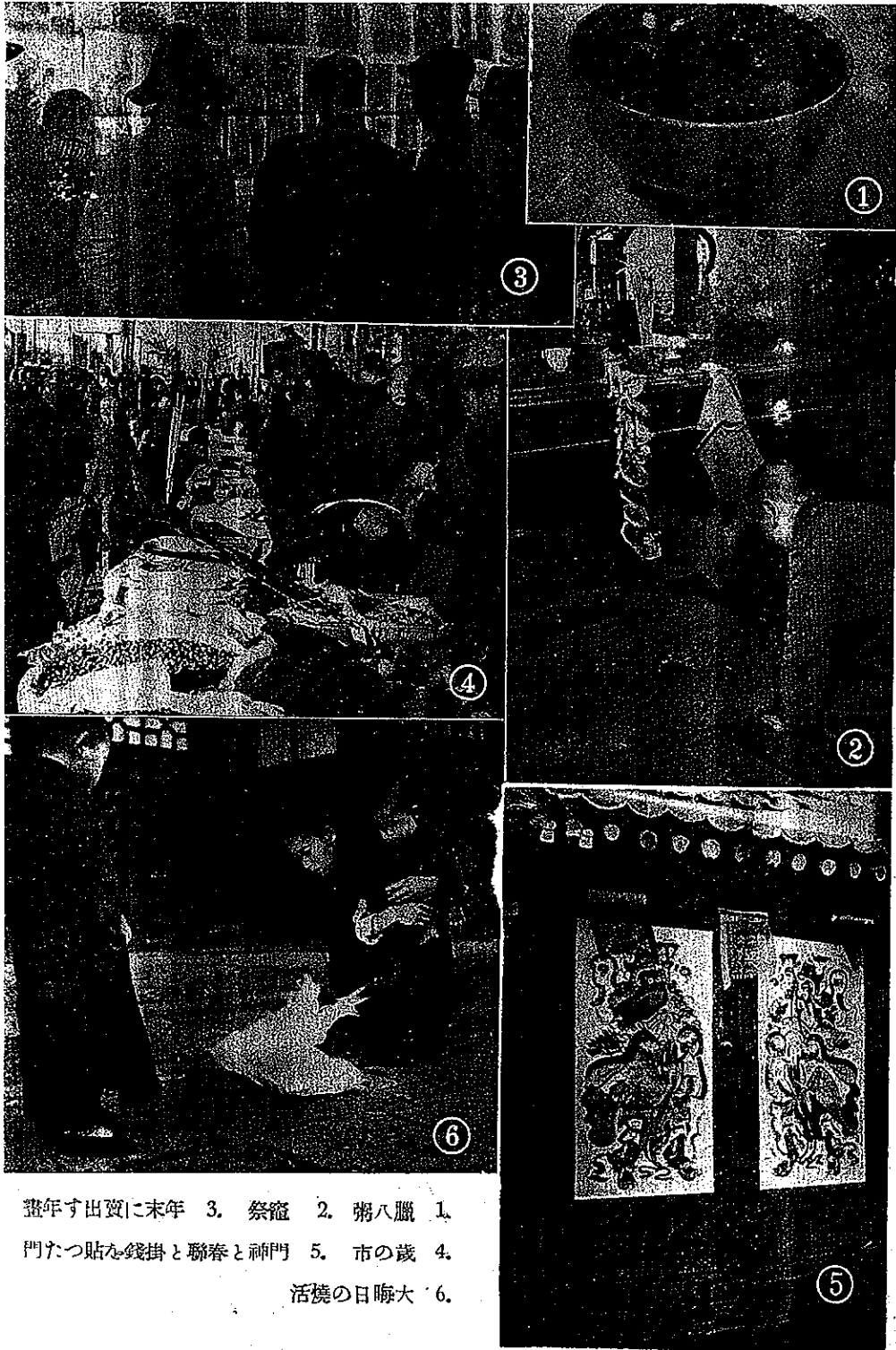
二十三日 臘祭・臘祭りは周禮五祀の一で數千年の昔から今に至る迄行はれてゐる。この日は竈の神即ち竈王爺が妃神の竈王奶奶と一緒に昇天して人間一年の善惡功罪を玉皇大帝に報告なさると云ふ旅立の日である。それで竈や竈神の繪像を清掃してその前に卓子を置き供物をする。

供物には、途中の路銀としての紙錢、乗馬用の秣に模した  
ものや水、それから籠糖と云ふ飴など。この飴の溶けたの  
を繪像の口に塗りつける者があるが、これ籠神御夫妻が昇  
天報告の際口が粘つて悪い事は控へ目にして貰へると云ふ  
わけだ。かくて盛頭の禮をして無事昇天を祈り終ると、同  
時に繪像を壁から剥ぎ取り星の出揃う時刻に供物と一緒に  
籠の前で焼却する。その煙が昇天を意味するわけでこの時  
爆竹を鳴らして行を盛にする。籠神の報告を受けた天帝は  
それによつて翌年の吉凶禍福を授けられるのであるが、報  
告を終へた籠神御夫妻が元の家に歸られるのは大晦日の夜  
半十二時である。

籠祭前になると街頭に飴屋が多く出る。籠祭が過ぎると  
日を撰んで大掃除をやり窓々正月の準備が始まる。この頃  
から年畫(後掲参照)、供花(祭壇飾物)門神(後掲参照)  
掛錢(門の上、祭壇等の上に貼る紙製切抜の飾物)花燈(飾り提燈)や爆竹、凧のいろいろ、その他菓子、果物、肉類を  
の他諸雜貨等、街頭に賣出され歳末風景が賑かになつて行

く。而して各家庭では家の内外の飾付に取かかる。  
門神・別名桃符とも云つて日本ならば門松にあたる。  
二柱の神像を描いた極彩刷繪紙で、籠祭が過ぎてから表門  
扉に二枚向ひ合せに貼る。門神の由来には左の二説がある  
がどちらが眞か確實には分らない。後漢の風俗通に「昔度  
朔山の桃樹の下に神荼(白面)と鬱壘(赤面)と云ふ二神が居  
て、よく鬼を捕へたので鬼共は皆恐れれてゐた。今の人、桃  
板にこの二神を描き門戸に懸けて百鬼を禦ぐ、名づけて桃  
符と云ふ」。又唐の太宗は非常に鬼を恐れ秦瓊(白面)、尉  
遲敬德(赤面)の二將に命じて門を守らせた、後人この二將  
を描いて門に貼ると。

春聯・對聯とも云ふ、紅紙に吉祥對句の文字を書いた  
もので、新春を壽ぐため家の門柱、門扉、人口の柱、梁そ  
の他物置など萬遍なく貼り廻す。そして門神と同じく來年  
迄そのままにしておく。春聯には貼る箇所によつて門心、  
框對、横披、抱柱、春條、斗方などの種類がある。表  
門に「忠孝傳家久、詩書繼世長」など對句を貼るのは門



1. 臘八粥 2. 籠祭 3. 年末に賣出す年畫  
4. 歳の市 5. 門神と春聯を貼る門  
6. 大晦日の焼活

心である。

門の上部に「國恩、家慶、爲善最樂」等二字又は四字の句を横書に貼るのは横披、左右の柱に貼るのは框對と云ふ。抱柱、春條、斗方などは應接室その他の室に貼るものを云ふ。此等春聯の文句は各々商賣によつて適當なものを撰ぶので、北京では代書屋が街頭に出て一般の求めに應ずる。尙、寺廟では人間の住宅と格が違つて黄紙を用ふ。又服喪中の家では白紙、藍紙を用ふ習慣である。

年畫・春聯と共に室内の壁には種々の繪草紙を貼る。之も歳末の街頭に小屋掛などとして賣出すので、繪は多く歴史物や迷信、傳説に類する畫題で非常に多種類である。

燈桿・天燈とも云つて中庭の大門口近くに五メートル位の木桿か竹桿を樹て、その頂邊に柏の小枝を結び付け、その下に風馬(風車)香斗(楯)など飾り、その下に提燈を掲げる。これを燈桿と云つて(北京郊外で所々に見る)二月二日に取拂ふ。但し連続して點すのは元宵前後迄である。

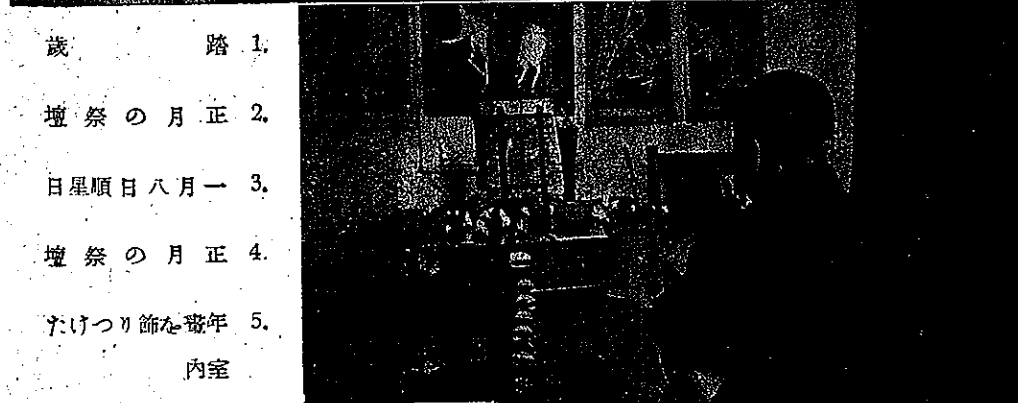
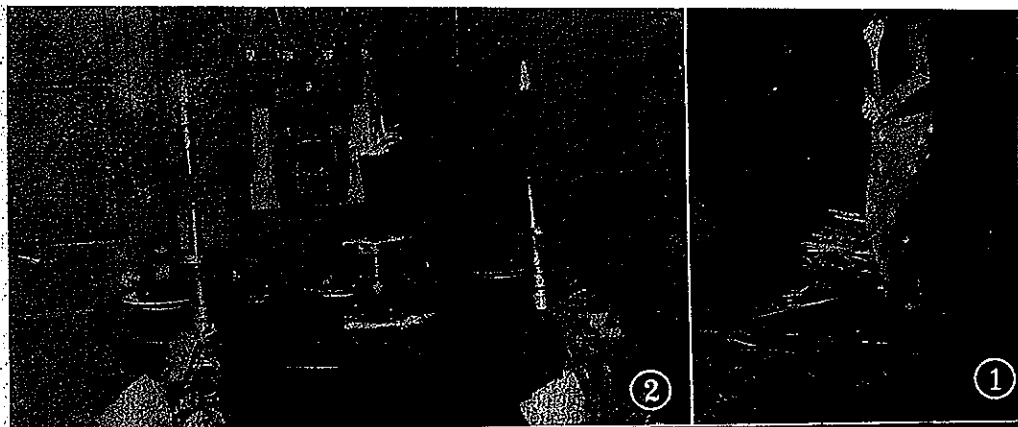
燒紙・晦日大晦日は祖先に禮をつくす日で、先づ墓を

1. 踏 路
2. 正 月 祭 壇
3. 一 月 八 日 順 星 日
4. 正 月 祭 壇
5. 年 終 飾 飾 け づ け

内室

掃除して墓詣りする。この時蠟燭、線香や料理、酒まで供へ、又冥土の故人に日用品を送る。即ち、衣服や錢を金銀鉛の紙で作る白紙の袋(正月前街の紙店で門神その他と一緒に、墨一色の木版畫を施したのを賣る)に入れその上に故人の宛名と差出人の名を書き墓前で焚く。これを燒紙又は燒活と云ふ。

大晦日と接神・普通ならば二十八、九日から爆竹を鳴らし大晦日は一層激しく鳴らす。右の燒紙がすむと次の準備にかかる。街で求めた饗神馬(夫妻二神を一枚に描いた繪刷紙)を籠の眞上の壁に貼り香燭、その他御馳走を供へる。又中庭には全神馬(或は百分と云つて諸神聖賢の總繪像紙)を卓上に祀り香燭、蜜供(麥粉で小指程の棒を作り油で揚げ蜜をかけたのを組み立て四角な塔にしたもの)供花(八仙人や五福の神を象つた飾物)其他茶菓酒肴を供へる。この宵中庭に胡麻稗を撒散らして踏む、これを踏歳と云ふ。右の祭壇作りと供物を終ると一家團樂して茶菓を食へ、麻雀などして祭壇には絶えず線香を焚く。やがて十二時近く



になると禮装した家族は家長の動作にならつて全神馬の祭壇に禮拜する。それから屋内の籠神の前に同じく三拜九叩の禮をして續いて寢室に祀られた祖先の位牌を拜む。

これを接神と云つて二十三日に昇天された籠神と、天地の神々を新しく迎へたのである。そして豫め開けておいた門扉を閉し同時に爆竹を鳴らす。かくて歳々年越しとなるが、この夜は大抵夜明けする。尙大晦日の晩に市中貧家の子が財神紙馬(福の神の繪刷紙)を持つて民家商店を廻る、これを送財神爺と云つて小錢をやることになつてゐる。

### 一月の習俗

元日 拜年・接神がすむと歳々正月氣分になるのである。が迎年の儀式としてはまづ天地四方を拜し、財神を拜し、家堂(祭壇)に祖先を拜し門神に拜す。

それから家長夫婦は家族一同から拜年の禮を受け、次に年少の者から順次に長上に向つて新曆(おめでたう)の言葉と同時に叩頭する。

さて一家團樂して屠蘇酒を飲み、御馳走を食べる。食物

は(正月五日間は炊事を禁するので年内に作り蓄めておく)餃子(肉饅頭)團圓(饅頭)年糕(日本の餅に似て軟かなのに乾糞を點したものを)等を食べる。その中に銅貨や銀貨を入れておいたのを食ひ當てた者はその一年間幸運だと云ふ。此等は神佛前にも先に供へる。

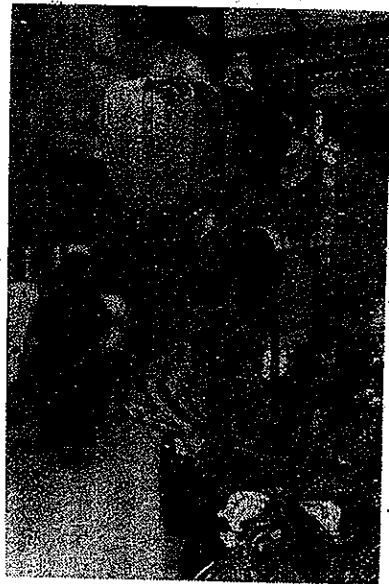
(一般に佛教信者は早朝第一に前門下の關帝廟や朝陽門外の東嶽廟に詣でて歸つてから祖先を祀る)初食がすむと男子は近隣先輩親戚知友の家々に年賀廻をする。この際餘程親密の間柄でなければ家に入らず年賀用の大きな紅紙の名刺を其家のボーイに渡すか門扉口の名刺受に入れて歸る。又親しい家で招入れられても糖茶と云つて茶菓を出されるだけである。女子は昔は五日間外出往來を忌んだが今は段々廢れてゐる。商店員は店内で銅鑼大鼓をたたいて樂しむ。

二日 祀財神・朝早く財神を祭り豚頭(又は羊頭)鶏魚の三牲を供へる。又酒杯の中に火を燃して神に供へ燃え

盡きたら財神嗎(繪像紙)を持つて庭に出て、胡麻桿を組んで立てた上に松柏の枝と紙錢元寶錢と一緒に焚く。そしてこの朝は元寶湯と云つて餛飩(所謂ワンタン)を食ふ。

尙この朝早く最寄の財神廟(特に廣安門外の財神廟は夜明前に賑ふ)に詣る。

八日 順星日・諸星神が下界されると云ふのでお祭する。初更に祭壇を設けて星神馬を祀り、元宵(白玉團子に似たもの)を供へ香を焚き、燈花(綿紙を燃つて上を花形



にしたのを百八ツ、素燵の小さな燭皿に油を入れて點す)をとます。そして庭のあちこちに置くのでこれを散星と云ふ。やがて星神馬(諸星神の繪像紙)を庭に持出し、胡麻桿を組立てた上に松柏の枝と、紙錢と元寶錢を置いたのと一緒に焚く。尙この前後立春になるので多く春餅(麵粉で圓く薄く作つて烙つたのに色々の肉や野菜の料理したのを巻いて食ふ)を食べる。

十五日 燈籠・十三日から十七日迄、正しくは眞中十五日が上元の夜即ち元宵節であるが、この前後五日間を燈節と云つて、各商店、寺廟等思ひ思ひの花燈(飾り提燈)や燈籠(三國誌その他歴史傳説などからとつて繪をかいた燈籠)を飾る。

昔は隨分盛であつたらしいが、今は僅かに前門外商店街の一部、西便門外の白雲觀(ここには西太后御寄進の大懸燈あり)、それから當局が中央公園で行ふ水燈(氷で人物、花鳥など作り中に燈をとます)や麥芽燈(麥の

芽の少し伸びたので菊人形の如く作り燈をともし等に見られるが、寂れたと云つても昔を偲ぶ美しさはある。

この元宵は三元節(七月十五日中元、十月十五日下元)の一つで何れも冥土の亡霊の冥福を祈り金品を焼活によつて送る日であるが、この上元には年の暮に送つて間もないか



元宵節の夜中央公園の氷燈(氷入活はしない形の中に燈を入れる)のである。

この夜家庭では爆竹を鳴らし、祭壇に元宵(白玉團子に似て中に種々の乾果物等で作った餡を入れたもの)を供へ家の者も茹でて食べる。この元宵は平常でも街に賣つてゐるとも云ふ。

がこの元日から元宵節前後が一番盛である。前記に中央公園の氷燈を述べたがこの夜は北海と共に打上げ花火など行はれて大變な賑ひを呈する。要するに燈節は一年中で一番楽しい正月の總仕舞とも云ふべく大いに遊ぶ。尙劇場ではこの前後、節に因んだ應節戯、(上元夫人など)を上演する所もある。(但し最近はお盆や中秋節のそれ程多くない)

それから正月の行樂として昔は秧歌(田植歌から出た踊)高蹺(高脚踊)龍燈(大きな龍の張子に燈を點し大勢で棒で掲げ持つて踊り廻る)



元宵節の夜中央公園に作り燈された氷燈(家の菊人形を作り燈を入れる)

獅子(ユマ狗の恰好した獅子の像を二人で昇ぎ廻る)旱船(船型の張子に燈を點し龍燈のやうに大勢で昇ぎ廻る)燈官(一人が大官に扮し二人の小者を帶同して各家々の軒の懸燈を檢閲して歩く仕組のもの)等(其他總稱して走會と云ふ)が行はれたらしいが、最近は非常に少くなつた。ただ繁華街で注意してゐると偶にねり歩くところを見受ける。

二十五日 填倉(ウメツクワン) この日穀物屋は倉の神を祀り、一般でも御馳走を作る。郊外農家では、朝未明に庭内の地面に籠の灰を以て直徑二米程の圓を描き、その中に十字の直徑を描き、その交叉點に穀類を少量入れた碗を置く。こんなにして同時に數箇所で行ふ。そして又一方、素焼の鉢に小豆一杯盛つてその上に高粱稈で作つた農具の小さな模型を置き、線香を上げ之を穀倉の穀類の上に据ゑ五穀神に祈る。填倉を過ぎると正月の供物を取拂ふ。

一月の行事

一日 東嶽廟開廟・朝陽門外にあり泰山の神を祀る。

開廟とは日本のお開帳に當る縁日のこと。元朝から午後迄初詣での人波にさしもの廣い境内外が埋まる。この廟は西郊の白雲觀と共に道教の寺で、御本尊の他に人事一切を司る七十二司の神々や月下老人や娘々の神等まさに神様デパートの觀がある。尙此廟は毎月一日と十五日に擇慶會と云つて開廟する。

白雲觀開廟・西便門外一支里にあり道教の寺として日本でも有名、開廟十九日迄。特に八日は順星日(星祭)十日は八仙會(天上の神仙もこの夜揃つて降臨すると云ふので祀る)最終日十九日は燕九節(全眞道人元清が自宮した日)として格別の賑ひを呈する。境内に橋洞あり大きな穴鏡を吊し穴鏡の眞中につけた鈴に向つて銅貨を投げ當つたら幸運と云ふ。橋洞の下に窟あり道士が石のやうに動かす坐禪を組んでゐる。

大鐘寺開廟・正名は覺生寺、西直門外北方六支里にあり開廟十五日迄。境内に高樓あり華嚴經を刻んだ大鐘がかかつてゐる。その鐘の頂にある穴の中に小さな鐘がさげ



胸腹の中で炭を焚く(背後に焚口あり)と眼玉と口から火を吐くので、宵暗に混雑する人々の顔を照らす。

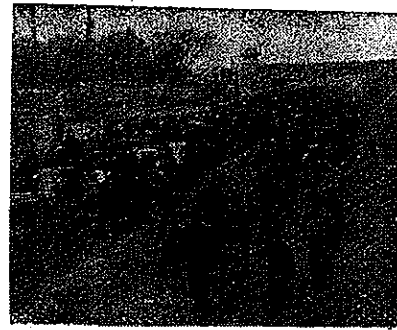
三十日 雍和宮打鬼・北京第一の喇嘛寺(但し建築様式は昔王家の邸である)東四牌樓北方雍和宮大街にあり。この日は演禮で翌二月一日に正式の打鬼を行ふ。(見物には時間的にこの日がい。正式の一日の午前六時頃から始

城隍廟の  
火判兒

めて九時十時には済むのである。さて此日午前  
十時頃より赤や黄の法衣を着た喇嘛僧が法輪

殿で讀經  
し、次に  
門内の廣  
庭に出て  
十四五  
人の僧が  
東に向つ  
て讀經す  
る。他の

僧は彩衣を着て頭に牛や鹿など色々の面を被つて出る。一方では鼓をうち鐘を叩いて樂を奏するとそれにつれて二人又は四人六人と中央に出て跳舞する。交互に約二時間も踊つてから三角の容器に入れてある惡魔の形した小さな人形を殺す仕草をする。そして門外に送り出し廟の周圍を一周してから又門前に来て焚却して爆竹を鳴らす。この打鬼の縁起について次のやうな傳説がある——昔印度に信心深い老婆あり、養鶏で儲けた金を以て喇嘛寶塔を建てたが、それには血の滲む勞役に服した牛がゐた。然るに老婆は人間の勞をねぎらうのみで牛を顧みなかつた。牛は過勞の餘り遂に死んだ。悶々たる魂はやがてチベット二十七代の太子ランデルマ王に生れ變る。此王は片端から喇嘛廟を打壊し僧を殺戮するのでチベットは大恐怖に襲はれた。其時突然現はれたのはフアシアン、ジャルボで彼は王暗殺の機を覗ふうちに正月となつた。そこで餘興をやるよふれ込んで王を招待し、同志に鬼や獸の面を被せて踊らせ王が珍らしさに見とれてゐるところをやつつけた。ところが執拗な牛の



正月白雲  
觀への姿  
道の雜音  
二日 財  
神 廟開廟

廣安門外約四支里にあり、開廟一日。但し早朝未明に詣る。財神爺を祀ると云ふが御本尊は泥棒(義賊)との説あり。この日借元寶と云つて燒香してから神前の紙元寶(金銀紙製の馬蹄銀)を偷み歸り——と云つても實際は何ほか錢を上げ——紅布や紅紙で包んで佛龕の中や床の上に藏つておく。その後儲かつたら吉日を撰んで借りた元寶の額の二倍にして返上する。お禮の錢を進じて燒香する者もある。又、佩福還家と云つて蝙蝠と元寶の飾をつけた花簪を買つて男でも帽子に挿して歸る。廟は小さいが大變な繁昌振で、この朝暗いうちから廣安門に參詣者が詰めかけ開門を待つ。此頃は參詣者の便を計り白雲觀と同じく城内からバスが出る。

十五日 城隍廟火判・地安門外の城隍廟は所謂城隍の行宮と云はれてゐる。十三日から十七日迄(特に中日の十五日が賑ふ)火判を焚く。火判は紅判兒即ち火の判官で、判官は陰界文牘を司る神であるが此處のは鐘馗の形になつてゐる。而して隨設でなく常設式に築いてある。その

であり、それに錢を投げて當つたら幸運と云ふ。このお詣りには途中の田舎風景を楽しむことが出来る。

關帝廟開廟・正陽門の左傍にあり、開廟一日、廟は小さいが元朝暗いうちに賑ふ。

琉璃廠初市・和平門外にあり廠甸とも俗稱する。海王村公園から南新華街一帯にかけ古書畫、玩具等の素嗜しい市が立つ。又五日からは東口にある火神廟の開廟と一緒に、境内は一杯に市中の骨董屋が張店をして寶石古書畫骨董を並べ大變な雜開を呈する。期日は十五日迄だから日を選んで行くといふ。向この

市は近年新正月にも十日程開かれるが舊正月ほどの盛観はない

廣安門外約四支里にあり、開廟一日。但し早朝未明に詣る。財神爺を祀ると云ふが御本尊は泥棒(義賊)との説あり。この日借元寶と云つて燒香してから神前の紙元寶(金銀紙製の馬蹄銀)を偷み歸り——と云つても實際は何ほか錢を上げ——紅布や紅紙で包んで佛龕の中や床の上に藏つておく。その後儲かつたら吉日を撰んで借りた元寶の額の二倍にして返上する。お禮の錢を進じて燒香する者もある。又、佩福還家と云つて蝙蝠と元寶の飾をつけた花簪を買つて男でも帽子に挿して歸る。廟は小さいが大變な繁昌振で、この朝暗いうちから廣安門に參詣者が詰めかけ開門を待つ。此頃は參詣者の便を計り白雲觀と同じく城内からバスが出る。



靈は今度は水の精となり山頂から麓の寺に洪水を流す。これはランダルマ玉のたたりぞと寺の者はジャルボを眞似て鬼面獸面の踊をやる。水はみる／＼退いて行つた。

この打鬼式には兩日共特に第一日は見物人が黒山をなす。尙以前は徳勝門外の黄寺と、同じく黒寺でも打鬼が行はれてゐたが今はない。

## 二月の習俗

一日 太陽生日・此日太陽生るる日として祀る。民家では米の粉で團子を五ツ作り重ね、その上にやはり糯米で寸餘の鶏を作り彩色したのを挿す。これを太陽鶏糕と云つてお供へするのである。崇文門外の太陽宮が開廟になる。

二日 龍抬頭・昔の中和節で龍抬頭と俗稱する。一般に水餃子(麥粉製肉饅頭)を龍の耳と云つて食ひ、春餅(圓く平たい麥粉製の焼いたのに肉類野菜など巻いて食ふ)を龍の鱗、麵條(うどん)を龍の鬚として食ふ。又飯杓子を以て炕(温床)をたたき蟄伏する五毒虫(蛇、ガマ、むかで、蝎、

ゲジゲジ)を拂ふと云ふ。又燭をともして各室の壁際を照らす、これは五毒虫が出ないやうとのまちなひ。尙この日婦女子は針仕事を禁する。龍の目を傷つけるのを恐れるの意で、若し傷つけたら盲目になると云ふ。

## 二月の行事

一日 太陽宮開廟・左安門内天壇東方にあり此日太陽生るる日として祀る。開廟二日。

關帝廟、觀音廟開廟・正陽門下兩袖にあり、同じく開廟一日。

十九日 觀音廟會・正陽門下にあり、開廟一日。觀音大士の誕生日である。尙市中の寺廟で觀音を祀るところはこの日皆讀經典禮を行ふ。

## 三月の習俗

清明節と寒食節・清明節は春分から十五日目で年によつて一定しない。その前日を寒食節と云つて一日火を俵はず

朝から冷い物を食ふ。之に就て左の傳説がある——春秋時代に晉の文公は青年時代に不遇で十九年も亡命してゐたが、遂に秦の穆公の協力により晉に還り盟主となることが出来た。その間絶えず文公に随つて犬馬の勞を盡したのは臣下の介子推である。ところが文公は盟主となつたら介子の功績を忘れて顧みないので介は悲しんで老母を伴つて懸山の山中に隠棲した。文公はやがてこの事を知り介の行方を探すべく懸賞を以てしたが遂に及ばず、一策を案じて全山に火を放つた。ところが、豈計らんや介は母を奉じたまま、

燒死したのである。後人之を憐んでこの日を命日に火の氣を絶つと云ふ。

聖清明節は十月一日と對して前半年の鬼節である。この日民家では一般に豌豆黃、その他御馳走を作り、墓參して祖先の爲に燒活して冥福を祈る。婦女子は軟い柳枝を折つて蹄り狗型などに編んで髪に挿す。

尙この日は植樹の好時節でもあり、右故事に因んで介子推の爲山林を復活するとの意から植樹をする。それで別名

植樹節とも云ふのであるが、最近では政府當局要人が天壇に行つて植樹式を行ふ。

## 三月の行事

一日 蟠桃宮廟會・別名太平宮本尊は西王母、東便門内にあり開廟五日迄。時節は暑からず寒からず長壽を願ふ參詣者で賑ふ。眞中の三日に當る蟠桃會は日本で云ふ桃の節句で、この日天上では西王母の主催で他の諸神を集め大園遊會が催される。その際諸神は各々、桃を一箇づつ献上する、と云ふ故事によるのである。

十五日 東嶽廟廟會・朝陽門外にあり、開廟二十七日迄。二十八日は東嶽大帝の聖誕日で特別に賑ふ。(祀神その他一月の項參照)。

十八日 天台山廟會・西郊磨石口にあり開廟一日。

これは滿洲の天齊廟會に當る閻君(閻魔大王の一種)のお祭で、この魔王は有名であるが目下時局柄(後掲妙峯山と同じく)參詣に不便である。

四月の習俗

十三日 薬鋪減價・十三日は薬王の祭で、市中の漢薬店では薬の割引販賣をするので主だつ薬店には買手が押寄せ。店頭にはその旨書出すのが普通である。尙この月は娘々廟會の全盛月で、市中所々に貼られた報單(ピラ)が眼立つ。妙峯山(後掲)の廟會は最近城内に出開帳をして市民の便を計る。

又花見の月で西山の李花、中央公園、北海、近郊聖合の芍薬など絢を競ふ。

四月の行事

一日 妙峯山開廟・城外西北百三十余支里にあり、開廟十五日迄。道教の寺で娘々廟中の第一。開廟中山腹一帶茶店など出て大變な賑を呈する。特に市中の茶會、獅子會、秧歌會、などが、所謂走會と云つて隊を組んで押しかけるので壯觀である(但し目下走會は中止中)尙參詣者は桃

のステッキを買歸り、又帶福還家と云つて縁喜の髪飾を買つて歸る。

西頂開廟・正名は廣仁宮、娘々を祀る。西直門外十五支里にあり、開廟十五日迄。廟市が立つ。

戒台寺開廟・蘆溝橋西北約二十支里にあり。開廟十五日迄。佛陀と佛母を祀る。

萬壽寺開廟・西直門外五六支里にあり、開廟十五日迄。明の永樂年間の築造で規模宏大。

碧雲寺開廟・西山にあり、開廟十五日迄。五百羅漢を祀つてゐる。彫塑の妙見るべきものがある。

八日 天寧寺開廟・廣安門外にあり開廟一日。この佛塔は立派である。尙この八日は釋迦の聖誕日で浴佛會と云つて各寺廟では讀經してお祭する。

天・仙・廟開廟・西直門外にあり天仙娘々を祀る。開廟一日、この日天仙降臨すると云ふ。

十三日 藥王廟開廟・藥王の祭で各其廟で行ふ。

十八日 北頂開廟・正名は碧霞元君廟、娘々を祀る。

德勝門外土城の東北にあり開廟一日。日用品農具等の市が立ち田舎びた縁日風景を呈する。

二十二日 城隍廟開廟・地安門外西方にあり開廟一日。城隍の行宮と稱せられる。

二十八日 造甲廟開廟・廣安門外にあり開廟一日。

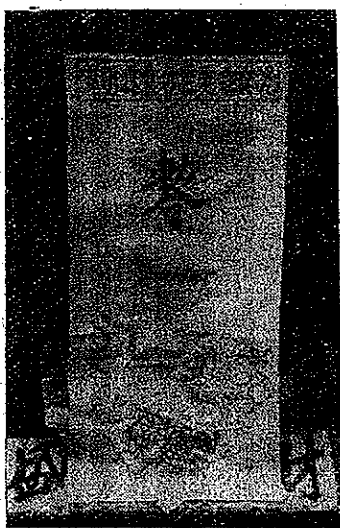


看丹廟  
開廟・右安門外にあり  
開廟一日。  
五月端午節の日の子供。頭には老虎(絨毛製)の髻をさし長命鎖を下げてゐる。

五月の習俗

五日 端陽節・一名端午節とも云つて一日から五日迄としてゐる。三月三日の桃の節句に對する菖蒲の節句で

又の名蒲節とも云ふ。民家一般に門前や軒端に菖蒲と蓬をかけ、門前には更に五雷天師符、又は殊妙神判(鏡道像)や五毒符(何れも魔除けの意味の色刷紙)を貼る。女の子は綾糸で小さな虎や瓢箪など作り色紐をつけて首にかけたり胸にさす。これを長命鎖と云つて日本のクスダマに當る魔除けのものである。男の子は雄黄酒(藥酒)で額に王の字を書いて一年中五毒を避けると云ふ。佛前には粽子(チマキ)や果物を供へ、五毒酒(雄黄酒)のことで藥酒を飲み御馳走を食べる。又五日の正午に古墨を磨つて蛙の腹中に注射し日に乾して保存する。これは毒氣ある病に効く。



五月五日端陽節の門口・五雷天師符を貼つたところ

と云ふ。尙この端午前後には市中の劇場で「五毒傳」又は「混元盒」と云ふ應節の芝居を上演する。又商店では三大節期(仲秋節、年末)の一で決算期であるから忙しい。

最後に端午節の縁起に就て次の様な傳説がある。戰國時代に楚の懷王の大夫であつた屈原は奸臣靳尚の謀害によつ



て退けられ遂に五月五日浙江(汨羅江)に入水自殺した。時に二十五才であつたが屈原は大忠臣であり詩人としても天下に名を馳せた。その死後家郷一帯に豊作が續いたので百性達五月端午節は、これは前に賽り出す粽子(チキと屈原マキ)と菖蒲と蓬の遺徳であ

らうと以來五月五日の命日には屈原を弔ひ川施餓鬼を行ふやうになつた。

夏至 には一般に麵條(うどん)を食ひ又蒜の砂糖漬を作つて嘗へる。

什刹海(地安門外、北海の北)では五月一日から七月一日迄アンペラ小屋が立ち遊樂場が開かれる。日用品や玩具等小商人が露店を出しアンペラ小屋の茶店では夏らしい季節の食品を出す。

### 五月の行事

一日 臥佛寺開廟・崇文門外にあり開廟五日。

北頂開廟・德勝門外土城の東北。開廟五日。

十一日 關帝廟開廟・永定門外。開廟五日。

この中日十三日を農家では雨節と云つてどんな旱魃でも此日迄には雨が降ると云ふ。三國志に名高い關羽が敵將東吳の孫權の宴會に招かれたのは五月十六日である。其時關羽は群臣の諫止を尻目に平然と單騎、招宴に乗込ん

だのであるが十一日準備として刀を研いだ。その刀研ぎには雨水を使つたので、以來天は關羽の武威に感じて雨を降らすと云ふ。

十三日 雍和宮開廟・喇嘛誦經して祀神の典禮をする。

### 六月の習俗

六日 蟲干・不垢の日として婦女は此日髪を洗ひ、犬猫迄水浴さす。一般に衣類の蟲干をなし讀書人は曝書をす。善果寺(廣安門内)では經文を曝す。此日は農家の所謂蟲王節である。

此月は北海、中南海、御藻傍などの蓮の花が咲盛る。北京の名花、夜來香、茉莉花なども街に賣出される。

### 六月の行事

一日 中頂開廟・右安門外草橋にあり、娘々を祀る開廟一日。廟市が立つ。

白雲觀曝書・一日より七日迄、三清閣上に密封して

ある道藏の書籍を蟲干する。

二十三日 白雲觀開廟・開廟二日。

二十四日 關帝廟開廟・永定門外にあり開廟二日。

### 七月の習俗

七日 七夕・俗に乞巧節とも云つて日本の七夕に當る。織女と牽牛の二星が年に一度の逢瀬を楽しむとの傳説も同じである。婦女は此夜月下に水を盛つた碗を持出し針を浮べて碗底に見る影の形によつて針仕事の巧拙を占ふ。これを乞巧針と云ふ。

十五日 中元節・日本のお盆である。一月十五日の上元と十月十五日の下元と共に三元節の一。俗に鬼節とも云つて民家一般に祖先を祀ること清明節と同様である。子供等は夕方長い蓮の葉、又は紙製の蓮の花に蠟燭をともし蓮花燈の歌をうたひ乍ら街中を馳廻る。尙この中元前になると蓮花燈と云ふ色紙細工(蓮花の形や、同じく蓮の花弁で鶏などの形に作る)の燈籠が街頭に賣出されて美しい。

孟蘭盆の縁起に就いて——釋迦が舍衛國に居られた時、目連なる者、その父母を生死の苦から救はうとするに母は



七月十五 轉生日お盆の燒法船、して餓鬼の中に居

た。目連は悲しんで鉢に飯を盛つて出す母が受取つて食べようとすると火炭になつて食べられぬ。目連は釋迦の許に馳けつけ助を乞ふ。釋迦は七

七月の行事

一日 七星斗壇・俗に祭斗と云つて一日から七日迄各道院では壇を設けて北斗星を祀る。白雲觀、東嶽廟斗母宮など知られてゐる。

七日 天河配・七夕の應節戯として市中の戲場では織女と牛郎の傳説を仕組んだ芝居「天河配」を上演する。

十五日 燒法船・十五日は日本でも佛の日としてゐるが、北京の寺廟では此日孟蘭盆會を行ひ孤魂を慰める。そして紙張子の船(長さ數丈或は丈餘)に鬼王鬼官鬼頭鬼役を乗せたのを作つて境内に据え、その前で讀經し夜になつてから焚く。これを燒法船と云ふ。

放河燈・この夜北海中海は放河燈(日本の燈籠流し)で賑ふ。蓮の花形に作つたのを流すので、その間流し船に乗つた僧侶や道士達が樂を奏し讀經をする。

江南城隍廟廟會・外五區宣武門外南橫街東口にあ開廟一日。この燒法船は有名である。

月十五日衆僧に供養したる解脱すべしと教へた。

八月の習俗

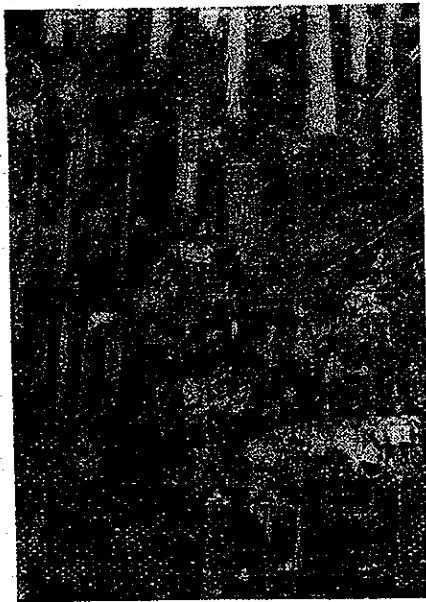
十五日 中秋節・桂花(木犀)の咲く時節の放河燈(燈籠流し)・紙製蓮花型に豆糖(豆糖)をよみ、壇を設けて月亮馬兒を立てて祀る。月亮馬兒は



上に太陰星君、或は玉皇大帝、風雲雷雨、菩薩諸神の像を描き、下には杵を持つて薬を搗く鬼のゐる月の宮を描いた極彩刷繪紙で之を高梁稗を支柱にして貼付けを立てる。卓上には中秋節特別の月餅(乾し果物や砂糖で

類、酒などお供へする。

婦女子は團圓餅と云つて饅頭を供へて禮拜する。明月中天に昇つて拜月の禮が済んだら月亮馬兒を焚いて供物を

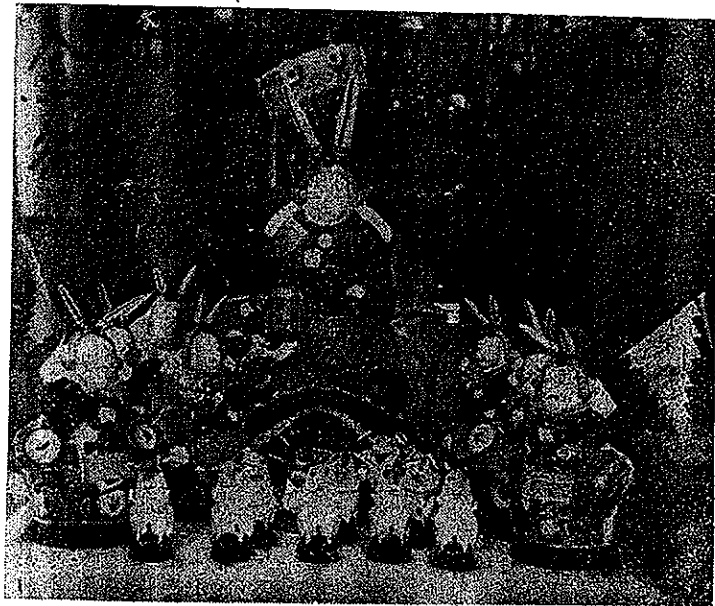


下げ一家團樂して月見の宴をひらく。

尚この中秋節になると街頭に鬼兒爺と云ふ泥

出する相

製極彩色の兎の八形を賣出す。この兎は武神となつて麒麟や虎や馬などに跨つたり、又は色々な形に作られてゐる。これは子供達がお祭りに使ふのである。



中秋の節兎見(土粉調彩色)

るので嫦娥は急に下界戀しくなり一人の淋しさに打沈む。  
尙中秋節の應節戯としてやはり傳説から生れた「唐王遊

九日 重陽節・重九節とも云ふ。即ち九は陽數の極で九月九日は九の字の重なるを以て謂ふ。この日登高と云つて都人士多く茶菓酒肴を携へて高所に登る。天高く馬肥ゆる時節なので一日の行樂を以て浩然の氣を養ふのである。西山、釣魚台、陶然亭、北海、景山など適地として擇ば

九月の習俗

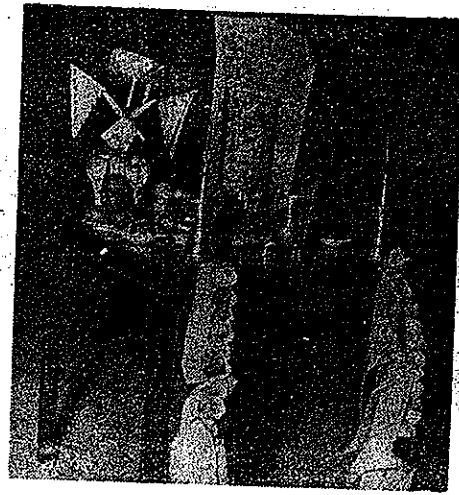
一日 龍君廟廟會・崇文門外花兒市にあり開廟二日迄。龍王神の誕生日で飯館の料理人や茶館の従事員など多く詣る。序作ら十二月の龍祭の時此廟は何事もない。  
二十七日 孔子祭・孔子の誕生日で新曆に當はめて孔子廟で祭禮が行はれ、各學校は休業する。此祭禮は古樂器を用ひて壯重である。

八月の行事

月宮」がある。これは伊達者唐の玄宗皇帝が月の世界に遊ばれたと云ふ夢のやうな話を芝居にしたもの。(詳細略)

又中秋節は三大決算期の一で商店その他取引貸借上の難關であるから邦人は特に泥棒をスリを用心したがよい。

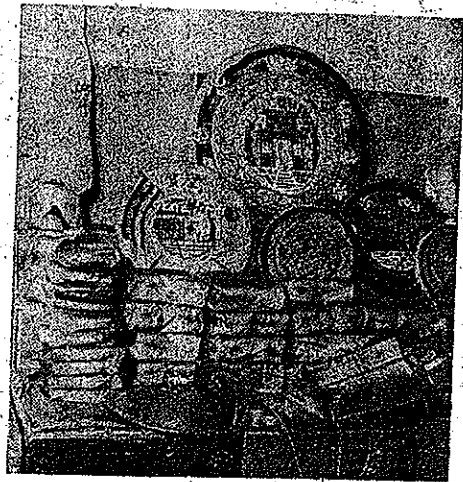
序年と中秋節の應節戯「嫦娥奔月」の略筋について(往時梅蘭芳の名演を以て知られたが今は振はない)前述月亮馬兒の圖柄の解釋に役立つので述べて置く。弓の名人后羿は西王母の蟠桃大會に出席した時貰つた仙丹靈藥を妻の嫦娥



中秋節の夜の祭  
埋石は月亮馬兒、  
左は兎見翁

は天空を逃げて出す、后羿は逃さじと追つかけて行く

嫦娥は廣寒宮(月宮殿)に飛込んでしまふ。月宮では仙女達の大歓迎を受け、仲間の領袖にされてしまふ。后羿は一度家に引返し弓矢を持って出直して行く道化た兎の夫婦が仙丹靈藥を搦



后羿が妻を返せと云ふと兎は散々ひやかすので后羿は怒つて殴りかかる。兎は敗走した。  
立替つて桂の世話役吳剛が現れ后羿を撃退す。后羿は西王母に嘆願するが相手にされな

い。さて中秋が来て天上では盛宴が開かれる。嫦娥は酒に酔つて下界を眺めると下界でも皆夫婦仲良く酒宴を開いてる

れる。

尙此日都人士多く烤羊肉(ジンギスカン鍋)重陽花糕(應節の菓子)を食ふ。

登高の縁起に就いて一昔費長房なる者、汝南の桓景に曰く、九月九日君が家に必ず災あるべし、家人に袋を縫はして茱萸の實を入れ、携べて山に登り菊花酒を飲め、然らば災を避け得て無事ならむと。桓景その言に従つて家族と共に山に登り夕方歸宅せるに家畜皆斃死し居たりきと。

九月の行事

一日 白雲觀九皇會・西便門外にあり、九日迄壇を設けて道士が讀經する。各道院も一般に祭禮を行ふ。九日は半母の誕生日と云はれてゐる。

十五日 財神廟開廟・廣安門外にあり開廟三日。

十月の習俗

一日 送寒衣・所謂孟冬で亡者も冥土で衣替への要がある。

るので多物と金錢を送る習俗である。寒衣は五色の色紙細工で長さ尺に足らず(市中の紙店で賣る)これを墓詣して焚くか、夕方家庭で禮拜の後焚く。

十五日 下元節・別に家庭での行事なし。寺院菴觀ではこの日より翌年正月二十五日迄讀經するのが例で所謂百日功德の道場である。

冬賑・孟冬以後になると寒氣が迫るので冬賑と云つて貧民浮浪者の爲に各寺廟、慈善機關團體が施粥、暖廠(採暖處所としてアンペラ小屋を建てる)を始める。之は孟夏の施茶(佛教同願會等が街頭に無料で茶を出す)と共に北京らしい一面である。

十月の行事

一日 江南城隍廟開廟・外五區南橫街にあり開廟一日。

二十五日 白塔寺開廟・阜成門内にあり開廟一日。この日燈火を以て白塔を飾り喇嘛僧等塔を繞つて誦經する。

十一月の習俗

十五日 冬至・此日一般に餛飩(ワンタン)を食ふ。夏至には麵(うどん)を食ふ習俗なので冬至餛飩夏至麵の諺がある。(十一月は行事に見るべきなし)

定期廟市

廟市は元來日本の寺の開帳に當る縁日であるが、此定期廟市は今全く境内を借りて日用諸雜貨の市を開くのみ。但し何れも見世物など立並び常住不斷に賑はつてゐる。

新曆毎旬 九の日、十日、一日、二日、

隆福寺 (東四牌樓西隆福寺前街)

三日 土地廟 (廣安門内下斜街路西)

四の日 花兒市 (崇文門外)

五日 六の日 白塔寺 (阜成門内)

七日 八の日 護國寺 (西四牌樓護國寺街)

朝市

食糧市—西珠市口、廣安門大街  
零碎物市—曉市大街、德勝門内

登市

馬市—德勝門外

鳩市小島市—各定期廟市ある寺廟

夜市

新曆毎旬一日、四日、七日、西珠市口

二日、五日、八日 前門外大街

三日、六日、九日 崇文門外大街

以上述べて來て思ふことは此等の行事習俗が如何に根強く北京市民の生活に結ばれてゐるか云ふことである。而して我々にとつては北京生活の眼立たぬ乍ら強い魅力となる。近來漸次廢れて行く時の勢もあるが一面廟會などは治安確立と共に振興せらるる氣運に見受けられる。

(中 島 荒 登)

# 支那芝居案内

## 一、支那劇とはどんなものか

こゝに述べるのは北京の支那劇であるが、北京は支那劇の本場であるから、北京の支那劇を知れば結局支那劇全體の概念が得られるわけである。

歴史を尋ねれば原始的のものは別として、大體元の時代が今日の如き支那劇の始めと思つて差支あるまい。元の都は北京であるから、北京が劇の本場たる歴史はかなり古いのである。それから幾變遷を経て清朝の末期に至り、今日行はれてゐるやうな様式の劇が形成されたものである。

一言にして云へば支那劇は「音律（若くは噓子）を基礎とした象徵劇」である。或點に於て日本の歌舞伎に似、また能樂

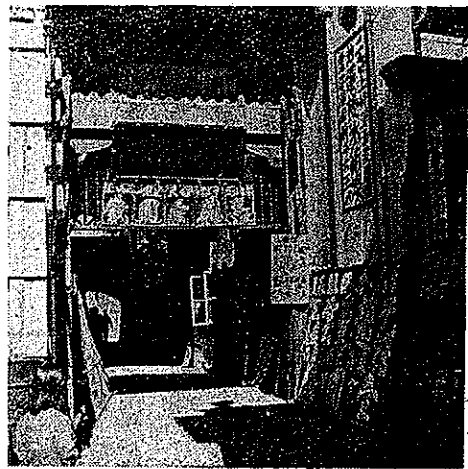
に類する所がある。而して一つの

藝題全體としての演出よりも、局部の場面場面の演出に重きが置かれる。換言

すれば筋の運びを輕視して、俳優個人の藝を重視するのである。

支那劇は北方支那人の特に愛好する所で、或意味からすればこれは彼等の生活の一部分でさへある。殊に北京人（永住者）はこれを愛好すること、恰も今日の日本の青年及學生層に於ける映畫の如きものがある。否それよりも遙に程度が深い。

北方支那人の生活と劇との關係を密切ならしめてゐる一



（戲院の入口）

つの理由としては、支那劇の中心が歌唱にあるといふ點を擧げなければならぬ。由來北支には中南支の如き、或は

日本に於けるが如き歌謡（一定の曲譜を有する俗謡、民謡、流行歌等）が殆ど無いので彼等一般大衆が人類必然の要求として歌を唱はなければならない場合、劇の一節の歌曲を以て之に代用して來た。「唱戲」といふことは「芝居をする」といふ意味であるが、必ずしも芝居でなくても、單に「歌を唱ふ」といふ場合にこの「唱戲」といふ言葉を用ふることがある。それほどに劇と生活とは關係が深いのである。勿論近頃は映畫主題歌や、近代的な流行歌なども上海方面から傳はつて、青少年層には漸次さうしたものが浸潤しつゝはあるが、一般的に言へば依然、劇歌が壓倒的である。

要約すれば支那劇は「音律を基礎とする象徵劇であつて、特に歌曲を中心とする」ものである。

劇は普通「戲」と云ふ。劇と全然同じ意味である。芝居を觀ることを北京では「聽戲」と云ふ。これは如何に北京人が劇に對して歌即ち耳で聽くことを重視してゐるかを物語るものである。尙他地方では「看戲」といふことが多い。

## 二、劇の種類

支那劇の種類の分け方には、音律従つて樂器を基とする分け方と、地域的な分け方との二通りがあるが、こゝでは北京に行はれてゐるものに就て述べるのであるから、専ら前者の樂器を主とする分け方に依て説明する。地域的といふのは北京の外、上海、漢口、廣東、山西等にそれぞれ地方色を盛つた劇があることを指すのである。

(一) 皮黃、皮は「西皮」の略、黃は「二黃」の略である。その由來に就ては種々説があるが、要するにどちらも胡琴（胡弓）を基礎樂器とする歌曲の名稱である。即ち劇中に扱まれる歌調子が、二黃及び西皮を中心とするもので、劇に附隨する音樂（噓子）がこの兩曲を合せた皮黃を以て構成されてゐると言ふことになる。兩曲共に胡琴に合せて唱ひ、伴奏として二胡（胡琴の一種でやゝ調子の低いもの）、銅鑼、鉦、月琴、太鼓等を用ふるが、伴奏樂器は他の劇と大同小異である。伴奏樂器は單に歌の場合のみならず、劇の進行を誘導したり、俳優の所作に調子をつけたりするための奏樂に用ひられる。今日普通に支那劇と云へば、皮黃劇のことを指す。又

これは北京に於て發達し、北京を本場とするが故に京劇（京戲）とも稱される。同時にこれは北京のみならず、北支及滿洲に於て今日壓倒的勢力を有するが故に、支那劇の代表的なものと謂ふべきである。

(二) 評戲、これはもと俗子、或は嘲々（チヤウ）と稱し、冀東の唐山地方に發生した田舎芝居であつて、最初天津、滿洲地方に傳はり、評戲と名を改めて北京に進出したのは、所謂北伐（民國十七年・昭和三年）以後のことである。この劇は後に述べる椰子の一種とも認められ、嚴密に言へば、樂器を基礎とする分類の上からは椰子と同一範圍に屬するものであるが、實際に獨立した一種の劇としての立場を持つてゐるので、こゝに擧げた次第である。これは胡琴に以て形でそれより大型の碗琴（ワン）と稱する樂器を主調として、劇中の歌曲をそれに合せて唱ふものである。同時に椰子と同じく、拍子木を主樂器として用ひる。この歌曲の特徴は、皮黃に比して著しく單調であり、且つ何となく卑俗な感じがある。

現在北京に於て同時に北支滿洲に於て皮黃に次ぐ勢力を持つてゐるのであるが、評戲の持つ最も大きな特色は、劇の内容が主として男女の情痴を基とし美貌の婦人曲は評戲と同じく單調で變化に乏しい。山西椰子の方は劇中に喧騒感が少く普通の椰子よりは上品である。

(四) 崑曲、これは中支、江南地方から起つたと云はれるが、北京で大成したもので、皮黃や椰子よりも前の時代に於て、支那劇の主流をなしてゐた。云はゞ古典劇である。これは絃樂を用ひないで、明笛を主樂器とする點に最も大きな特色がある。劇の内容は皮黃、椰子と同様、時代物を主としてゐるが、それらよりも更に歌曲本位であつて、殆ど筋を問題にしない。古典劇であるために脚本の文章も極めて難解の古文に依て作られてゐる點、日本の能樂によく似てゐる。歌曲は椰子と同じく單調で變化に乏しい。これは今日殆ど一般大衆からは見棄てられ、興行としては成り立たないが、中上流社會の紳士淑女の間に、日本の謡曲の如く趣味として傳習されてゐる。又皮黃劇の一部にはこれを取入れたものがあり、もともと支那劇の源流をなすものであるから、皮黃劇の名優たるべき資格としては崑曲の素養が無ければならないとされてゐるので、完全に廢れることはない。

尚ほ以上の外、外國輸入の對話劇（音律を全然用ひないもので、「話劇」と云ふ）も近頃試験的に多少行はれて

な主人公とする人情劇であり、主演者が必ず、女優であるといふことである。従て皮黃劇の如く時代物を主として千慮萬様の内容を有し、男優を主とするものと劇然たる區別がある。従てこれは主として下層階級及び特殊の好事者向きである。但し、近來これに改良を加へて、音樂は本來のまゝとし、内容を比較的高級のものに變へるといふ試みがなされ、漸次中流以上の階級にも浸潤しつつある。

(三) 椰子、これは陝西省に起つたと云はれ秦腔（秦は陝西省の別名）の別名があるが今日は山西省に於て特に盛である、北京に於ては皮黃と同程度或はそれよりも古い歴史を持つのであるが、今日は非常に衰微し、わずかに天橋あたりの場末に命脈を繋いでゐるに過ぎない。但し山西椰子といふのは時々好い劇場にかかることがある。

椰子は上述の評戲と同じく碗琴（胡琴の大型のもの）を主樂器とし、それに拍子木の外、明笛を附屬する。椰子といふのはこの拍子木のことであつて、歌に合せて打ち鳴らすその音は極めて強く甲高く、耳を刺戟する。碗琴の音も亦た甲高く、耳を刺戟し、餘り近代的でない。劇の内容は皮黃と同様時代物を主としてゐる。歌

あるが、これは未だ問題にならない。

### 三、舞台の大要

上述の如く今日の支那劇は京劇（皮黃）を主とするものであり、京劇を知れば他は大同小異であるから、自ら判るので、以下すべて京劇に就て説明する。

舞台は新舊兩式がある。舊式のものには萬壽山の徳和園にあるが如く、四角形で、前方客席に面して柱が左右にあり、観客の妨害になる。新式のものには、半圓形で前に柱が無い。

舞台の後方には背景を原則として用ひないで、普通模様入りの幕を垂らしてゐる。その幕の左右に長方形の孔を開けて出入口が設けられ、その孔の口にも幕と同じ材料で作つた簾が垂らしてゐる。舞台上には絨毯を敷き、向つて右又は左の隅に嚙子方（場面と云ふ）が陣取つてゐる。近頃程根秋（女形名優）の發案に依り、この嚙子方を観客に見えないやうに圍ひの内に引込めるやりかたを採用してゐる所もある。

支那劇は象徴主義を重んじてゐるので後述する如く多く



の場合約束に依て事をかたづけられるため、背景は勿論大道具を一切用ひず、わづかに数種の小道具を使用するだけである。従つて、劇の開始に張幕を使用する必要もなく（新しい方法を採るものは別として）、劇の始りを知らせるためには囃子方の奏する太鼓と銅鑼の調子に依ることになつてゐる。劇が始つて舞台に何も置いてなければ、その場面は野外である、卓子や椅子が置いてあれば、室内といふことになる。人物が登場する場合は向て左の口から出て來、退場の時は右の口からする。若し人が他家を訪問する場合に、訪問を受けた方の人物は右の口から出る。敵味方對陣（戦争）の場合は左右からそれぞれ出る。

多數の部下を有する人物（帝王、大將）の場合は、先に部下が出て後から首領が出る。部下は常に二人以上の偶數である（召使の場合は別）劇の主人公が登場する場合には、簾の内側で台詞の一句か、歌の一節かを唱へ、それが終つてキツと簾が揚げられると始めて舞台に顔を出す（但し、この方法に依らないで、無言で出て來ることもある）

主人公若くは重要な劇中人物の場合は、登場して、先づ引子と稱する伴奏無しの台詞に少し節をつけて唱ひ、終つ

る。時に武器を棄て、徒手空拳の立廻りを演るが、組打ちまではしない。立廻りの途中で時々、ヒタと動きを止め、大見得を切る。大部隊の戦闘の場合は武器を簡單に敵味方で交又するだけである。退却追撃の場合は右の口から内へ引込んで、又左の口から出て來る。

各場の變りは卓子と椅子の置き換へ及び囃子によつて示す。劇の終りは人物の退場と、囃子の停止に依て示す。全部の終り（閉場）には、チャルメラを吹いて知らせる。

#### 四、京劇の種類と役柄

京劇は前述の通り北京では「聽戲」といふが如く、主として歌を聴くのが目的であるが、然し必ずしもそれだけでなく、眼で見ることを目的とするものも相當ある。前者の歌や台詞を主とする劇を「文戲」と云ひ、後者の立廻りを主とする劇を「武戲」と云ふ。好みは人に依て異なるが、普通の興行では、この兩者を適當に混ぜてプログラムを作り、最後に座長の主演する劇を組むことになつてゐる。新しい傾向としては眼と耳とを共に楽しませる芝居があり、これは普通筋を見せるやうに出來てゐるので、時間がかかる關

て一應自分の姓名、原籍、素性などを名乗る。これは日本の謡曲と同形式である。戦争の劇の場合は、大將が登場する前に、四人若くは八人の部將が一人づつ出て來て、威武を示す型を演る。（起覇と云ふ）それが終つて、舞台の前面に一列横隊となり、觀客の方に向つて、順次に姓名を名乗り、それから後ろ向きになつて、大將の登場を迎へる。

問答は普通台詞でやり、特に重要な感懷を述べたり、心の中で思つてゐることを表現する（即ち普通には口に出さないこと）場合に歌を唱ふ。日本の芝居に例を取れば鹽谷判官が切腹の場合、千萬無量の感懷を表現するにはたゞ腹藝で表情に依るのであるが、これを支那劇にすれば、こしかたを顧み、高師直に對する恨みの數々を歌にして、二黄の反調といふ哀曲を唱ふわけである。劇の最高調（クライマックス）の場面では、問答を歌にして掛け合ひで唱ふことがある。この場合は二黄の原板といふ曲が多い。

所作は主役だけが、強調的にこまかい藝を見せ寫實以上に演る。

立廻り（チャンバラ）は役に依て刀槍劍戟と各種の武器（主として木製の模型）を用ひ、主役だけが猛烈な型を演

係上、一回に一藝題だけ、若くは前座一、二齣に端役の芝居を出してあとは全部それにしてゐる。この種のものには「文武老生劇」の外、女形の名優が各自獨占的に主演する専用の新劇がある。文戲は比較的静かで、慣れない外國人にも割合に辛抱できるが、武戲は囃子が喧騒を極めるので外國人には耳を塞ぎたくなるほどこたへる。

次に京劇は前述の通り、筋の運びや劇全體としての演出如何を問題にしないで、俳優個々の藝のみを問題とするところから、藝題（脚本）の構成が主人公のみを活躍させるやうに出來てゐる。従つて主人公の素性に依り一定の役柄が出來て居り、その役柄を専門に俳優は修業することになつてゐる。稀に器用人は二種以上の役柄を勤めることもあるが、一般には各人毎に一種の役柄だけしか演らない。（反串といつて餘興的に専門外の特に不似合な役に扮して演ることがあるが、これは別問題である）劇の區分もこれに依つて種々にされるわけで、見慣れた者には藝題を見ればこれはどういふ役柄俳優の演し物であるかといふことが判る。従つて支那劇を觀るためには役柄に對する大體の知識を必要とする。次にそれを説明する。

役柄を大別して「生」「旦」「淨」「丑」の四種に分ける。昔はこの外「末」といふのが言はれたが、今日はこれは要するに老生の端役であるから老生の内に入れてゐる。「生」は劇中人物(以下すべてこれに倣ふ)の男性であり、普通善人若くは特殊の性癖の無い人物を意味し、特徴は顔に隈取をしないことである。「旦」は女性であり、俳優は女形である。「淨」は男性であつて特殊の性癖を持つ人物、特徴は顔に隈取をして假面を被つたやうに見せる。「丑」は一般的には道化役であつて、時に小人或はオッチョコチヨイ的人物の場合がある。大體日本の三枚目役と思へば可い。特徴は鼻の上部と眼の廻りだけを白く塗る。

次にこれを詳説する。

(一) 老生(別名鬚生或は鬚子)

支那で老と云へば大體五十歳以上で鬚を生やすことになつてゐるが、老生といふ役は人物の年齢は兎に角、耳の下から額にかけて長い鬚を附ける。鬚は年齢に依つて黒、胡麻鹽(蒼といふ)、白と分けられる。これは主として正義派の人物であつて、名君、忠臣、賢相、烈士、學者、長老といつた役である。この老生の劇に對する目的は、主として歌な

聴くことに在り、時に台詞を主とする場合もある。従つて第一の條件は喉(嗓子といふ)の好いこと、次に扮装の上品なこと(儒雅といふ形容詞に當る)、次に所作の巧いことである。又この役には武老生と云つて、相當の立廻りが必要とする場合があるから、武工(武藝の型)の心得が無ければ完全な人材ではない。

老生の劇とその人物の有名なものを挙げれば次の通りである。

三國志物(空城計、失街亭、借東風等)に於ける諸葛孔明(亮)。定軍山の黃忠、(これは立廻りが要る)。打魚殺家の蕭恩。四郎探母の楊延輝(四郎)。打棍出箱(瓊林宴)の范仲禹。烏盆計(奇冤報)の劉世昌。洪羊洞の楊延昭(六郎)。武家坡の薛平貴。捉放曹の陳宮。

その他數百種に及び、京劇中最も數の多い劇である。不世出の天才梅蘭芳が出て且(女形)の芝居の地位を引揚げるまでは、老生の芝居が京劇の最上位に置かれてゐた。而して今日と雖も依然その地位は下つてはゐない。

(二) 武生

武生は、武將、勇士、劔俠等要するに武勇を以て立つ所の人物の役である。老英雄(武老生)の場合を除き、普通は

鬚を附けず、たゞ勇氣凛々として颯爽たる扮装をする。この役の目的は主として所作即ち立廻りであり、武藝の型の美を見せることに在る。然し完全なる武生としては、喉も好くなければならず、歌、台詞ともに達者であること必要とする。昔は武生にも歌専門の芝居があり、立廻り専門の者と分れてゐたが、今日はそれが明瞭に分けられなくなり、一般に立廻りを主として、歌、台詞を従とするやうになつて來た。

武生の劇とその人物の有名なものを挙げれば次の如くである。

三國志物(長坂坡、陽平關等)に於ける趙雲。獨木關の薛仁貴(これは歌が主)。刺巴杰の駱宏勳。水滸傳物(獅子樓、挑簾裁衣等)に於ける武松。挑華車(挑滑車)の高沖(或は高寵とも書く)。落馬湖、連環套等に於ける黃天霸。青石山の關平。白水灘の十一郎等。

尙ほ武生俳優に依つて演ぜられる役で、上述の武生本來の様式に依らず、顔に隈取りをして後述する武淨の役と同様のものがある。即ち

霸王別姬の項羽。鐵籠山の姜維。西遊記の孫悟空。驪陽樓の高登。狀元印の常遇春。等である。

(三) 文武老生

これは上海で創められた新しい傾向のもので、在來の單純な劇と異り、俳優個人の藝の外、筋の面白さを見せる芝居の役柄で、老生の如く歌も演るし、武生の如く立廻りも演る。人物は大體に於て英雄豪傑或は劔俠といつたものである。三國志の關羽は、顔を眞赤に塗り、歌も唱へば、立廻りも演る、獨特の役柄で、人に依つてこの役を「紅生」と云つたり、或は「紅淨」と云つたりする。然しこれは今日大體に於て文武老生の役である。

文武老生の劇と人物の主なるものには、  
路遙知馬力の路遙。白奉官の白春。羊角哀の羊角哀。濟公活佛の濟公。關公走麥城の關羽及關平等すべて新作物である。

(四) 小生

小生は鬚のまだ生えない青少年といふ年輩の役で、才子佳人と云ふ才子に當る人物が多く、日本の二枚目と相似た處があるが、普通には女形の主人公に對するアキ役となることが多い。又二枚目的色男でなく年若き英雄の役の場合もある。特徴は女の如く美しく顔を化粧すること。甲高い聲と低い聲とを混じて台詞を言ふこと。二枚目の場合は扇

子を持つてゐること、年少英雄の場合は雉尾と稱する長い雉の羽を二本頭の冠に附けること等である。歌の場合に甲高い聲ばかりを用ひる。この役は瀟洒風流たる態度所作を重んじ、主人公の場合に所作の外、歌も重要である。

小生は上述の如くワキ役として、女形の芝居には大抵の場合に存在するが、これを主人公とする劇は多くない。その主なる者は、

白門樓、轅門射戟等に於ける呂布、取南郡。三氣周瑜等に於ける周瑜、羅成叫關の羅成。岳家莊の岳雲等である。

ワキ役として重要なものでは、

玉堂春の王金龍。紅鸞喜の莫稽。御碑亭の柳生春。その他、三國志物(上掲以外の)に於ける呂布(連環計、虎牢關等)周瑜(黃鶴樓、群英會、借東風、回荊州等)がある。

(五) 青衣(正旦)

女形であり、貞女烈婦の役である。特徴は裙子(股の形の見えない袴)を穿き、髪を長く垂らしてゐる。この役の目的は専ら歌に在り、男役の老生と共に耳を樂しませる芝居の双璧である。青衣と云ふのは普通、地味な黒味の勝つた

衣装を着けるところから來てゐるが、人物に依ては綺麗な模様の衣装も着る。青衣の主なる劇には

桑園會の羅氏。萬里長城の孟姜女。宇宙峯の趙小姐。三娘教子の王春娥。祭長江の孫尚香。武家坡の王寶川。汾河灣の柳氏。六月雪の竇娥。賀后罵殿の賀后。二進宮の李后等がある。

(六) 花旦

青衣と對蹠的な派手な女、或は淫婦毒婦等所謂ツアンブ型を主とし、善良であつてもお轉變な娘や召使ひ等は、この役である。特徴は原則として裙子を穿かないで股の形を見せるやうに褲子(ズボン)だけを穿く。在來のこの役は足に踊工と云つて小さな竹馬を附け、それに小さな靴を穿かせてゐたが、今日はこれは廢れつゝある。この役は専ら台詞と所作を重んじ歌は従である。又台詞に劇専用の言葉を用ひないで、普通の俗語を用ふる事、後述の「丑」と同様である。

花旦の主なる劇には

連環計の貂蟬。紅霓關の東方氏。貴妃醉酒の楊貴妃。四郎探母の鐵鏡公主。大劈棺の田氏。挑簾裁衣(戲叔)の

潘金蓮。翠屏山の潘巧雲。烏龍院の閻惜姣。花田錯の春蘭。玉堂春の蘇三(これは例外で歌を主とする)打櫻桃の女公子。小放牛の女郎等がある。

(七) 花衫

これは梅蘭芳に依て創められた役であつて、一言にして云へば美人の役である。前掲の青衣、花旦のどちらにも當てばまらない種類の人物(女)で、勿論在來無かつた新作劇に於ける役であり主人公である。特徴は華麗な扮装をすること、古装といふ支那の昔の美人畫に見らるゝ如き衣装を着、髪をおさげにすることである。(但し髪は他の型もある)この役は歌を青衣同様に重んずる外、一種の舞踊を演る。

花衫劇の主なるものには、

霸王別姬の虞姬。天女散花の天女。廉錦楓(劇名主人公名も同じ)。太真外傳の楊貴妃。秦良玉(主人公名も同じ)。靡登伽女(同上)。紅拂傳の紅拂女。埋香幻の盈々。孔雀東南飛の劉蘭芝。その他女形各名優専用の劇が無数にある。

(八) 老旦

老年の婦人の役である。特徴は頭に鉢巻様のきれな巻

き、裙子を穿き、長い杖を突いて出る。發聲法は老生に似て少し荒い。この役はワキ役の場合を除き、専ら歌を聴くべきものである。歌聲は老生より甲高い。この役を主演とする劇は非常に少く、又筋が簡單で人物も少く、殆ど一人芝居である。

老旦の劇は

徐母罵曹(徐庶の母)。目蓮救母(遊六殿、滑油山等)釣金龜。行路訓子。(及び哭靈)。斷太后。(及び打龍袍)等がある。

(九) 武旦(刀馬旦)

女で武勇すぐれた者の役である。歴史小説の中の女丈夫や、美人に化けた妖怪變化の類がこの役になる。特徴は活動に便利なやうに身體にヒツタリと附いた衣装を着、裙子を穿かず褲子のみである。在來のこの役は花旦と同じく足に踊工を施してゐる。この役は専ら立廻り本位で、殆ど台詞も無く歌は全然無い。立廻りは二本の槍を持って、曲藝みたいなことをするのが特色である。顔は美人に作る。

武旦の劇の主なるものには

泗州城(虹橋贈珠)の水母娘々。楚江關(馬上緣)の樊梨花。穆柯寨。轅門斬子。破洪州等の穆桂英。演火樞

(十)花臉(淨)  
の楊排風。金山寺(白蛇傳)の白蛇の精等がある。

これは説明しにくい役であるが、男の特殊の性癖を持つ人物の役と云へば大體當つてゐる。第一の特徴は前述の如く顔に限取をすることである。次には發聲が太く且つ荒々しい。怒つた時でなくとも叱りつけるやうに聞える。又普通皆鬚を附ける。この役には色々種類があるから、次にその主なる者を説明する。

イ、大花臉、これは黒頭、銅錘花臉等の別名があり、文名を正淨と云ふ。元老、大臣宰相といった地位の者で、氣性が激しく大剛的な人物の役。この役は専ら歌を聴くべきである。限取は黒色本位で明るい色は用ひない。主なる劇に

草橋關の姚期・白良關の尉遲恭。探險山の包公。二進宮の徐延昭等がある。

ロ、二花臉、架子花臉とも云ひ、文名は副淨。主として敵役或は、奸雄、大盜、惡官、土豪等の役であるが、時に粗暴な豪傑、例へば張飛、黑旋風李逵、花和尚魯智深等の如き役でもある。この役は所作及び台詞を主とし歌は従である。限取は奸物の場合は眞白に作り、粗暴な豪傑

丑といふのは道化役であるが、これにも次の如き種類がある。

イ、文丑 文戲の道化役で、人物は種々であるが、男ならば、藪醫者、乞食、小商人、權勢に阿附する小人輩といったやうなものが多く、女ならば、惡たれ婆、媒婆(男女の媒介を商賣にする女)、やりて婆等が多い。女の道化役は本來彩且と云ふのであるが、今日は文丑の役になつてゐる。この役は殆ど大抵の芝居にマキ役として、存在するが、若干これを主演とする劇がある。

文丑主演の劇には、藪醫(藪醫者)。背橋(女房に弱い男二人)。遊燈(盲人)等がある。

文丑の活躍する他役主演の劇には、賣馬(宿屋の主人)。打魚殺家(武術教師)。烏盆記(張別古)等色々ある。

ロ、武丑 武戲の道化役で、人物は明確な標準が無いが、大體に於て低脳な豪傑とか、へうきんな性格の人物がこれに當る。顔の作りを滑稽にし、甲冑を着ける場合には、わざとダラシなく被る。立廻りも滑稽な身ぶりである。文丑ほど多く出ない。これを主演するのは在來の劇では打瓜團(陶三春の父)くらゐなもので、近頃名武丑役の葉盛章といふ俳優が色々武丑主演の新作物を演じてゐる。

は黒色本位、その他は褐色、青、緑、白等を混合する。この役は各種の劇にマキ役として出ることが多く、主人公となることは少い。その主なるものに取洛陽の馬武。捉放曹、戰宛城等の三國志物に於ける曹操。斬馬謖の馬謖。葭萌關、蘆花蕩等の張飛。打瓜團の鄭恩。下河東の歐陽防。連環套の寶爾教等がある。

ハ、武二花臉 文名は武淨、この役は主演すること少く、多くの場合マキ役として、武劇に於ける點景的人物を勤める。軍隊などの一方の部將で、餘り重要でない人物になる。限取は二花臉と様式は違はない。この役は原則として立廻りを専門とし、歌や台詞は殆ど問題でない。前掲武生の處に述べたやうに、この役で主演するやうな場合には、武生俳優が勤めることが多く、武二花臉専門の俳優は概ね端役である。即ち霸王別姬の項羽、狀元印の常遇春等は限取をして明に武二花臉の役であるが、之に扮する俳優は概ね武生である。

尚ほ今日の傾向としては、大花臉と二花臉とを兼ねて演ずる俳優が多く、總稱して單に花臉と呼べば足りる。但し歌の出来ない者は大花臉は演れない。

(十一)丑

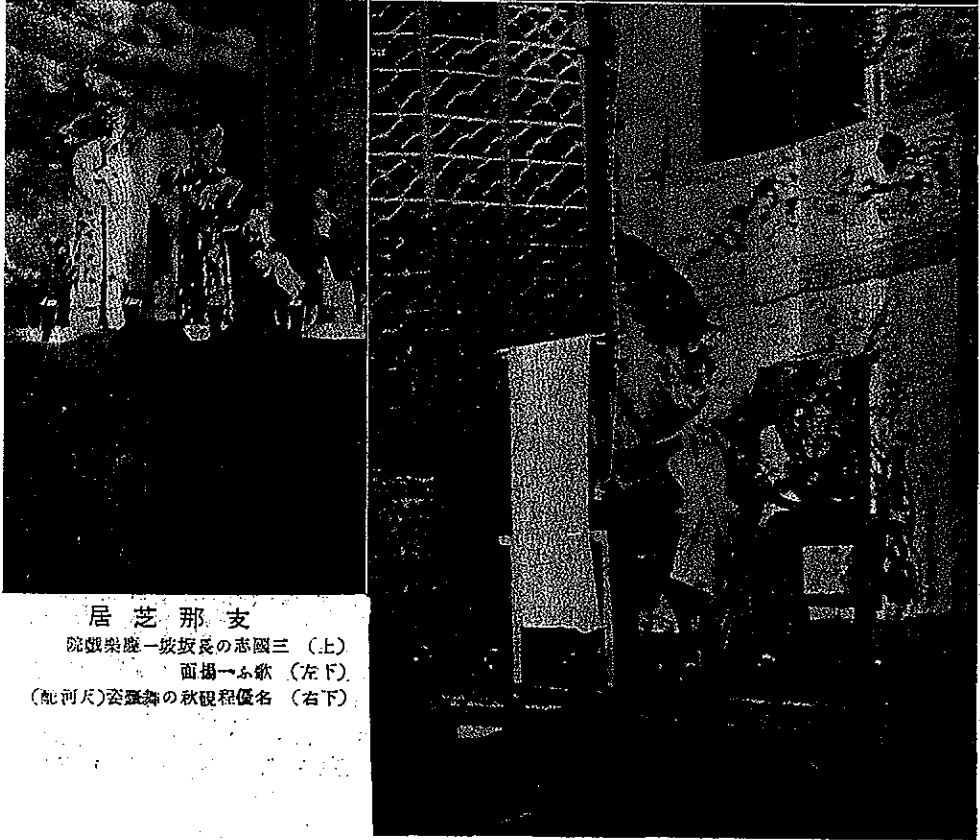
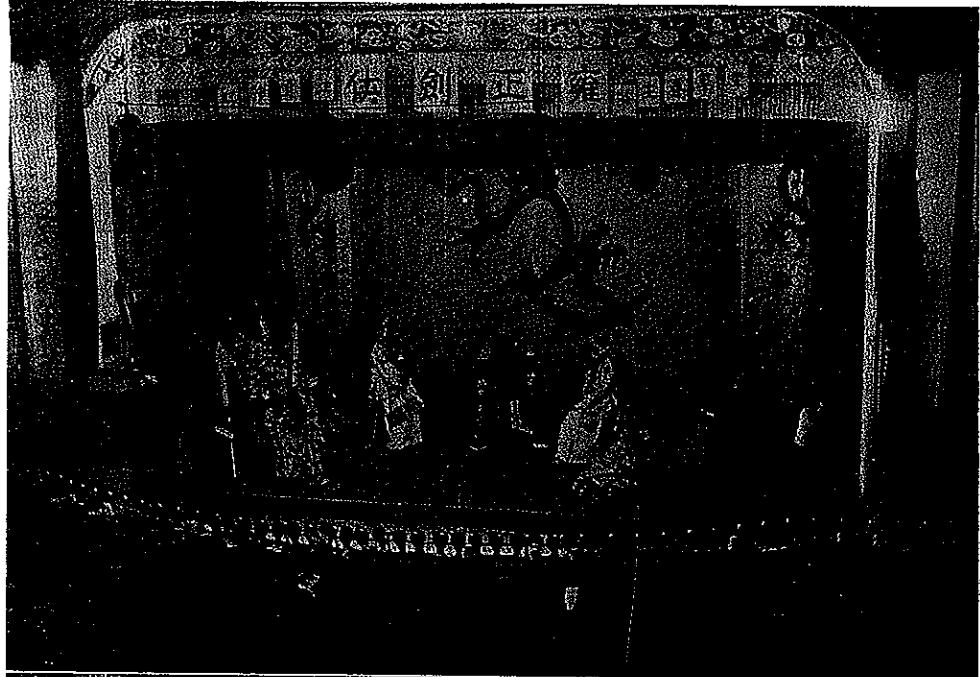
る。一般にはマキ役であつて、その主なるものに、黃天翔物(叭蟠廟、連環套等)に於ける朱光祖。群英會の蔣幹。打登州、選元戎等の程咬金等がある。

五、約 束

京劇は象徴主義を重んずる關係上、及び主眼を俳優個々の藝に置いてゐる都合上、舞台裝置や道具類はできるだけ簡略にして、それらは約束に依て示すことにしてゐる。慣れない者が京劇を観る場合、約束を知つてゐないと餘計に判りにくいから、その主要な點を略述する。

(一)道具による約束

- 1 卓と椅子が置いてあれば室内、何も無ければ野外。
- 2 棒を二本立て一本を横にして附け、それに垂れ幕を掛ければ、寢所、役所、陣營等になる。
- 3 椅子を横に倒して置けば、牢屋、穴藏等になる。
- 4 卓の上に人が上れば高い處(山の上や、壁の上等)に上つたことになる。
- 5 黒又は藍色のきれに煉瓦の模様を描いた幕を立てれば城壁となり、それを開いて人が出入すれば城門となる。
- 6 酒瓶と杯を卓の上に列べれば宴會といふことになる。



支那芝居  
 三國志長坂一廢樂戲院 (上)  
 歌ふ一面場 (左下)  
 名優程秋の舞臺(河配) (右下)

- 7 三尺ばかりの棒に三組か四組のふきを附けたものは鞭で、これは馬を意味する。これを持って歩けば馬に乗っていることになる。
- 8 櫓を持ってあれば船を意味し、櫓を持つて漕ぐまねをする人物(船頭)が後について歩けば船に乗って行くことになる。
- 9 黄色のきれ地に車輪の形を描いた旗は車を示し、これを腰に當てて歩けば車に乗って行くことになる。
- 10 黒い旗を振つて歩けば風が吹くことを意味し、赤い旗は雪の降ること、白地に波の模様を描いた旗は水中を意味する。
- 11 女形が赤い巾を頭に被つて出れば、結婚式である。後方に反り返つたり或は倒れた人物に赤い巾を被せれば死んだことになる。
- 12 矢の根或は槍の穂の如き形をした二尺ばかりの細長い板は令箭と云ひ、これを手渡すれば或命令を與へることになる。
- 13 鎖鎖類にかけて垂らすのは罪人などが縛られてゐることである。
- 14 雲形を描いた楯の如き板を持って出れば天上の神様の登場である。

- 15 棒を立て、紐を垂らしたものを、側に行き、その紐を掴んで立つてあれば、縊死することになる。
- (二) 動作による約束
- 1 空間を両手で門を開けたり閉めたりするのは家の中に出入することになる。
  - 2 道具を使はないから空間が時と壁となり扉となる。舞台上面と面と向き合ひながら、家の内と外とで互ひに顔の見えないことになつてゐる場合がある。その場合に立聞きしたり、窓を開けたりするのはすべて所作で眞似をする。
  - 3 身體を前にかゝめて着物の裾をからげ、小さきみに飛ばやうに歩くのは階段の昇り降りを示す。
  - 4 椅子に坐り、卓に肘をついて身體を寄りかゝり、頭を手を當てて眠る様子をすれば、うたゝねではなく本當に寝所で寝ることの意味する。
  - 5 鞭を持つて前後に飛ぶやうな動作をすれば、馬が勇むことになり、その人物の武勇を示す意味がある。鞭を持つて跨ぐ眞似をすれば馬の乗り下りを示す。
  - 6 従者の如き者が左右から手を振つて空中に半圓を描き

その間を別の一人が身體をかまめて通れば、轎の乗り降りの意味する。

7 報と書いた旗を持った男が、大将の前に出て、膝を叩いて早口にものを言ふのは傳令である。

8 鬚を前後に大きく振るのは、非常に焦つて道を急ぐ場合である。

9 毛のふさの附いた槍を三本で、投げたり受けたり、足で蹴つたりして、大神樂のやうな曲藝を演ずるのは、武藝のすぐれてゐることを示す意味がある。これは武且の芝居に多い。

(三) 扮装による約束

1 背中に龍の模様のある赤黄色の長衣を被て、赤い玉の澤山附いた冠を被るのは天子。

2 冠を被り、腰に輪(玉帶)を吊りかけてゐるのは現職の役人。従つて冠を脱し玉帶を外せば退官を意味する。

3 甲冑を着けて肩に三角の小旗を四本付けてゐるのは一方の大將格。

4 長い袖付きの陣羽織の如きもの被て、細長い旗を持って出るのは、近衛兵或は旗下といつたやうな部隊である。

5 八卦の模様を金色で描いた長衣を被るのは軍師或は道士。

士。この場合羽團扇を持てゐれば三國志の諸葛孔明である。

6 身體にびつたりした着物を被、帯の先がふさになつてゐるのを前に垂らし、頭に大黒頭巾の如きものが、玉を澤山集めて杯の如き形になつた帽子を冠つてゐるのは飯狭である。

7 赤や黄や青のきれなつきはぎにした着物を被るのは乞食同然に落ちぶれた人物である。

8 短い鬚をつけた老人風で、バナマ帽の後部を上向けに折つたやうな形の帽子を冠るのは樵夫又は漁夫である。

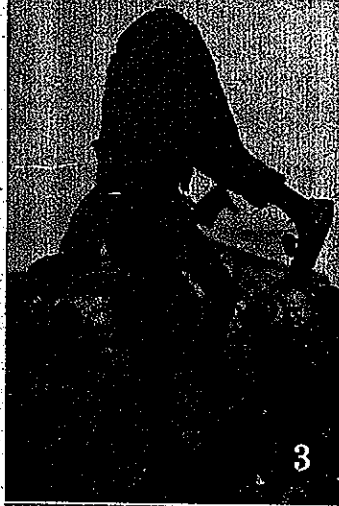
9 地味な衣裳で、腰から膝まである白い袴の如きものを着けたのは、宿屋や飲食店の番頭か小僧、或は行商人。

10 白紙を切つてふさにしたものを頭から肩に垂れるのは幽霊或はあの世の人。

11 頭髮の色を赤、黄、緑などにしたのは、妖怪、蠻人、盜賊等である。

12 假面(めん)を被るのは神様(土地神或は魁星と云ふ學問の神様等)に限る。

日本人は支那劇の隈取が濃厚なので假面を被つてゐるやうに錯覺することが多いが假面は減多に用ひない。



(橋天) 樂娛衆民

業經一觀把腰 3 りくらかきぞの一片大拉 2 鼓大唯  
師編識一書評 6 品手一法戲 5 部内の館子乳

(四) その他の約束

- 1 拂子を持つのは坊主、宦官、神仙(天上の人物)、妖精等である。京劇では坊主は日本の神官の冠るやうな烏帽子を冠る。
- 2 赤い烏帽子を冠つた男が四人、棒を持って出れば昔の縣の役所で、主として裁判の場面である。
- 3 人物が登場する前にチャルメラ様の樂器でヒュウツと一聲高く鳴らすのは、馬のいななきを意味し、武將出陣の場面である。
- 4 劇の最中、銅鑼だけを三聲或は五聲鳴らすのは、時刻の鐘(三更或は五更等)である。
- 5 羊、豚等の家畜を現はすには、人間が黒い着物を頭から被つて、四つんばひになつて歩く。虎の場合は虎の紋様を描いたぬいぐるみを被る。
- 6 赤ん坊は人形で代用する。

六、京劇の題材

京劇の題材は殆ど、時代物であつて、大衆に親しまれてゐる稗史小説中の物語から脚色されたものが大部分を占めてゐる。最も多いのが三國志、それから水滸傳、施公案。

このことを支那語で角或は角兒と云ふ。文語では伶と書く。男優は名角(伶)或は名旦(女形の場合)と云ひ、女優は坤角(伶)或は坤旦と云ふ。  
いま各役につき現在(昭和十五年末)働いてゐる一二流處の代表的な名優を挙げれば大體左の如くである。

老生 役

時慧寶(現役最年長者)、王鳳卿(時に次ぐ元老)、馬連良(自ら一派をなせる當今第一の人気役者)、譚富英(老生の宗家譚鑫培の孫で歌が好い)、言菊朋、奚麟伯、李盛藻、雷喜福、周嘯天、陳少霖、王文源、安舒元  
この外に隠退中の老生の大御所余叔岩の高弟で女優の孟小冬があるが、減多に出演しない。然し孟の歌は北京人に最も人氣がある。

武生 役

尙和玉(現役最年長者、古風な武生の藝を傳へる唯一人)、馬德成(歌を主とする武戲の元老)、李少春(新進の筆頭で老生劇をも兼ねて演ずる)、孫毓敏、周瑞安、楊盛春、劉宗揚、李盛斌  
文武老生役

彭公案、包公案(七俠五義)、北宋楊家將、征東全傳、征西全傳、説唐等である。最近流行の新作劇には、昔の小説筆記類で、餘り一般に知られてゐないものから取材したものが多し。

前述の如く、主眼が俳優個々の藝に在るため、筋を問題にしないので、在來の劇は通例それらの物語の極く一部分を取つて仕組んである。新作物には比較的筋を追ふ長い芝居即ち事件の發端から終りまでを演ずるものが多いといふ傾向がある。

時代物は老生、武生、小生、青衣、老旦、武旦、花臉の劇が多く、社會劇、人情劇などは、花旦、花衫、丑のものが多い。

七、京劇の俳優

京劇の俳優は各役ともに男優が中心であり、若干の女優がある。女優は女形(旦)に多く、男役では稀に老生を演ずる者がある。一般に女優は舞台生命が短く、花火線香的である。老生、武生、花衫、青衣には、師匠の系統に依て派別があるが、この傾向は今日は昔日ほどに顯著でない。俳優

李萬春(武生俳優であるが、今日は自家専用の文武老生劇を主として演ずる新傾向京劇の創始者として女形の梅蘭芳に必敵する)、葉盛章(本來の役は武丑であるが、近來李萬春に對抗して、同じく自家用の文武老生劇を盛に演じてゐる)

小生 役

姜妙香(文武共に達人)、金仲仁(主として文戲)、程繼仙(現役最年長者、武戲を主とする)、葉盛蘭(新進の第一人者)

青衣 役

程硯秋(花衫でもあるが主として青衣役を演り、藝のみならず格に於て京劇界の大統領である)、張君秋(新進の筆頭)、陳麗芳、女優に王玉蓉がある。

花旦 役

筱翠花(この役の第一人者、古風な藝を傳へる)、毛世來(新進筆頭)

花衫 役

梅蘭芳(今日南方に在り隠退説も傳へられてゐるが、花衫劇の創始者で、京劇女形として空前絶後の偉材と稱せられる)、尙小雲(青衣出身、京劇界俳優仲間の大立者)、

荀慧生(女より女らしいといふ定評のある女優)、黃玉麟(舊名綠牡丹)、李世芳(小梅蘭芳の稱あり)

女優には、吳素秋、侯玉蘭、趙嘯瀾、李硯秀等がある。

武旦 役

朱桂芳(現役最年長者)、宋德珠(花衫、花旦をも兼ねる新進の筆頭)、閻世善(純粹の武旦として新進の筆頭)

老旦 役

李多奎(現在老旦として観るべきものはこの人一人)

花臉 役

イ、大花臉役を主とする者

金少山(超人的な聲音を有し、當代第一人者)、王泉奎、

趙炳嘯、董俊峰

ロ、二花臉

郝壽臣(半隱退的であるが、この役では京劇始つて以來の名優の一人)、侯喜瑞(郝が隱退すれば筆頭となるべきもの)、袁世海(新進の筆頭)、馬連昆、劉連榮、

王永昌、蓋盛戎、孫盛文

ハ、武花臉

劉硯亭(斯界の元老。他にこの役では観るべき人材少し)、范寶亭

丑 役

蕭長華(現役最年長者、全京劇界としても元老である)、馬富祿(當代一の藝達者)、慈瑞泉、曹二庚、朱斌仙、以上は主として文丑で、武丑には前掲(文武老生)の葉盛章以外観るべき人材が無い。

八、芝居を観る心得

(一) 劇場の選定

今日北京では、一定の俳優が一定の劇場で公演することは少く、(程硯秋、馬連良、尚小雲の三人は大體一定してゐるが)、殆ど毎日出演者が變る。大體の傾向としては、觀客の交通の便をはかつて、東城、西城、南城を順次に公演して廻ることになつてゐる、従つて芝居を観やうとするには、支那新聞に毎日出てゐる廣告を見て、主演俳優の名と劇場を調べなければならぬ。廣告は市中に掲示もされるがこれは當日のものを出し豫告が少いので不便であるから新聞の方が好い。

(二) 坐席と切符

今日普通の劇場はすべて坐席に番號が附けてあり、切符

は坐席券であるから、好い場所を取るためには早目に切符

を買はなければならぬ。人氣の無い俳優の芝居なら當日行つてもあるが、一寸有名な俳優の芝居は、豫告が發表されると遅れないやうに買はなければ好い席はもとより、一枚の切符も得られないことがある。従つて思ひついた某日に好い芝居を観やうとすることは先づ不可能で、どうしても四五日前から買つて置かねばならぬ。豫告は普通四五日前から新聞に出る。

坐席は普通一階と二階に分れ、一階は樓下と云ひ、平場正面の前方を前排、後方を後排、左右の見にくい處を邊座或は(廊子)と云ふ。前排が最も好く値段も高い。然し、京劇の悪習として前排の好い場所は、一般公衆が買ふ前に劇場關係者が買ひ占めて置いてプレミアヤム附きで賣る(これを飛票と云ふ)ことになつてゐるので、普通では入手困難である。二階は樓上と云ひ、前方の三面に包廂といふ

日本の枱に當る席があり、その後方の見にくい處に個人席がある。二階の個人席は樓上と呼び、場所に依て一定しないが、普通一階の平場よりも廉い。包廂は四人席、五人席、六人席等があり、大體前排(すべて個人席)の値段をその席

の人数に掛けた額より一二割方高い。

(三) 茶その他

坐席に就くとボーイ(茶房)が茶を持て来る。これは専門の商賣であるから代金が要る。最近の傾向としては、切符を賣る時に、税金と一緒にこの茶代も強制的に徴収する。従つて別に茶代を出す必要は無いが、ボーイは必ず執物にチップを要求する習慣になつてゐるから見はからひで若干を與へた方が好い。その他瓜子兒、果物、菓子などを賣りに来る。包廂の場合は犬抵果物や瓜子を人が行かない前から並べて居るが、これは要らなければ手をつけなければ好い手をつけると市價より高く取られる。

プログラム(戲單)代は切符に含めてあるが、これも北京の悪習で、言はなければ仲々呉れないし、而も芝居が終る頃にならなければ持て来ない、帽子、外套などはボーイに云へば預つてくれる。

(四) 時間とプログラム

開演時間は白天(午後三時頃から七時頃まで)、夜戲(午後八時頃から十二時頃まで)と兩種ある。好い芝居は原則として夜戲であるが日曜祭日には白天にも好い芝居がかゝ



ることもある。

プログラムの編成は普通、藝題を四乃至五種とし、文武を適當に排列する、座長格の演し物は必ず最後に置く、これを大軸と云ふ。観るべき芝居は普通終りから三番目のものからで、それより前は前座であつて、俳優も悪く、熱演することが無い。普通の廣告にはこの最後の演し物と座長の俳優の名だけを出す。観客もそれを目的として行くのであるから、人の集るのは大體夜ならば九時から十時前後である。従つて好い芝居を観るためには夜分晩くなることを覺悟しなければならぬ。以前は深更二時頃までかゝることが多かつたが、最近では當局の命令で十二時打切にするやうになつてゐる。

(五) 子供芝居と義務戲

京劇には俳優養成所が幾つもあり、その學生が練習と經費稼ぎの兩道をかけて、劇場に出演させられることがある。富連成社、榮春社等がそれで、それは子供芝居であるが、子供だけに熱演するし、料金も廉いので、割合に人氣がある。目的を俳優に置かず、支那芝居の要領を知らんとする者のためには、これを観るのが安上りの方法である。

わけには行かないが、大體二流の芝居を上演する劇場は次の通りである。

- 東城 吉祥戲院 (東安市場)
- 西城 長安戲院 (西單牌樓)
- 南城 三慶戲院 (前門外大柵欄)
- 慶樂戲院 (同上)
- 廣和戲院 (前門外肉市)
- 華樂戲院 (前門外鮮魚口)
- 開明戲院 (前門外西珠市口)
- 華北戲院 (同上)

右の内、開明、華北の兩者は昭和十五年末現在、京劇(皮黃)でなく、評戲を上演してゐる。然しこれは其時の都合であつて、本來は京劇を上演すべき劇場である。尙ほ場末的な安芝居は天橋に色々ある。

(石原 巖 徹)

義務戲といふのは、早く云へば慈善演藝である。或る團體若くは機關の要求により、營利を度外視して、基金募集のために俳優が特に出演するのであつて、目的は名だけであるが、人氣稼業の必然として、名を惜しむといふ關係上ふだんには容易に見られないやうな名優ぞろひの芝居が観られることがある。即ち普通の興行では或る一定の劇團がプログラムを作るので、観るべき芝居は最後の座長の芝居だけであるが義務戲の場合には前座からすべて一方の座長の名優が出演する。従つて一度に多くの名優の劇を観るといふ目的のためには、義務戲を観るより外は無い。この義務戲は常にあるものでなく、普通には毎年の年末新舊曆共に行はれ、時に水災その他の災害に依る難民救済の資金募集のために興行される。料金は無論高いけれども始めから座長格の俳優の芝居を観ると思へば決して割高ではない、一般の芝居ファンはもとよりかうした義務戲を逃がすわけはなく、常に超満員無難であるから、義務戲の切符を買ふためには相當手廻しを早くしなければならぬ。

(六) 劇場

前述の如く北京では、どの劇場の芝居が好いと一定する

女 警

城門出入者の検査、驛の乗降客の検査、又不逞人物の市内侵入情報があれば黒い警乗車に飛びのつて要路々々の通行人の検査にめざましい活躍を示す女警官の姿は日本人には珍らしい。北京市で女警を採用したのは民國二十年、其時二十人だったのが今では九十二人に増員されてゐる。  
大抵女警卒業程度で年齢は十八歳から二十一歳迄の妙齡の乙女で全部一定の寄宿舎に入つて勤務の合同には學科や體育にせしんでゐる。



# 民衆娛樂

支那には、日本のやうに一軒の席亭で、各種の演藝をやるのは非常に少く、大概一種目をやつてゐる。それも完備した建物の内でやるものよりは盛り場で、小屋掛けや露天でやつてゐる原始的なものが多い。寄席が少い原因については「一般大衆が芝居を特に好む關係上、寄席の需要が少いために思はれる」と石原巖徹氏は云つてゐる。

雜耍 雜耍といふのは寄席式の演藝をいふので、その種目には、唱大鼓、相聲、雙簧、清唱、説書(評書)、戲法、拉戲、口技等がある。

坤書場 俗に落子館といふ。一に樂子館に作る。一種の寄席で、演奏者は妙齡の女の子である。通稱を鼓姫といふ。大鼓書、時調小曲、梨花大鼓、靠山調、椰子などを演奏する。正面に低い舞臺があつて、唱ひ手はキツチリと體に合つたハイカラな時様の服装で立ち、背景には多く装飾の廣告や綢緞店の廣告を書き込んだドロ繪の幕が下つてゐる。

着の鳴らす板木の拍子に合せて歌ふのである。歌は滑稽と色氣を含んだものが多く。

客は歸る時に茶代といくらかの心付けを置いて來ればよい。一曲が終ると影計(ボーイ)が、唱ひ手の名前を書き連ねた扇子を持つて、一々客の注文を聞いて歩く。客は、好みの女を名指すなり望みの曲を注文する。これを點曲といふ。點曲は規定の料金を別にとられる。點曲に指名された女は唱ひ乍らチラリチラリとその客に秋波を送り、客はニヤニヤし乍ら聴き入つて居るあたり、日本の堂摺連と撰ぶところはない。事變前新聞社ではよくこの鼓姫達の人氣投票をやつたものだ。

落子館は天橋に多く、大概午後の二時頃から始まる。鼓姫は夕方までこゝで唱ひ、夜になると八大胡同の桃園だの樂園あたりへ出演する。鼓姫は何れも唱大鼓の男子が集つて出資してゐる坤書場に屬し、そこで教習を受け、それから各落子館へ出て演唱するわけだ。左に主な落子館を掲げる。

天橋 德意軒、三友軒、如意軒、爽心園。  
王廣福斜街 榮園、桃園

その前には一列に、丁度日本のダンスホールのダンスアのやうに、大勢歌手が目白押しに腰かけて、自分の番の來るのを待つてゐる。仲々派手な、賑やかな光景である。

客が椅子に腰掛けると、影計が茶を運んで來、瓜子兒などを持つて來る。客はそれらを喫し乍ら、悠つくりと歌に聴き入るわけである。

大鼓書 俗に唱大鼓といふ。これが寄席演藝の中心的なものである。若い美しい鼓姫が右手に細い竹箸のやちな線を持ち、直径八寸位の大鼓と細い三本足の土へ平らにのせてポンポンと敲き乍ら、左手に竹片を重ねた、日本の四ツ竹に似た相思板を、カッチカッチと打ち振り打ち振り、伴奏の蛇皮線や胡弓に合せて一種の語り物を演ずるのである。時には唱ひ手が二人で掛け合ひでやる時もある。伴奏は何れも男がやる。歌も名人はやはり男である。

大鼓といふと、聞き慣れない者にはどれも同じやうにしか聴き取れないが、京韻大鼓、河間大鼓、天津大鼓、花大鼓、八角鼓などいろいろ種類のあることは、日本の長唄、常盤津、津元など種類のあるのと同じである。文句は文章語あり、俗語あり、相當支那語に自信のある連中でも仲々わからないが、幽婉な曲調と、美姫の姿態と、のびやかな坤書館の雰囲気と、何時かうつとりしてしまふ。北京では是非行つて見る可きもの、一つである。この大鼓書は八大胡同の妓女でもやるものがある。

時調小曲 これは多く客の好みによつてやるもので、大鼓を叩かず、伴奏

東安市場 德昌茶社、筋興

觀音寺 玉環春 樂賢軒

評書 俗に説書といふ先づ日本の講談である。多く軍書讀みである。講譯師を説書師といふ。茶館や小屋掛けでこれを作る。天橋では西市場、公平市場の附近に多い。釋場を評書場といふ。演し物は三國誌、水滸傳、施公案、聊齋志異、精忠傳などが主で、普通の茶館あたりでは、道具としては醒木と扇子と手巾を使ふだけである。一段の語り始めと終りに醒木といふ一寸角位の木片で机をポンと敲く。あとは日本の講談と同じやうに張り扇一本で、これが或ひは鎗になり金箍棒になり、青龍刀に變じ、蛇皮線になり、船の櫓になるといつた具合である。手巾は來往の文書手紙などの代りになる。評書師は一人前になると、先生からこの三種の道具を頂くことが免許の印になると、天橋の説書師は素語りでなく、扇のほかに大鼓を入れたり、歌を入れたりしてやつてゐる。寄席、アンペラ小屋、天幕張り、露天といろいろなところでやつてゐるが、大概一つの席は一人の演者の獨演で何時間でもしやべり續けて疲れない。ただ晝と晩に交代するだけである。夏の日の永い頃になると下午

の一時から三時まで、三時半から七時まで、夜の九時半から十二時までと三回やる。一人は大概二ヶ月位打ち續ける。地安門外金絲套胡同の槐賢庵といふ廟の中に「評書協書」といふ彼等の組合まで出来て統制を執つてゐる。魯迅の「阿Q正傳」の中で、阿Qがよくこの評書的の口眞似をするところが書いてある。また定つた席でなく各處の廟會などで糖菓や餅などを賣つて評書をやるものがある。これらにも名手あり清末民初の雲裏飛などは全北京の人氣を呼んだものである。

**相聲** 一種の落語である。扇子を持ち滑稽な身振りで、一人で語るの伴奏はない。男の藝である。二人で掛合ひ萬歳式にやるものもある。焦徳海といふ男が有名である。卑猥な話をやるので女客は決して寄りつかないことになつてゐる。日本の婦人など解らぬながら好奇心にかられて聴いて居るのを見掛けるが、支那人に誤解され、輕侮される元だから注意を要する。

**雙簧** 二人一組で、一人が腰かけて傀儡の眞似をし、一人が背後にかくれて、操り手の眞似をする。操り手が或は話し、或は唱ふにつれて、前の傀儡は、人形の見得で口を

の雜音、閨房の鈍聲に至るまで之を摸して人氣を持した。**駝來寶** 數來寶ともいふ。日本の梅坊主である。竹板や豚の肩甲骨に數個の鈴をつけたのを二枚バタバタ叩き合せ乍ら歌ふ。即興的に何でもチョンガレにしてしまふ。滑稽の中に時事を諷したものが多し。天橋では曹麻子が有名である。一例を擧げると

罵聲、毛竹板、響連聲、身聲列公認一聽、現在也把世界換、種種模樣不如先頭、如今摩登士女不一様、男女都把烟推抽、中調女子剪了髮、一街跑的和尚頭、到如今摩登姑娘巧打扮、燙髮、刮臉倒香油、呱呱。

〔大意〕

摩登を笑つて竹板カチカチ、どうぞみなさん。聞いてもくんねえ。いま時世界は引くり返つた。いろいろさまさま昔しと變つた。近頃モボモガすつかり通つた。男も女も俗煙草アカブカ。中調のおなじも聲の毛チョン断り、町を歩くは坊主頭ばかり、摩登ガールのいで立ちお上手、パーマネットや女が鬚剃り。香油をフツ掛ける。

**擲** 相撲である。勿論見世物であり、中には薬を賣りつけるのが目的なのがあるが、彼等は咸豐年間の薩木蘇王一名神力老王爺なる者が始祖だと言つてゐる。うす汚れた襟連衣をつけ、駝鞍絨繩を巻きつけ、燈籠靴子を穿つてゐるが、この三種のものは支那の相撲としてのシンボルであ

きかず身振りをやる。唱大鼓もやれば、時調小曲もやり説書もやるが、萬歳と同じことでどれも眞面目にはやらず、滑稽に落をとつて、觀客を笑はせることを主としたものである。

**清唱** 胡弓と銅鑼に合せて芝居の一節を唱ふものである。戲法 日本でも時々見掛ける支那手品である。主として人の集る盛り場や大道の野天でやつてゐる。一に變戲法といふ。その巧妙なことは諸官既に御承知の通りだが、日本へ渡つてゐるのは大概山東あたりの田舎藝人だがこゝは北京の本場とて一段とした牙えを見せてゐる。八大胡同の妓館あたりを流して遊客の氣嫌をとるのを専門にして居るものもある。

**拉戲** 芝居の一節を胡琴で弾き語りする。また胡弓の一種で肉聲に近い音を出す樂器で、芝居の一節を弾くこともある。

**口技** 日本の猫八である。鳥の聲を眞似ることが多いので一名を百鳥聲といふ。これには簡單な含み笛を使ふやうである。光緒年間には藝名百鳥張、本名張崑山といふ男が名人だつた。人々樂といふ男も名人で百獸の鳴き聲から街上

て、これを着けて相撲をとれば、萬一怪我をしたり、投げ殺されることがあつても、文句を云へない不女律になつてゐるさうだ。**蓮花落** 一に什不閑ともいふ。歌を主にした仁和加の如きもので隆福寺や白塔寺の廟會でよくやつてゐる。市中の落子館にも出て居る。三人一組から多いのは十數人が一組になつて假髪を被り白粉をつけて女に扮し、囃子につれて卑猥な唱や科白をやりとりしてゐる仲々人氣のある見世物である。

**拉大片** 一に拉洋片といひ、西湖景ともいふ。日本でも田舎のお祭などで今でも時々見掛ける覗き機關である。日本と同じやうに鞭で拍子をとつて歌を唱ふものもあるし、大鼓などを入れて賑かにやるものもある。光景は平凡な西湖風景だとか上海港繁榮之圖だとかから、蔣介石北伐の圖、郭松齡瀋陽攻撃の圖などをやつて居る。筆者はこれの小型のもので、北清事件の實態寫眞を使つたのを、東嶽廟の開廟で見たことがある。天橋では五六ヶ處でやつてゐるが、大金

牙、小金牙の二人が有名である。以上で民衆娛樂の主なもの説いたが、このほかに

北京文化の都城は、老儒、文士詩人、書畫家、骨董愛好者など、五光十色の存在にどれほど雅かさを添へ得たことであらう。いまはそれも、在りし昔を知るひとには曉星寥落を思はしむる寂さに堪へないものがある。どの方面を見ても山嶺の孤松がひからびた老幹に暮日をあびてゐる見たいに、老輩の一二が目立つてゐる。潤底の雛松は叢がつてゐるが、山嶺の古木はどこまでも傷ましい。

文人高會などに引出だされた筆者などは、いつも彼れらに「若さ」が羨まれたものだ。「年少翩翩」などとおだてられたものだ、八十の齡を過ぎた趙爾巽翁などは、いつも逢ふごとに才八歳として云つてくれないでゐた。少壯學者の集ひであつた思辨社の同人に招かれたときなど、筆者は最少年者であつた。

趙爾巽や柯劭忞に統べられてゐた清史館には、一代の碩儒老學が袖を聯ねて集つた、雅々雅々、ああした世界もあ

### 北 京 の 學 藝 界

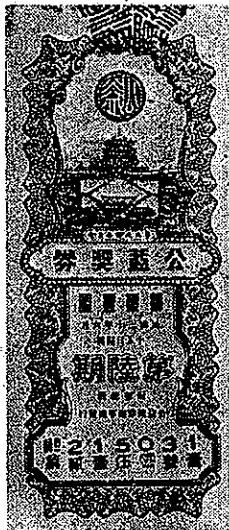
つたことである。傅增湘の藏園では毎年在京の進士を招飲して、翰苑の盛事を偲び、記念寫眞などを留めておくことが例となつてゐるが、いまは十人と數へられまい。だが傅氏はなほ健在、老いてますます旺んに、校書に若き學徒のひきたてにその日も足らぬ忙しさをさせてゐるが頼もしい。

その藏園には萬卷の圖書をもつ。北支の藏書家といふ點でも、天津にゐた李盛鐸の木犀軒の藏書はその死後いまの北京大學文學院に收められたし、いまは彼れをおいてほかにひとりもあるまい。古書の校訂は彼れの尤も生命であり、その『讀書記』は版を重ねつゝある。民國になつてから大規模な出版にはいつもその秘藏をひらいて資料を提供、その出版文化に盡した貢獻も大きい。また大掛りな編纂事業にも彼れの統率によつて成されてきたものが多い。かくて故徐世昌の主筆した『清儒學案』も出版されたし、『綏遠通志』も脱稿されたし、現に『全蜀文』として宋以前の四川人の文篇が集大成されようとしてゐる。

ついでに近三三年間に當地で物故した翰林出身の進士をあげると、清帝の大傳で知られた陳寶琛にその詩詞集『滄趣樓詩集』『聽水齋詞』が遺されて居り、その遺筆はいまも

あるが、煩に堪えぬから省略に従ふ。百聞一見に如かず一日の下午を天橋に杖曳けば、悉くこれを觀ることが出来る。

### 彩 票 の 話



北 華 の 彩 票

支那人の好む彩票、僅かな金を出し合つてその當籤を樂しむ彩票とは、一種の當籤である。職福と生活苦に打ちしほれる民衆の些かな希望と慰安の當である。

一等二萬圓、文字通りの一萬圓ともいふべき福運、毎月十五日の開票は北京百萬市民の胸を躍らせる。

彩票の歴史は、支那では光緒年間に通る。日本の當籤が寺社の修理費募集を名目とした様に支那でも彩票は、光緒二十八年一月、湖南、廣東の總督張之洞が武昌學堂の創立資金捻出の爲に湖北籌捐獎券を一〇枚綴り六元で發行出したに初まる。

その後災後救濟、事業資金募集の名目で種々な獎券が發行されたが、事實は徒らに民衆の射倖心を助長するのみであつたので、中央政府の手で廢止されたり復興したりしたが、近來有名なのは蔣介石の空軍擴充を目的とした航空公路建設獎券である。宋英齡を委員長として事變物産總匯のことで、抗日聯線の一翼でもあつたのである。

そして之等彩票の源泉は實にスペイン領時代のマニラ政廳の當籤を真似

る。見物料は屋内で行はれるもののほかは何れも投げ銭である。

( 藤 燦 )

たもので、初めは租界内で外國人が任意に發行して居たのが、革命を機會に外國側に抗議し、共同租界の發賣を禁止したが、却つて支那人自身之を行ひ支那官廳の力及ばぬ租界を根據として賣出して居つた。尤もこの様な惡影響はその根據も薄弱で、救濟、救済を看板に愚民を惑はし、公平な抽籤機關も終らない様のものであつた。彩票は丁度阿片が英人に依つて持ち込まれ、終には支那人自身の手によつて、支那人の金を搾り上げ民衆を苦惱に陥し入れてたのと同様な徑路で、此處にも又國家ならぬ國家、中國の一面があつたのである。事變後、政務委員會の手に依つて一時禁止されて居つたが、近時財政政策上、再び賣出して居る。その賞金率も従前に比べては少く、政府の手によつて堅實に實施されて居る。

現在、華北の彩票は、財務總署公營獎券辦事處の發行で、民國三十年一月から毎月十五日、中央公園で開獎されてゐる。

その仕組は、一枚一圓で總代理店の手に入り、華北の各銀號、煙草店等で賣出され、當籤號は各新聞にも、各賣捌店にも發表されるが、幸運の當籤者名は絕對に掲載しない。之は場所柄、時局柄を考慮しての當局者の老練心からであらうか。アルゼンチン、ブラジルあたりの當籤が一夜にして巨額、成金を作り上げ、警官の護衛付きでお祭り騒ぎに豪奢な三日天下を享樂するに比べては賞金の額も比較にならないが何處の誰が選はれた幸運者であるか評判にも上らず隱微の中に次の彩票が又賣られてゆくのも中國の國民性の反映であらう。

頭獎は一等は二萬圓三個、次獎五千圓、三獎二千圓以下各等之に順じて、末獎一圓三萬個は末字が頭獎番號の末字と同じなもの、例へば三が末獎である二五三とか五六四二三とかが當選である。又一、二獎の上下一番違ひは各々五百圓と百圓宛を賣る仕組である。

尙外に現在北京では、蒙古自治政府發行する福利獎券、俗稱華北彩票も賣り出されてゐる。之は五枚つゝ一圓で發行するから、各小片二十枚づゝでも販賣する。

一等當籤は一萬圓、二等二萬圓、三等一萬圓、仕組は華北のと大體同じである。



第一(右より)李 燾 江 朝 宗 方 若 (第二節) 周 慶 海 周 作 人 未 啓 鈞  
 第三(段) 岑 煥 第四(段) 張 雨 田 馬 衡 第五(段) 章 卓 良 馬 建 良 第六(段) 張 雨 田 馬 衡 第七(段) 章 卓 良 馬 建 良

ひとの珍重するところ。瑞洵は科布多參贊大臣まで陞つたひとであるがその抗直な性格は晩年を寂しくし、淨業湖畔の僧庵に逝く。その著『大羊集』『散木居奏稿』は彼れを景慕する邦人鈴木吉武氏によつて付印された。また清末の名御史として鳴らした高濶生もその晩年は頗る貧窮、米資にも苦しめられつゝ世を去つたが、その名著『爾雅數名考』は長く名著として光るであらう。俞曲園の子俞階雲も逝き、曲園の孫俞平伯はもと北京大學・清華大學の教授、文學の研究者、また作者としても才名を謳はれてゐた少壯學者。事變後は閉門讀書してゐるとき。藏書家として書誌學者として聞えた李盛鐸は、かつて日露戦争前に東京に公使だつたこともあり、明治天皇様から寵遇をうけた感激は筆者いくたびか聞かされたことで、天津に逝く。その子李少微はよく家學をつぎ、近くまで天津縣知事として成績をあげた。八旗文學の泰斗として『雪橋詩話』の著者楊鍾鏞も昨年逝世、晩年その品格はわが邦人にも慕はれてゐた、いま旗籍出身で八旗著述を研究し、その著述をあつめてゐるひとに恩華といふ進士もある。達壽、文斌など四五の旗籍出身の進士も健在である。進士ではないが奉寬は前清掌故歴史

に通じ、滿蒙藏各種の邊疆古字にも通じて、現學界の至寶とも思はるるひと、いまは靜かにわが東方文化委員會のために筆を把つてゐる。郭則澐は現に北京詩界の大將、才麗健實なる詩風を以て詞壇を牛耳つてゐる。嘯鹿あるひは雲の別號で知らる。老書家として知られる邵章は伯綱の字で知られ、その筆力は老いてますます典雅である。また詩詞の作家でもある。張海若は六朝の書風で知られ、佛拓などの模寫は前古その比を見ない技を有つ。かつては世に開えた豪酒家であり、洒落な文士である。

いま燕京大學の學園に高臥しつゝある張爾田に至つては現存の碩學として筆者には最も尊敬を有たるひとである。代々學者を出した家であり、氏の『史微』はわが湖南内藤博士も推獎して已まなかつた名著で、儒佛詞章有ゆる學に深い造詣をもたれてゐる。著述も多い。そればかりでない。その高雅な人格は人をして襟を正さすものがある。その姪の張東蓀は燕京大學の教授。哲學者としては現支那の第一人者である。彼れは歐米に留學したこともない。暫らく東京の東洋大學の前身哲學館に學んだことがあつた。その深篤なる哲學論文は若き學徒にその指針を示すものがあ



（第一號より右） 羅冠嶽 程則輝 傅增湘（第二號） 葉恭綽 程德全 溥儀  
 （第三號） 齊白石 梁啟超 谷正倫（第四號） 翁文灝 葉恭綽 顧維鈞

う。學徒の敬愛をうけてゐる。昨年は、滿洲國の羅振玉、前述の楊鍾羲、そのほか儒學に深い研究をもち、また「四庫提要補正」の浩翰なる著述をもたれたる胡玉縉、文選學者としてまた詞章學に著述と學殖をもたれた高步瀛などいくたりかの老學を失つたことは寂しい。邊疆の歴史に精通してゐる吳翥紹は、いまも健在であるが、あまたある著稿が一つも世に出でない。その子豊培は現に輔仁大學講師として西北の史地を講じてゐるのはこの翁の老悖を慰むるに十分であらう。「周易古筮考」「焦氏易詁」など易學に關する力作を公刊し易學の新開拓者尙秉和も近來とかく多病であるがその健康をいのりた。その高弟黃之六は英年の篤學者で師の學を承けてますます發展するであらうと期待されてゐる。かつては吳承仕らと共に中國大學にあつて篤實な考證學者として、また詞章の學に深い孫人和はい、今も中國大學・輔仁大學で學徒を指導してゐる。章炳麟門下の四天王といはれたうちの吳承仕、錢玄同の二人は北京にあつたが、今次事變後に吳承仕まつ天津洪水にさわひであるとき病を得て天津で死去、ついで錢玄同も學友星散のうちにさびしく世を去つたことである。章門ではもと北京大學の教

授馬裕藻ひとりなほ北京に讀書生活をつづけてゐる。歴史學界では事變直後に孟心史・孟世傑の兩孟を失つたことは惜しい。孟心史はもと日本に留學して法律學を治めたひとであるが、その後明清の歴史を研究し、「清朝前紀」などの力作を公刊し、その學名はわが日本にも傳へられてゐた。もと北京大學の講師でもあつた。もと師範大學の教授孟世傑も支那の近世史の研究者で、「中國最近世史」などが印行されてゐる。こゝに歴史學者としては現に輔仁大學校長陳垣と燕京大學教授の鄧之誠の二人の健在が頼もしい。陳氏の元史研究から生れた著述及びその論文はわが邦の學界からもいたく尊敬をうけつゝあり、「二十史朔閏表」「元史」の巨著は此種の著述では壓卷の名作として内外人に迎へられてゐる。歷代ことに明清の政制學故などについては他の學徒の及びもつがない造詣をもち、また青年學生の指導に親切なる、その門下には英年の學究が渦いてゐる。その舊著「骨董瑣記」の如きは趣味的讀物としても興味があつ

したのでわが邦人の間にも求むるものが多かつた。  
 『太平天國史料叢書』十三種を編輯し、その歴史の研究で知られた謝興堯は新民學院の教授で、淵博な學殖を傾ける。未刊の著述も多く、また掌故官制の學に深い。『晚明史籍考』『清開國史料』の編著をもつ謝國楨は孟心史り亡きのも此の方面の歴史研究はこのほどの研究によつて續けらるゝほかない。編纂著述に餘念がない。新民學院教授で續修提要にも力を添へてゐる班書閣には史學に關する著述が多い。僑置に關する研究も近く發表される筈。『清史列傳』の隠れたる著者として知るひともしき孫曜が事變後新民學院の教授にも暫らく就いてゐたが、死亡したのは惜しい。その弟孫光沂また史學に精しく、その篤實なる研究はいまその兄のあとをうけて續修提要のために傾注されつゝある。そのほか史學方面には少壯の學究にはその人少じとしない。地志の研究として知られた、譚其讓、朱士嘉など、しづかに研究をつゞけてゐる。

こゝに老史學者として見過せないのは吳廷燮である。いまは七十を過ぎた老學ではあるが鑿鑿として異常なる記憶力をもたれ、その夥しい著述は次を逐ふて印行された。それ

の自撰の『景杜堂集輯書目』にその目錄が見られる。恐らく現存の學者のうちでも彼れほど多くの著述を試みたものがあるまい。ことにその明清實録などに對する學究は近世得易からざるものであらう。ここ數年來續修提要に専心、ときどき老軀を南京に運ばせて『江蘇通志』の編纂を指導してゐる。その短軀肥大、盛夏の候にも襪袍をかきね、そして好酒、彼れが袁世凱、徐世昌らの知をうけ、その顧問に任じ來つたこともある。『西周史徵』、『方志學』などの著述ある李泰森はいま北京大學の史學教授である。

いまは病で引籠んでゐるが支那の新舊法律の研究程樹德は、『漢律考』『九朝律考』『中國法制史』など多くの力著を公刊してゐる。未刊の著稿も印行されつゝある。彼れの支那法學に對する貢獻は大きい。前司法委員會委員長曾康はいまは法源寺の寓居に讀書を樂んでゐる。法律學に深くて民國法曹界に於ける元老ではあるが、書誌學に通じ、『書舶庸談』などの著述もあり、ことに出版文化に盡した功勞も甚だ大きい。

晩年は營造學社を發起して支那の建築學に對して大きい成績を留めた朱啓鈴はいまも健在で、同學社の事業を整理

しつゝある。彼れの下にあつた清新なる建築學者は事變後南に去つた。いまは一人も殘されてゐないのは寂しい。同學社はわが關野貞、伊東忠太兩博士とも極めて親密なる關係が持續されてきたことである。同學社が未だ成立せざる以前彼れは交通總長、内務總長など歴任した時代に各般の文化的事業を企圖實行してきたことである。本篇の筆者がかつて『朱啓鈴文化事業特刊』を發行してこれを世間に披露し、わが邦人の彼れと提携せむことを希及したことももうすでに十七八年の前のことである。

支那の佛學界はあくまで居士の間に講ぜられて來、北京大學に講究さるゝに至つたのはかなり遅かつた。事變後にはいくたりかの學究も四散してひとり周叔迦が北京佛敎學院々長として後學の指導に努めてゐる。彼れには『唯識研究』『牟子叢談』などの著刊がある。居士林の高觀如もいくたの著述を出してゐるが大部の著述、『佛敎年譜』『佛敎文類』『道家著述考』の如きは未だ刊行されてゐない。

金石考古の學者では事變によつて北京大學教授馬衡も南に去り、燕京大學教授劉節も北上せず、昨年は馮汝珍も老病で弊れ、いまは甚だ寂しい。書畫家として知られた周肇

祥はむしろ金石學に深い學者であつて、彼れの書畫の如きはその餘技であると思つていい。古物鑑定についても今人に罕なる眼識をもち、かつて日支繪畫展覽會を發起して日本に赴いたときの『東遊日記』は日本に傳つた古物を撫摩して彼れの學養を傾けた遊記であり、これまで發表された著述も尠くない。また『遼文拾』、そのほか未刊の著稿を多く有つてゐる。事變直後地方維持會にあつて文化方面に盡した功績は大きい。かつては長く古物陳列所々長でもあり、古物保存と彼れとは切れない關係がある。楊嘯谷も徒らに書畫骨董の鑑定家として邦人の間にも知られてゐるが、もつと彼れの學術を買ふものあつて然るべきだ。かつてはしばしば日本に遊び、『東瀛考古記』に於いて正倉院御物の考古にも及んでゐる。大同の雲崗石佛についての研究も發表されて居り、彼れはまた多くの資料をあつて來つて『紙』に關する著述も試みられてゐる。陸和九また書畫家或は篆刻家として知られてゐるが、中國大學に於いて金石學を講じ、その講稿を印刷してゐる。また獨創の見解をもつ。篆刻家に壽石工がある。石工はその別字であり、また印巧の字をも用ふ。王福庵、程白霞の南に赴いたあとには彼れの篆刻は

ますます世評をたかめつゝある。また藝術専門學校でも學生に授けてゐる。が彼れには篆刻彫龍は丈夫の爲さざるところの氣概をもつてゐるに相違ない。その詞章に於いても名作が多い。于非庵また篆刻をよくす。しかし彼れは畫家でありまた文士である。また掌故の學に頗るの蘊蓄をもつ。前清康熙の時代までは國內の統一も未だ成らず、これを統一するためには、いきほひ宋學即ち理學に根據する倫理的政治に指導原理をもとめるほかなかつたので宋學は御用學の立場におかれたのも當然のことであつた。しかるに乾隆時代は統一もなり、天下昇平の黄金時代を將來し得たので、その學術は考據の學にすゝみ、宋から溯つて漢學の攻究に入つた。それもほほ東漢の學術に復古しようといふことであつた。その古文學派に對して、さらに西漢まで溯らうといふ氣概が生れてきたのが、謂ゆる今文學派なのである。それにしても古文學派の經書は皆完備してゐた。資料は豊富に整へられてゐた。それで今文學派がいくらこれに對抗して起つても、またその主張はいくら正々堂々であるにしても、一は東漢に復古し、一は西漢に復古するといふだけの差で、今文學派にはその學をおし立てるだけの資料が

ない。わづかに十三經に對して春秋公羊傳一部が完全に存してゐたに過ぎない。それで古文學派に對抗してゆかうといふのでは卵を以て石をうつといふ野暮に過ぎない。しかるに時勢はいつまでも乾隆時代の如く昇平を謳歌せしめてくれない。内憂内亂も起つて來、また外患も目睫の間にはせまつて來る。かうしたときは徒らに考證一點張の漢學では何ら時用に立たないばかりか、時代精神を指導してゆくことも出來ない。そこで今文學派は資料の貧弱さで自滅するほかなき苦悶のあげく、公羊傳や禮運などから極端に思想を發展せしめて、思想を以て古文學派にも對抗し、また時代の思潮をあふらうとした。それが革命思想と結びついたのである。それが康有爲の『新學偽經考』に至つて、一切古文學派の經書は偽經であると、大見得をきつて相關ふに至つた。

だけで満足して他にその掘を轉向するよりほかなかつた。

かうして今文學派の餘勇はどこに向けられたか、一は支那古籍の眞偽の問題に對して研究することになつた。これが民國初年來古書眞偽の問題が活潑に研究された所以でもある。他の一面には古文派の東漢復古に對して今文は西漢復古の主義であつたので、西漢よりさらに溯つて古史の研究に進んだのである。この二つの問題を取扱つて學界に根をつけたが顧頡剛らの『古史辨』となつてきた、と筆者には考へられる。そして今文學派のために最後まで殘壘を固守してきたのが前述の錢玄同であつたと見られる。

股代の文字の發現によつて文字學の上に革命をもたらすべきことも當然であり、いままだ『説文』といふところまで溯り得た文字も『説文』は後漢に不合理に統一されてその時代の意義をつけられたので、古字の意義は必ずしも『説文』のそれの如くではない、さらに金文及び甲骨文字との聯關を明らかにせねばならぬといふ必要に達著したのである。そこで金文甲骨文字の研究、及び古音の研究が叫ばるゝに至つた。

そこでいま北京にある此方面の學徒には于省吾、孫海波がある。于氏は甲骨文字金文によつて『老子』『詩經』『荀子』『穆天子傳』に新しい解釋を試みたことである。從來古書を解釋するのに『説文』までしか溯らなかつたのがさらに三代の文字についてその字義を考へるようになつて來た。孫氏のいたつては甲骨文字に關する多くの著述を公刊してゐるばかりでなく、古音學の研究にも及び、漢學宋學を渾然融合した學養にまで發展せしめむと努めて居る。文字には字義の方面と字音の方面とある、字義の方面は發見された甲骨文字や金文によつて——前から『金文』といつてゐるのは銅器青銅器に刻された殷周から先秦時代にかけての文字の



ことである——その字義を考へて見ることが出来る。しかし文字の古音の方面は頗る複雑した變遷を示してきた。時代により地方により變遷してきたので、後世のひとから見ると甚だ究め難い、がどちらかといふと文字にはまづ音があつて義がつきそふといつたような發達の徑路を辿つてゐるので、文字の古義古音は切りはなして研究は出来ないわけである。

しかるに古音については資料が甚だ少いばかりか纏つた著述が残されてゐない。どこを基準にして古へと溯るべきか、現行の字音といへとも各地方によつて頗る異同があることは皆衆知のことである。この困難な問題に逢著して支那の學徒も久しく逆つてゐたものと思はれる。筆者の見るところによると、次ぎの二つの徑路をとつて、研究されることに落ちついたと思はれる。その一つは現在行はれてゐる支那各地方の方言についての調査であり、その異同を考へ系統を明らかにすることによつて或は古音を知るための手がかりを得むと豫想されたので、一時の學徒は多くこの方面の工作に向つた。趙已任、白濤、その他のひとびとは、いまは或は死亡、或は西南に去つて北京に留つてゐるものは

ひとりもない。他の一つは『廣韻』といふ書物がまづ取纏められたところの、ある時代の古音について系統づけられた記録である。これを基準としてまたこれを楷梯として古音の研究を進めらるべきであると著眼したことである。もちろんここに著眼したものは前清の學者に於いて多く見られるが、『廣韻』の系統について古音の組成を取纏めて見るといふ工作は爲されてゐない。それに著手したのは輔仁大學の研究部で、名譽教授沈兼士指導の下に劉詩孫らによつて爲されつゝある廣韻研究で、近くその成績が發表されるまでに進んでゐる。沈氏はながらく北京大學教授として文字學を講じてゐたひとである。

つきに詩書畫の北京をのぞきたい。易順鼎、樊增祥などが北京詩壇を牛耳つてゐたころには作者は鬱蒼たるものであつた。梁鼎芬、羅藝公、王樹枏、柯劭忞、陳寶琛、楊鍾羲、秦樹聲など老輩が十年許の間に皆世を去つた。陳三立は民國詩界の一大宗派である江西派の作者としてその『散原精舍詩』とともに後世傳へらるべきほどの巨物であり、民國の作家はその傘下にあるものが多かつたが近年北京に逝いた。後勁の作者として黃節、邵彭瑞などに期待される

ころがあつたが、黃氏は晩年、漢魏の詩集注釋の刊成に心血をそそぎ、作家としての領域に進まうとし、『蕪叢樓詩』が開版するを見て死去したのは惜しい。邵氏の如きは詩家といふよりは詞家の巨手でもあつたが、その攻學がかなり廣い範圍に亘つてゐたし、晩年は大いに作者としての才が揮はるゝであらうと思はれたのに閉封に赴いて亡くなつた。孫雄は多くの小作者を率ゐて詩壇に躍つてゐた。そして北京でその詩社を組織してゐた。このひともし少し長生せしめたかつた。

今日では前述の郭嘯鹿が老作家として存在が知られてゐる。が未だ自ら詩社を組織して起たうといふ氣合も見えない。どちらかといふと江西派に近い作風だらうと見られる。それに少壯の作者では黃孝舒、瞿宣穎などの四五作家が出てゐる。郭黃瞿の諸家の作をあつめ、傅增湘のもとに集ふ翰林諸老の作家を招いて餘園詩社が創められ、月刊『雅言』が發行されて、號を重ねて十二卷に及んだ。現に華北政務委員長王揖唐はもとより吟咏を嗜み(それは前委員長王克敏に於いても同じであるが)、かつては采風社を主宰して全國諸作家と呼應してその近作をもとめて著録し、自ら

『今傳是樓詩話』を草して、それが事變直前に及んだことである。支那詩界にはかうした詩社の存在はなくてはならない。なぜなら詩書などいふことは一般的素養として、ただ專家ばかりに獨占されてゐるものでなくて、學者も、政治家も、銀行家にもあらゆる士大夫の階級を通じて試みられてゐることであるからである。王(揖唐)氏の主宰された采風社は停刊されたがその氣持で餘園詩社を助けて居られる。

かく北京の詩壇の今日は寂しい、がこゝに偉大なる老作者がなほ健在して居る。そのひとりには前述の張爾田であり、いまこゝに説明を重ねない、他のひとりには翰林出身進士の夏孫桐で、八十餘歳の高齢で、その『觀所尙齋詩存』もすでに公刊されてゐる。そしてこの兩氏はいづれも詩人としてよりも詞家としてその名を知られてゐることである。詞の作者として一代の宗である。本篇の筆者切に兩氏の健在をいふものである。

民國になつてから一時章草體の書風が盛んになつた。章草體といふのは隸書と草書の間をゆくもので、漢の上奏文はこれがかゝれたと。此の書體で知られた余紹宋、葉恭綽などは北京を去つて、周肇祥、卓定詠の兩氏が北京に居る。

周氏のことは前に述べた。卓氏は草書體を書學上から研究もし名著「草書考」を開刊してゐるばかりでなく、一體、この體に屬する法帖なり、明清の遺蹟が甚だ少ないので、一畫拓を得ればこれをコロタイプ印刷に付して公刊して居る。卓氏によつてさらに此體の提唱に努力せむことを望みたい。近年物故した善書のひとつは、前大總統徐世昌は草書をよくされたし、羅振玉は隸篆では近世得難い名作を留められたし、康有爲、梁啓超の南北朝體、秦樹聲の隋體、丁佛言の鐘鼎金文體、吳昌石の石鼓體、梁鼎芬の柳葉體、それに學才肌の書體としては、章炳麟の遺筆は今人にも珍重されてゐる。すでに亡くなつた陳寶琛の書風は徽宗體であり、宋の徽宗の書體をうけたもので、今では前述の楊嘯谷がこの書風をうけて精研してゐる。

さらに館閣體とて、前明清のころから翰林院考試の書體が次第に定型づけられるに至つた書風で、近年物故された楊鐘麟、朱益藩などもこれに屬するかと思はれる。この書風に徹底されたひとに、清末に盛伯嶸があり。現在に傳増湘ありと見られる。いまの少壯學徒の書風はその學風が乾隆嘉慶を追ふものであるから、乾嘉學人の書風に敬慕をも

家のうちにも尊敬を有つものが多かつた。それら諸作家の間のうちに立つて日支繪畫展覽會を發起したのが金拱北、周養菴(擊祥)兩氏であつた。金氏は臨畫の名手、湖社を結んで頗ぶる多い少壯畫家がその傘下に集つてゐた。日支兩國の畫家の握手が出来て東京・北京或は上海に展覽會がいくたびが開かれ、また一時の盛況であつた。

金氏の歿後日支の繪畫展は停止されて、群龍無首の状態におかれたとき、張大千が北京に來り、傅心畬と共にふたりの聲響が急に高くなり、北傳南張の呼聲さへ傳へられてゐた。事變後は張氏は他に去り、黃賓虹が南から老軀を提げてやつてきた。黃氏の美術に關する學養は深い。また美術界に盡した貢獻は大きい。もと革命詩人の結社南社の舊同人で北支にはもう彼れひとり存在、——汪兆銘もその同人のひとつ。それから于非の畫も斯界に知られてきた。民國になつてから畫界の風氣は前清の石濤、藍瑛、八大山人、李復堂などがねらひどころであつた。上海の吳昌石がそれであつて大いに畫名を博したので、一代の風氣が滔々としてそれに向つたと見えていい。しかし末流は手近い吳氏の畫風を模倣するに至つたので、吳毒瀾漫とでもいふべき

つものが多いといつていい。

劉石庵・鐵梅菴の書風に近い寶熙は新京に健在である。老書泉として馮恕、邵亨、張伯英、などが高齡で北京に居ることは心強い。邵氏は詞章家としても知られ、書誌に通じてゐる。張氏の書風は南北朝體に蘇東坡を兼取してゐると見られる。天津では篆書をよくした馬吉璋も近年亡くなつたようだし、南北朝體の魏鎮山が健在である。曹汝霖、方若など知名の士の書風はますます老熟を示して映えてきた。

十數年前の北京の畫界は作者輩出して頗ぶる賑かであつた。陳師曾は有名な詩人陳三立の子、雄渾なる筆致を傳へてゐた。その作の品も高かつた。王夢白、陳半丁、の花鳥、湯定之、蕭金泉、蕭謙中の山水、金石學に深い姚茫父、その他齊白石、胡佩衡など、いまは湯定之南に去り、謙中、白石、佩衡が北京にあるほかは皆在世でない。謙中はいままも靜かに僧庵にかくれて畫筆をとつて居るであらう。白石の聲響はますます高く、その獨創的な畫趣は若い學徒にも慕はれてゐる。そして木工から身を起したその徑路もその特異なる畫風とともに世に喧傳されてゐる。それらの諸氏とははるかに年輩の低い胡佩衡の筆致に對してはわが邦人畫

臭みがをこつて不快である。吳毒はいまに少壯畫家から扱けないようだ。

筆者に特異なる印象をもつ畫家に陶鑑泉といふのがあつた。彼れは一點一畫に對しても深い研究を重ねて一幅の作成に數月を費すことがあり、售ることを求めず、そして自家の作品を鄭重に取扱ふことに於いて他の作家に見られないところがあつた。その狂人じみた性格は八大山人を思はしむるものがあつた。筆者にくれた一幅の小品畫に微かな折目をつけられてゐるを見て、いたく怒らせたこともあつた。彼れは司法委員會の秘書長陶涑氏の兄である。宮廷の如意館派の作家で徐燕孫の健在に敬意を表したい。彼れのあとにこの畫風は絶傳と思はれるからである。

新文學界の大將周作人が教育督辦、北京大學文學院長で居られることであり、その民國文學界に於ける地位などここに説明するまでもない。周氏の知交は多く散ばつてしまつたが俞平伯、徐祖正、蘇民生などなほ北京に居る。この大和尚の傘下にたくさんの小和尚が居ることも考へられる。これらのひとによつて新文學の動向が指示されるであらう。日本文學の研究には周氏のほかに錢稻孫、傅仲濤の

兩先輩が北京に居られるから心強い。支那の小説研究者として知られた孫楷第は今も北京圖書館に勤めてゐる。傅惜華も旗籍出身でこの方面の専攻者で、また支那劇學の造詣

が深い。北京放送局の文藝課長としてはけだしその人を得たりといふべきか。その他新進作家についてはこゝにその説明を省かう。  
(醉 軒 潛 夫)

## 北京の文藝グループ

燕京文學社

黃土社

かりの集りの「ゆいらん會」がある。

興亞短歌會

「燕京文學」は北京でたつた一つの文學雜誌として、昭和十四年四月創刊、通巻九號まで出してゐる。種々な關係で發行も滞りがちであるが、眞摯な文學のグループとしてこのあたりから次の世代の作家が生れ出る可能性がありはしないか。編輯兼發行人は引田春海氏、發行所は米市大街青年會の三階にある。同人は二十數名である。

北京短歌會を母體として北支在住歌人の協力により、昭和十五年四月創刊毎月短歌雜誌「黃土」を出してゐる。同人は大抵内地の各結社に屬してゐる者であるが、大陸に國風樹立と言ふ目標の下に一憲歌道の研鑽に努めてゐる。編輯兼發行人は熊谷麓郎氏、社址は乾面胡同七八號にある。

北京にもう一つ短歌グループとしてかつて歌人宣撫總班長として知名の木沼丈夫氏を主宰者とする興亞短歌會がある。事務所は北京鐵路局警務所内田邊益雄氏。  
其の他俳句には北京ホトトギス社、及北京雲母會があり、川柳には北京川柳會がある。

## 琉璃廠

琉璃廠は、骨董と古書と文房具の街である。和平門を南へ外城へ出て十町許り行つた處に交叉點があり、その東西に涉つて約十二三町の街がある。これが名高い琉璃廠である。古玩の街として中國第一、否、東洋第一とも云へる。北京へ来て此地を訪れなければ、文化人としての資格に欠けると云つても過言ではない。

現今は中央に南北を貫く大街が出来たので、地は自ら東西に分れ、東の方は古玩舖や文房具店が多く、西の方は古書肆が多い。東琉璃廠の西口に海王村公園があり、この境内にも古書肆や古玩舖がある。

## 琉璃廠

町の外貌は中世紀的で、幅も狭く、一様に平家で、前門外のやうな二階建は少い。西琉璃廠の方はいくらか町幅が廣いが、東の方は辛うじて洋車がすれ違へる位で、自動車などに乗つてゆくと、時々待ち合せなければ行き交へない。客は何れも讀書人で落着きのある氣持のいゝ町であ

る。表通りのみならず、裏側にも横丁にも到る處に古玩舖や、棧精舖、錦匣舖、書肆、拓本師などが住んで居て特殊な文化街を形づくつてゐる。

琉璃廠、一に廠甸、また訛つて廠甸兒ともいふ。元が北京に都した頃には海王村といひ、琉璃廠の名は、明代に此地に琉璃の官窯を置き宮殿用の五色の琉璃瓦を焼かしたのに基づく。今のやうに市塵軒を列するやうになつたのは、清朝も康熙頃かららしく、『康熙宛平縣志』に「八日より十六日に至り、商賈市に燈花百貨、珠石羅綺、古今異物を集め、貴賤雜運して貿易す。燈市と曰ふ。舊とは東華門外燈市街にあり、今は正陽門外、及び花兒市、菜市、琉璃廠の諸處に散置す。惟猪市口の南を盛となす」と見え、この頃既に琉璃廠に商家があつたことが知られる。それが乾隆頃になると大分盛になり、『清代野記』も「今京師の琉璃廠は乃ち前明の官窯、琉璃瓦を製するの地なり。基址尙ほ存せり。元にありては海王村たり、清初尙ほ繁盛ならず、乾隆の間に至つて始めて市肆をなせり」と見える。『清稗類鈔』も「京師の琉璃廠は古董書畫會萃の地たり。乾隆の時に至つて始めて繁盛なり」といふ。即ち乾隆年間に

琉璃瓦の官窯が門頭溝へ移つたので、そのあとは燈市を機縁にして漸次今のやうな特殊な古玩の町を形成して行つたものらしい。其頃の景観としては『水曹清暇録』の著者に據れば「廠門の樓名は瞻雲閣、廠内官署あり、廠外餘地頗る廣く樹木茂密す、石橋あり、橋を度りて西すれば土阜高さ數十仞、登眺に供するに足る。街長さ里許、百貨畢集し、玩器書肆尤も多し、元且より十六日に至つて遊者頗る盛なり、奇景異觀、車馬輻湊す」と云つた有様で、以てその状を察するに足る。

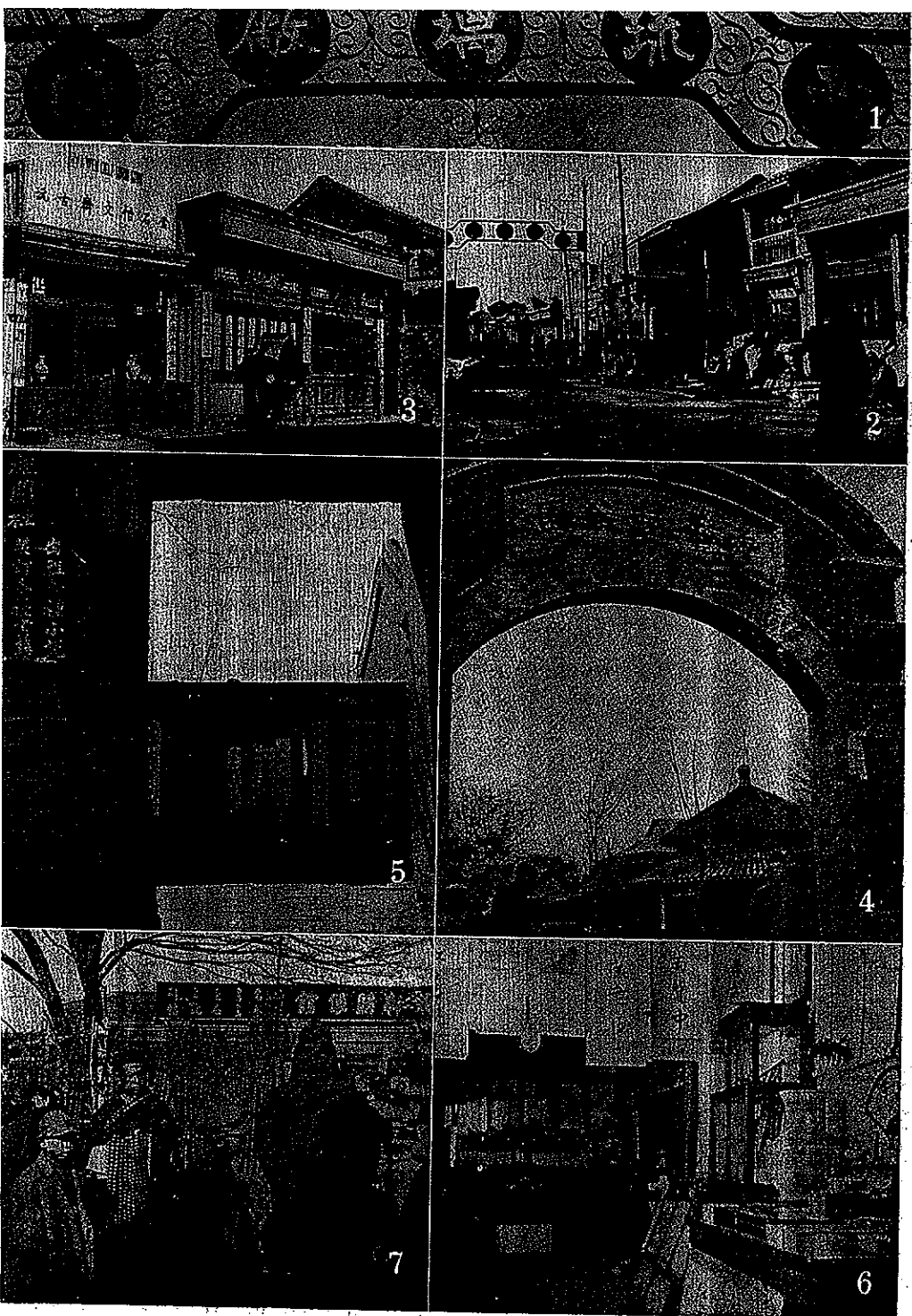
民國になつてからは倍々繁盛で、つひに世界的な古玩文玩の風雅な町となつて發達したのである。然し近年内城各市街の發展につれて、大商店も次第に内城に移りゆき、殊に事變後は一時各店とも閉鎖して火の消えたやうな状態であつた。近頃はいくらか復活の傾きあり、殊に古書肆は新に舖子を開くものもあるやうだが、北京といふ町の繁盛は北に移りつゝあるから、この町も次第に衰微の道をたどつてゆくのではないかと思ふ。

古玩舖 よく「琉璃廠、琉璃廠といふから行つてみたが、どの骨董屋も贗物だらけで祿なものはない」といふ

人がある。なるほど贗物は多い。既に古人も「唐宋元明件件陳す、滿牆の字畫は盡く名人、由來俱に是れ構持の貨、必ずしも深く追つて假眞を問はず」と云つてゐる位だ。然し、店先だけを觀たら贗物だらけに相違ないが、由來北京の骨董屋はいゝ品を店先へ並べて置くやうなことはしない。店は大抵三重にも四重にもなつてゐるので、少し馴染になつた客や、これは少しわかるなと思はれると次の室へ案内される。こゝで見せられるものには贗は贗でももう少しましなのがある。それから奥、更にそのまた奥と次第に案内されるにつれて、相當な品物を見ることが出来る。こゝまでは餘程馴染になつたり、信用されたりしてからでないと案内されない。だから琉璃廠の骨董屋へ行くには必ずその道の明るい人に伴つて行つて貰ふに限る。これは骨董屋のみならず古本屋や文房具屋でも同じである。

琉璃廠の古玩舖としては、東琉璃廠の延古齋、雅文齋が名高く、そのほか、大觀齋、推古齋、惠古齋、博觀齋、靜觀閣、悅古齋、韞玉齋、韻古齋、通古齋などがある。

拓本、法帖は古書肆や古玩舖にも賣つてゐるが、專家もあり、東琉璃廠の寶華齋、宜古齋、西の翰茂齋などがそれ



ひ賑の旬廠 7 部内の店具文 6 屋董骨の廟神火 5 園公村王海 4 店の屋董骨 3 口東廠琉璃 2 牌門西の廠琉璃 1

廠 璃 琉

この筋向ひには中華書局の分銷處があり、東琉璃廠の東口から楊梅竹街へ行く途中には廣益書局、世界書局、開明書店等の分銷處が立ち並んでゐる。これらは何れも上海に

である。  
 書肆 琉璃廠にも新刊物を扱つてゐる本屋はある。然し此處の特徴をなすものは、何と云つても古本屋である。北京の書業同業公會會員九十六軒のうち三十六軒は琉璃廠にある。以てその盛を知る可きである。表通りだけでなく、廟の中だとか、裏通りとか抜け道とか思はぬところに小さな書肆が澤山ある。抜け裏に住んで居る連中などは店を持たず、自分の寝起きする室に書籍を積み上げて、お得意様へ行商に出掛けるのが多い。詳細は古本屋の項に譲つてこゝには省略する。

新本の店として第一に擧ぐ可きは商務印書館である。上海の本店は抗日の巢窟となつて爆撃されてしまつたが、こゝのは西琉璃廠の中程、路南に石造の三層樓が巍々として聳え立つてゐる。事變後何處へ行つたかわからない本店から、依然として新刊書が届いてゐるから大したものであらう。

その筋向ひには中華書局の分銷處があり、東琉璃廠の東口から楊梅竹街へ行く途中には廣益書局、世界書局、開明書店等の分銷處が立ち並んでゐる。これらは何れも上海に

本據を持つものだが、北京の出版書肆としては直隸書局、自強書局等がある。

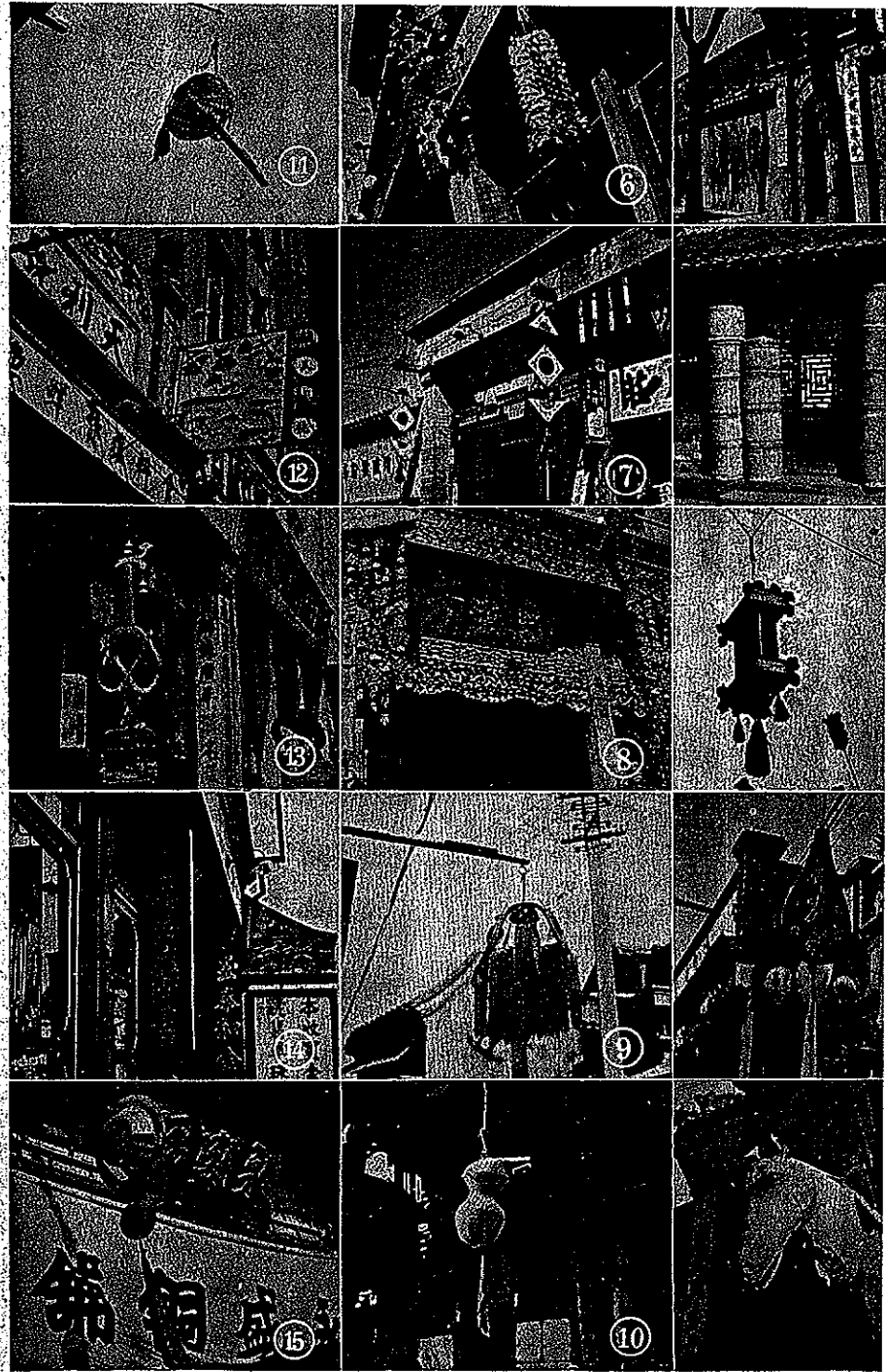
文房具屋 琉璃廠の文房具屋には西琉璃廠の路北にある榮寶齋が老舗として最も名高い。恐らく北京第一である。懸値はしない。安心して買物の出来る店である。その代り値段は他の店より高いが、品物は信用出来る。此店の信紙（便箋）と信套（封筒）は張大千、蕭謙中、齊白石など有名な畫家の畫を自家で美しい多色刷の木版としたもので、北京では最も上等な品である。奥へ這入ると、以上の畫家達の肉筆や、名士の書、或は古硯、古墨その他珍奇な文玩類が陳列してある。

これに次いで筋向ひに清秘閣あり、同じく信用のある店で前者よりもこゝの方が眞の北京趣味の品物が揃つてゐるといふ人もある。

筆屋としては賀蓮寶、胡開文、戴月軒あたりが一流である。李玉田も有名な店だが、今は閉めてゐる。

印材、墨壺では西口の同古堂が名高く、この店の主人張樾函は一流の篆刻家でもある。

其他 このほか東琉璃廠の信遠齋は夏季の清涼飲料たる



1 看秋 2 漢漢醫 3 籠屋 4 樂 5 紙屋 6 紙屋 7 樂屋 8 菜子屋 9 糸屋 10 物實もれこ 11 泥物泥 12 利がかななること 13 利がかななること 14 利がかななること 15 利がかななること



骨董屋の店構

京第一、否東の項参照）北

骨董屋の話

骨董屋の多い街 北京は骨董即ち古美術品の世界的市場

を並べて居り、同じ贖物でも荒唐無稽なものはいく。

(安藤更生)

である。和平門外の琉璃廠は、もと明時代から琉璃瓦を焼いたところだが、それが近世になつて骨董屋と古本屋の集團的な街になつた。(琉璃廠の項参照)

酸梅湯に名高く(小吃の項参看)、西琉璃廠の東口にある風屋は北京第一の風作りの名人である。

廠甸兒の市 舊の正月元日から十五日まで、琉璃廠には書畫骨董古書碑帖などの一大市が立つ。近頃は新暦の元日から十五日までも同じやうに開かれるが、その盛なことは到底舊正月には及ばない。師範學院の手前から海王村公園までの間、道路の中央には巨大なアンペラ造りの掛小屋が幾つとなく並び立ち、その中に書畫が無数に陳列される。又兩側には古本屋が露店を櫛比させ、交叉點から南は骨董屋の露店が立ち、海王村公園は大商場と化し、火神廟には古玩舗、珠玉金銀の店が星羅し、このほか、道といふ道、店といふ店が、裏通りに到るまで家を開放して古書畫骨董の即賣展覽會場と化する。往來の熱鬧混雑名狀す可くもない。詩人この光景を詠じて曰く

火神廟起值新春 玩好圖書百貨陳  
 裘馬翩翩貴公子 往來多是讀書人  
 又曰く

畫坊書林列市齊 游人到此眼都迷  
 最難古畫分真假 商鼎周盤佳品題

こゝをブラブラしながら、古書のページを繰ったり、書畫を鑑賞したり、古陶を撫したりするのは初春の楽しい情緒の一つである。この期間中は市内各方面から商人が集まり、個人の持物も委託出陳されるので、掘出物があることもあり、北京の在住者達はそれを狙つて期間中毎日のやうに通ふ人が多い。然し、廠甸には各店の持つて居る上等品は出ないと思つて間違ひない。アンペラ御殿の中に並んで居る書畫で、名の聞えた人の物は殆ど全部贖物と云つても過言ではなく、殊に利を射るに敏なる支那商人は、最近日本人を狙つた贖物が非常に多く、畫の新らしいところで齊白石、張大千、蔣兆和、古いところでは趙之謙、鄭板橋あたりが多く、書も日本人にお馴染みの康有為、鄭孝胥、吳佩孚、張之洞、翁同龢、江朝宗あたりが多く、文徵明もあれば畫其昌もある。甚だしいのになると、吳道玄や王右軍の肉筆が出て來るから恐れ入る。それが大概言ひ値の十分の一位まで負かるのだ。だからこの市では、買ふつもりもなくて戲談に値をつけると、思ひもよらず「好々」<sup>ハハハ</sup>と負けられて、飛んだ背負ひ込みものをするところがあるから注意を要する。家の中で展覧をやつてゐる店の方は、いくらが上物

洋第一の古美術商の街である。これに次いで東四牌樓の通り、東華門大街、崇文門外、前門外大街、廊房二條、王府井、東安市場などに割合に固つてゐる。

名高い骨董屋 單に骨董屋と謂つても十錢二十錢のへボ陶器を賣つてゐる店もあれば、一口十萬圓以上の古贖を扱ふ店もあり様ではないが、東城の椿樹胡同にある陳鑑塘、同益恒などは金石、銅器、石佛、古陶等を扱ふ一流の店である。琉璃廠では延古齋などが一流で氣持のいい店だったが、今は主人が死んで其後は餘り振はぬやうだ。同處の雅文齋は高いが品物の數も多く、大觀齋もいい店で餘り暴利をやることはない。韻古齋には繪が多いが、近頃繪はこんな店でも品薄のやうである。炭兒胡同の南側の西寄りにある彬記は金石もので一流の店だが、大きな店の割合には品物も氣樂に見せて呉れる。家の外觀は大したことはないが、内部は仲々立派なものである。南河沿の夏錫忠も陶器など相當なものを持つてゐるが、安くはないやうだ。

骨董品の買方 骨董品の買ひ方に就いては店により、人によりいろ／＼方法があるわけだが、支那では先づ第一に

物を見せて貰ふことが大切である。物を見なくては買ひ度くても買ひやうがない。よく日本から来た半可通の人が琉璃廠あたりの骨董屋の店先だけをかい撫でに見て歩いて北京の骨董屋などには疎なものはない。贗物はかりだといふ。さういふのは當り前で、こんな連中が店先で見た品物は確かに贗物か、極く價値のないものばかりなのだ。然し、それだからといつて奥の方にいゝ物が無いといふことにはならぬ。

何故いゝ品を店頭と並べないか 一體骨董屋に限らず、支那の商店は餘り品物を店頭へ並べたがらない傾向がある。これは治安の關係から、餘り物資が豊富さうに見える和不逞の輩に狙はれるといふ怖れもあるわけだが、骨董屋にはまた特別な理由があるのである。

北京の骨董屋を歩いても、實際店頭には大したものも陳べてない。住宅式になつてゐる一流の大骨董商の應接室にも大したものは置いてない。一と通り客が来れば見せる丈けのものを並べてあるだけで、名品を出して置くといふやうなことはしない。大體プラーと来る客は品物を買ふか買はぬかわからないのだから、そんな客に一々名品を見せ

が多い。明器は河南の洛陽附近から多く出で、石佛は山西から西安あたりへかけて多い。天龍山などは皆石佛の頸を取られてしまつた。南北響堂山、鞏縣あたりも石佛が出る大同は相當盗まれたが、事變後は保護が行き届いてゐるので、餘り出ない。

山西は昔から豊かな土地で、金持や文人墨客が多く、その關係か骨董品が多く出る。日本向けの染付け、珊瑚、翡翠、それから書籍なども皆山西から来る。この地は佛教が盛んで、奥地へ行くとき非常に寺が多く、或る處では民家よりも寺院の方が多いといふ町もある位だから、佛教關係の古物は山西からよく出る。山西は大同から黄河まで、ずつと砂岩であるので、石佛は砂岩だと山西だと云はれるが、天龍山や鞏縣のものもつとキメが細かいやうである。黄河の紅がらを固めたやうな石も特徴がある。

唐宋のものは多く河南から出る。河南には洛陽とか開封(即ち宋の汴京)とか、唐宋時代の首都があつたから、それらの時代の古墳を掘つて副葬品が出て来る。何れも盗掘したものである。我正倉院に傳つた寶物のやうな立派な銅鏡だの、漆背鏡だの、素晴らしいものが出る。以前はよ

たところで手間がかかるだけで無駄だといふ考へがある。また馴染の客や友人仲間にしたところで、名品を大勢に見せて、あの品はいいとか、怪しいとか、贗だとか評判をされたり批評されたり、値段が高いの安いのと噂に上るとどうしても品が賣れ憎くなつて来る。所謂店曝しを恐れる心理が強く働いてゐるのである。店員は客を一眼見れば多年の経験でこの客は買ふ客か素見か直ぐわかるので、素見客と見たら普通に飾つてあるのだけを見せて知らん顔をしてゐる。もつと何かないかと云へば、「沒有」と極めてアッサリしてゐる。また買ふことが解つてゐる客でもその人の様子でどんな品を求めてゐるか直ぐ解るから、その向きのものだけを出して見せる。

客によつて買ふ力があることが解ればいろいろと出して見せる。安いものでも一度買へば、次には頃合ひのものがあれば出して見せる。段々馴染が深くなつてゆくわけである。

骨董の産地 支那の骨董品は出土品が多いから、産地と云つても嚴密なことは云へないが、矢張り昔の都だつたところとか、或る地方の中心地だつた土地から出土するもの

くかういふ品が河南から北京へ来たものだが、事變後は交通が途斷えてゐるので来なくなつてゐる。河南からは宋代のものもよく出る。石佛の頭などは骨董屋が値をよく買ふものだから、地方の土民が壊して盗つて来るのである。彰德附近の安陽からは、殷時代の古物が出土するが、近頃は土民が大仕掛けの盗掘をやつてゐるといふ噂である。所謂龜甲獸骨文字で、龜の甲羅や獸骨に象形文字を彫りつけたもので、支那の最も古い文字であり、それに伴つて出土する骨簪だとか白色土器だとか、銅製品とかは何れも支那で最古の遺品で、これらは骨董品といふよりは學者の參考品として尊ばれてゐる。先頃死んだ羅振玉などはこの方面の研究の大家で、收藏品も妙くない。

これらの品物が、土地の商賣人の手に渡つて、各地から北京へ集つて来る。

商賣人は北京へ着いて、それぞれの定宿へ泊る。ズローカーが附いてゐて、出土品、陶器、磁器、銅器、佛像などとそれぞれの向きで買ひさうな古美術商へ電話を掛ける。さうすると、その宿屋へ商人が集つて来て値をつける。何か名品が出たといふやうな時になると、五十人、百人とい

ふ人が押掛けて来て、それこそ押すな押すなで、混雑する。風呂敷を被せて、その下で指を握り合つて値をつけるので賣主の指を握り乍ら品物を見たり、また値をつけ直したり、大混雑である。一度握つた賣主の手を放したら、もう他の人に握られてしまふので、自分が買ひつけてしまふまで手を放すまいとする。他の者がまた手を奪はうとする。ワメク、怒鳴る、大騒ぎだ。値が定つて取引が済めば、ブローカーは賣主買主雙方から、出來値の一割を手數料として貰ふ。

また北平古玩商行といふ骨董商組合が闕王廟前街にあつて、中國人ばかりで組織せられ、市が立つ。徽章をつけた會員のみが入場して、多い時には今日は山西、今日は河南、今日は山東といふ具合に日を分けて會員が品物を見にゆく。大抵二時頃から行つて品物が出るのを待つて買ふ。これは主に河南、山西から品が来る。

山西といふところは前述のやうに昔から豊富なところで、いろいろな古物が出る。平遙あたりには何十人となぐ骨董商が北京からも仕入れに出掛けて宿をとつてゐる。私も三週間以上滞在して根よくボーイを連れしたり、米醬油ま

で持つて出掛けて行つたものだ。さうして品物が出るのを待つたり、いい品があるといふ話を聞き込むと見にゆく。河南や山東へもよく出掛けてゆく。

日本から仕入れに来る骨董屋は今日では輸入がむづかしいので、一人二人で手荷物に持つてゆく程度なので、名品のしやんとしたのを、好いものがあつたら買つて行かうといふので、一流の骨董屋ばかりを歩く。京橋の龍泉堂などよく来るが、近頃は大體の形勢を見に来るので、まあ勉強の程度で、積極的な商賣はしてゐないやうだ。龍泉堂の先代は大部盛にやつたが、五六年前に故人になつた。今の主人も若いのが仲々やつてゐる。先代は骨董で儲けた人で、北京に居た頃は民團の書記などをやつてゐた。その頃は未だ掘出し物があつた時代なので、日本へ持つて行くと、それが十倍以上の値になつて賣れる。それで仕上げた人だ。有名な山中商會は北京に支店を持つてゐるが、北京へ来ると向き向きを廻つて、アメリカ向き、日本向き、金石物、書畫等とそれぞれ手分けをして仕入れをやる。山中も前の主人は骨董の神様と云はれた人で、アメリカへ行つてあれ丈けやり、世界的な古美術商になつてしまつた。

一體、日本人は骨董を求めるとしても、狙ひ處が濠いので、茶器に使ふとか、菓子器になるとか、支那のやうにただそこらに飾つて置くのとは異ふから、名品といふものは仲々無い場合が多い。例へば明の赤繪にしたところで、纏つたのは現在北京には一つもないと云つても過言ではない。先年、さる高貴の御方が當地へ御見えになつた時に、私にお話があつて二三の骨董屋から品物を集めて御眼にかけたことがある。燈市口の榮興祥からも二三持つて伺つたが、この店などは北京一の磁器の目ききで、故宮にあつた物などを大分持つてゐたが、先日行つてみたら、その當時のものは一つも無くなつてゐる。品物も少なくなつて仲々手に入らぬらしい。

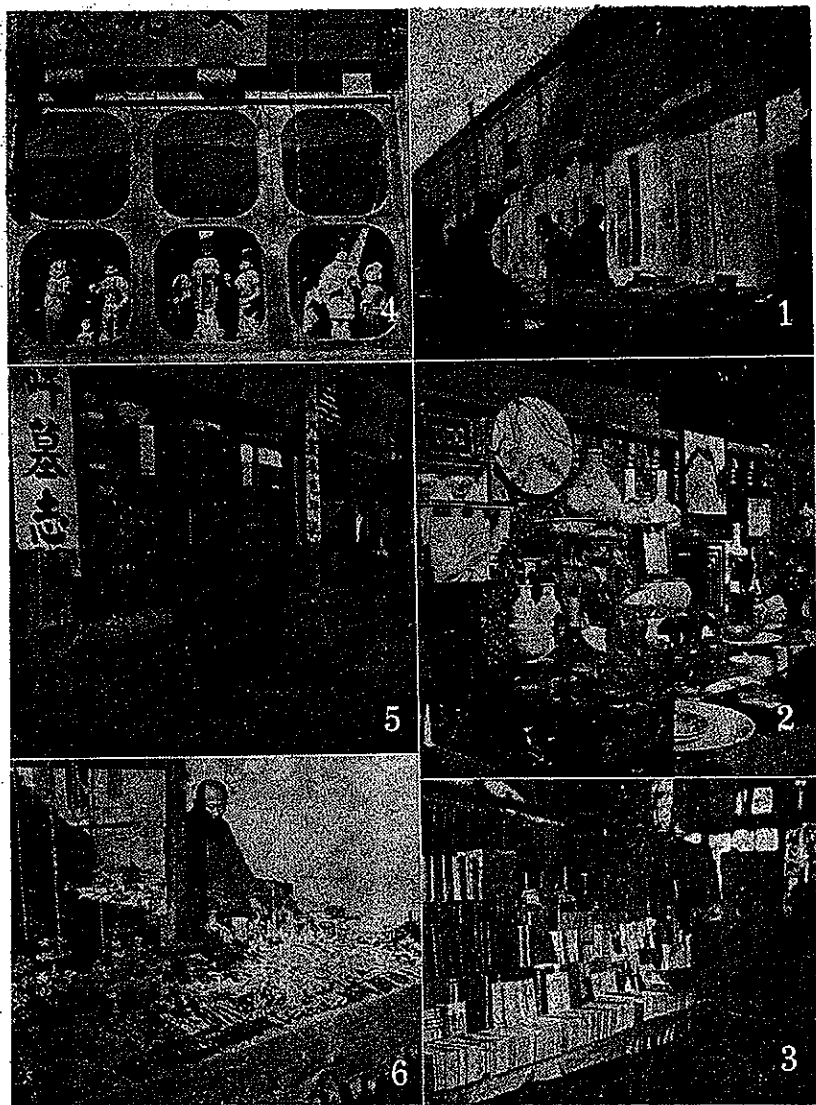
贖物 古美術品を買ふ身にとつて、一番氣にかゝることは、贖物を掴ませられるといふ問題である。事實、前にも書いた通り、贖物が多い。だから初心の人は、誰か然るべき信頼の出來る人に案内して貰ふに限る。一人歩きで掘り出し物を、などといふ考へは大禁物である。今日では掘り出し物などといふものはない。またよしんばあつたにしてからが、掘り出しには先づ自分の眼が利かなければならぬ。

充分平生から鑑識眼を養つて然る後に掘り出し得る力が備り、そのうへに非常な熱心と運がよくつて掘り出しが出来るので、實際今日では骨董の掘り出しなどといふものは、彩票を當てるよりもむづかしいのである。それをろくに眼の利かない素人が矢鱈に漁つたところで掘出しなどある筈がない。又多少目が利いたところでその生嚼りなところが贖物屋の目の着け所で、反つて贖物を掴ませられる機縁になる位のものだ。

硯などは哈達門外でも贖物を造る店が四五軒ある。易州あたりから出る石で造り、古さうな箱へ入れたり、古く作つて新しい箱へ入れたり、名人の名を彫り入れたり、それはそれはいろんな手を使ふ。琉璃廠にもそんなのばかり列べてゐる店がある。東安市場や路傍の露店で賣つてゐるものにもそれが多い。

繪でも、本物といふものは尠く、仇英といへば仇英、沈南蘋と云へば沈南蘋、何でもあるが、大概は後人の作で、支那人もそこらはいい加減に扱つて餘り追及しないやうである。正月の廠甸に出る書畫で少し名の聞えた人の大抵贖物と見て間違ひない。日本人は矢鱈にこの正月の市で齊





1 屋本古と屋董骨 2 屋董骨と屋本古の句殿 3 屋董骨の子機 4 屋本古 5 窓師の 屋董骨の傍路 6

白石だの康有爲だの甚しきに至つては吳道玄や王羲之などを買つて得意がつてゐるが、どうかと思ふ次第である。

昔は品物を調べて、ちやんと商賣をしたが、近頃は何でも日本人が法外な値で買ふので、一流の店でも悪いことをするやうになつた。この頃の骨董屋は恐ろしい。

そんな風に賈物を買つて私のところへ持つて来た人に、これはいけませんと云つて返させたものもある。この間も某會社の人が、せいぜい四五圓のものを四百五十圓も出して買つて来た。幸ひ領收書があつたので四五圓交渉して到頭金をとり返して来た。その同じ人が壊れた青磁を繼いだものでしみの入つたのを八十五圓で買つて来て、これは古いですといふ。よく見ると、これが青磁といふものだといふ参考品にならないが、何にも使へもしない、鑑賞用にもならないものを、そんな値で買つて来る方もつたいないし、買はせるとは骨董屋もひどい。

こんなことで一々北京に何萬と居る日本人を監督してゐるわけにも行かず、私としては御出でになれば誰方にも誤ちのないやうに御相談に應じるつもりである。

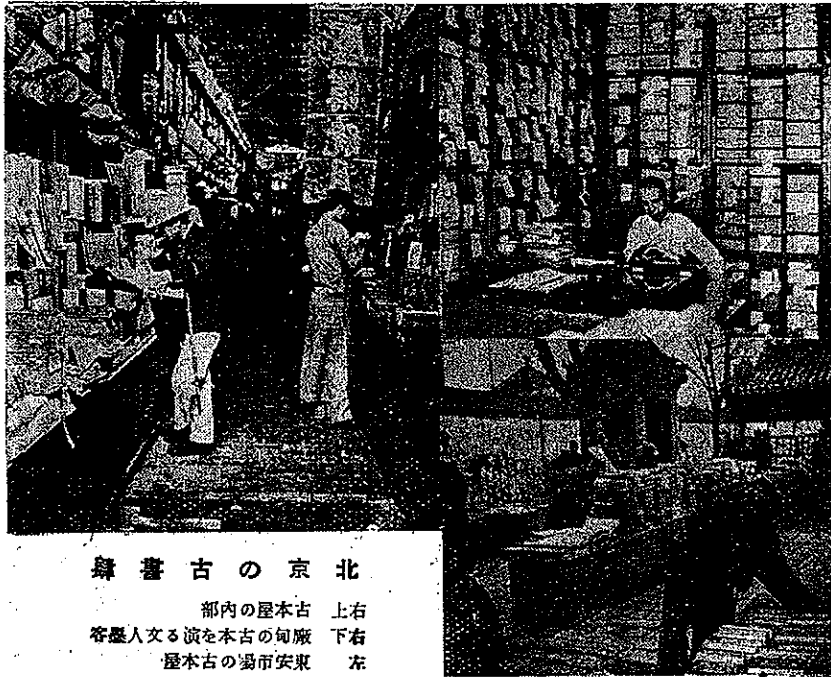
賈物の産地 骨董に産地があるやうに、賈物にも産地が

ある。陶磁類は九江あたりで、乾隆でも嘉靖でも萬曆でも焼いて来る。石佛は鄭州、銅器は山東省あたりから、鐘鼎

文の入つたものなどが出て来る。明器泥象は洛陽の人間が出て来て、北京でやつてゐる。作り方は矢張り型で抜くので、明器の形變りの珍らしいものは大いに賈である。出土品は本来何れも土がついてゐるから、私共はその泥を見て産地を鑑定する。賈物も泥をくつつけてあるが、本物は素焼のものが千年以上も土申してゐたのだから、黒い土も赤い土も風化してゐるし、土偶等は爪で搔くと欠けて落ちる位である。山東のものは少し土も堅いので別であるが、その土地その土地の土を知ることが大切である。

三彩はやはり洛陽あたりから賈物が製出される。北京附近でも出来るかどうか一寸知らないが、この頃妙な形の變つたものを持つて来たのがあつたから、或はこの附近、門頭溝あたりで作つてゐるかも知れない。洛陽のやつたらもつと上手な筈だと思つた。

拓本にも賈物が多い。然しこれは拓本の賈物を造ること目的の場合もあるが、多くは碑の賈物を賣る方が目的であつて、それを拓にとれば、碑も古びがついて来るし一舉



北京の古書肆

右 上 古本の屋内の部  
左 下 宛の古本の演文を人客  
東安市場の古本の屋

その他、遼雅齋、文祿堂、文友堂、文華堂、群玉齋、文萊閣等は重なるものである。

隆福寺では文奎堂を第一に推さねばならぬ。北京第一の古書肆であり、藏書の豊富なこと、信用を第一とするゆつたりした商賣振りと云ひ、この店の右に出づるものはない。

文殿閣は東洋文庫の御出入りとして日本にも廣く名を知られてゐる。古典を扱つてゐるのみならず、古典の複製や、支那が外國と著作權に關する條約を取極めてゐない關係上、歐米各國の東洋研究に關する絶版物を安く複製してゐる點で學者に重寶がられてゐる。

他に修綬堂、三友堂、東來閣、保萃齋、など何れも名がある。

東安市場は西側の一廓が全部、古書と古玩の店になつてゐる。舖子を持つてゐる店もあるし、中央の攤子タマシに露店風に並べてゐる店もある。また五洲書局や中原書店のやうに、舖子と攤子と兩方に店を出してゐるところもある。

中原書店は洋書並に學術報告類を揃へてゐるので名がある。洋書は支那では日本ほど需要が少ないので、時々オヤツ

古本屋

兩得といふ考へ方からやることらしい。

私は昭和十三年に山東の奥地へ入つて主として畫像石の眞贋を見分ける眼を養ふために調べて歩いたが、嘉祥縣の武梁祠まで行つたのは日本人としては私が初めてではないかと思つてゐる。近頃は武梁祠のみならず、山東各地から出る畫像石の眞贋をよく見掛けるやうになつた。

以上自分の乏しい經驗について色々述べたが、骨董を研究され、鑑識眼を持たれることは自己の趣味としても、また人品を磨く上から云つてもまことに結構なことであるから、大いにこの趣味を擴めたいと思ふ。以上のことをよくよく御注意の上、當地の傑れた古美術の香氣に觸れられんことを切望して擲筆する。

(西湖堂・加治伊三郎)

北京では書肆といへば、古書肆を指すと云つても過言ではない。元來、支那の斬らしい出版界は上海が中心であつ

て、すべての大書肆がこゝに集つてゐる。北京では小さな出版者が四五軒ある丈けで、それも赤本屋に近いやうなのが多い。小賣店も従つて少く、上海の出版處の代售處を除くと、新本屋は東安市場の佩文齋、新智書店、西單牌樓の人々書店、成文厚、亞洲書局位が眼立つ方で、他は云ふに足りない。一體北京では古本屋と新本屋の區別は、日本ほど嚴密ではないので、古本屋も新書を扱つてゐるので、純然たる新本屋といふのは極めて少い。ところが古本屋の方は北京の讀書界に鬱然たる勢力を持つて居り、北京は恐らく支那に於ける最大の古本市場である。従つて北京で書肆といへば古本屋を指すことになるのである。書業組合たる書業同業公會の會長も來蕙閣といふ古本屋の主人が務めてゐる。

古書肆の多い町としては、先づ第一に琉璃廠に指を屈せねばならぬ。次には隆福寺、東安市場、西單商場等が主なるものである。

琉璃廠で主な店としては前述の來蕙閣がある。主人はもと隆福寺の文奎堂の掌櫃的であつたが、獨立して立派な古書肆となつた。畫冊の類を扱ふ店としては富晉書社あり、

と思ふやうな稀翻本が安く手に這入ることがある。話が横道へ這入るが、これは洋書のみならず、古玩でも西洋骨董には仲々面白いものが、東安市場や天橋には出て来る。掘り出し物といへば、むしろさういつた方面にあるやうに思へる。

五洲書局は、最近掌櫃的が獨立して、二軒に分れたが、餘り懸念をしない店である。このほか、文美書莊、華盛書局、華鑫書社など何れも名がある。

西單商場にも書肆があるが、餘り目立つた店はない。

古本行商人 北京の古本屋には、以上の店のほかに、一種の行商の本屋がある。これは歴とした一流書店の番頭が注文を聞いて歩いてゐる場合もあるし、個人でやつて來るものもある。十數冊の本を淺黄木綿の大きな風呂敷に包んだやつを、自行車の尻に乗せてお得意を廻つて歩く。店は持つて居なくても、屋號だけば堂々たるもので、雲亭閣だとか、文祿閣だとか殿めしい名を刷つた名片を持つて來る。大抵、琉璃廠や隆福寺の裏町に住んでゐるので、讀書人が北京へ着いて一週間もすると、何處でどう聞き込んで

來るか、かういふ連中の御見舞を受ける。

筆者は日曜の午前をこれらの連中の面會日に宛てゝゐるが、十時頃になると陸續とやつて來て看門的の室で順番を待つてゐる。それを書齋に居て次々に引見するわけだ。大きな證書などは、そのうちの首巻だけを見本に持つて來る「よく見てから買ふから置いてゆけ」といふと快く置いてゆく。性の悪い客だと短いものならその間に讀んでしまふ。それでも、支那の商人は何とも文句を云はない。

勘定は即金で拂ふ人もあるが、月末に一部を拂ひ、あとは端午と、舊年末に精算する人もある。

搜しものなどをする時は、この連中を頼むと便利で、つまらぬものでも實に忠實に搜して來て呉れる。その代り店で買ふよりはどうしても少し高いが、それは俵代や、時間の節約だと思へば便利な連中である。

北京の大きな古本屋は大概目錄を呉れる。もつとも近頃は價格の變動が劇しいのと、目錄の印刷代が高いので、新しく作つてゐる店は少いやうだ。この目錄に出てゐる價格の八掛位が實際の値段である。  
(安藤更生)

## 北京の支那風呂

これは何にも決して北京のみが有つ名物的特異な存在ではないけれども、北京觀光客にとつて、支那風呂といふものも、是れ亦たお勧めしていふものゝ一つであらう。百聞一見に如かず、兎に角一度支那風呂に行つて旅の疲れを休めて御覽しろ。何んとも喩えやうもないその氣持の好さは、誰れもが禮讚の聲をあげること請合である。

凡そ風呂といふものゝ有つべきあらゆる内容設備の點に於て、支那風呂ほど驚嘆に値する充實さを有つものはない。支那料理が至れり盡せりの調味を以て世界一の美味だとするならば、支那風呂も是れ亦た至れり盡せりの設備を以て世界一の浴場だと誇稱しても、あながち過言ではあるまい。

北京の街々をお歩きになつてみると、◎澡堂或は澡塘といふ文字を書いた門構えの家に、奇異的に皆様の視線が惹かれることであらう。それが支那風呂屋なのだ。澡堂と

は錢湯風呂のことである。その字の上に清華だとか寶泉だとか屋號をつけて、清華澡堂とか寶泉澡堂といふやうに表現されてゐる。

夜になると、この澡堂には、慣習的に門にいろ／＼の着色電球をイルミネーション式につけたり、或は門側にたてた高い一本の柱の頂きに電燈を吊してゐるので、誰れの眼にもその所在が直ぐわかる。營業時間は、晨はやぐから夜は十二時頃まで。

澡堂の表看板



澡堂をその内容によつて分類してみると

- 一、日本の銭湯みたいな純混合式のもの。
- 二、混合風呂もあれば、また家族風呂式の部屋風呂設備も兼ねてゐるもの。
- 三、部屋風呂ばかりの高級風呂。

これらを總稱したものが澡堂であるが、分稱的な名前は、混合風呂を特に池塘、部屋風呂を官堂といひ、池塘とは即ち多勢の人々が這入れる湯槽のことである。部屋風呂は何にも官員様ばかりが入浴したわけでもあるまいが、概ね上級の客が来るころなので、土地柄官尊民卑觀念のひどかつた昔の北京では、上等客を表はすに官の字を以てしたのであらう。舊式な宿屋の門側の壁などに仕宦行臺などとかく書いてあるのと同じ轍のものだ。

豪華な部屋風呂即ち官堂を設けてゐながら、表看板には池の字を使つてゐるところもある。王府大街の清華池、前門外珠市口の興華池などがそれで、この二軒とも池塘の混合風呂も兼營してゐるが、北京では一流の澡堂で堂々たるものである。だから池塘と書いてあつたからといつて、必ずしも汚らしい混合風呂だとは一概にはいへない。だ

が、官堂を兼設してゐる澡堂は、まず設備の整つた立派な風呂屋だといふことはいへる。

官堂ばかりの澡堂は、前門外李鐵拐斜街の入口に西昇平園といふ北京隨一の贅澤風呂があつたが、うち續く不景氣風に吹きめくられて大事變直前に店を閉じ、官堂ばかりの風呂屋は大北京にも今は一軒もない。だが、池塘にしても官堂にしても、北京の澡堂は、日本の街風呂に比べると、規模の大きさに於ても、また設備の完備さに於ても、全く段違ひで、日本の銭湯のやうなあんな貧弱なものではない。茲に澡堂のお話を進める便宜上、私が初めて澡堂入浴を試みた當時書いておいた取つて置ききの原稿があるので、それを茲に御披露して説明にあてる。

### 池塘——混合風呂——

時は蒙古風もやうやくおさまりかけた晩春、處は前門外の北京では一流格の池官兼營の澡堂。

門をくぐり池塘の部のドアを開けて足を一步ふみ入れ、や、きよろ／＼と見渡した一瞬まづ度膽をぬかれた。何

んとひろ／＼とした客席よ！

日本の銭湯には、客席など名々のつく設備はてんでなく、番台に御内儀サンか娘サンか、鎮座し、その反対側の壁に沿ふて着物を容れるボックスが戸棚式に設けられ、それと番台との中間のせい／＼五坪か六坪／＼の土間にワスペリを敷きつめ、番台に湯銭を拂つてこの土間にあがるや、一服する暇もなくいきなり着物を脱いでボックスか籠に放込み、そのまま直ぐ／＼と風呂場に飛込む。風呂からあがつても、是れ亦た直ぐ着物を纏つてさつさと飛出す。湯あがりの身體をくつろごうにも、座蒲團一枚もなければ腰をかける藤椅子一脚の備えすらなく、乾いた喉に澁茶一杯うるほすゆとりをも許されぬほど、客席といふものゝ設備が全く缺けてゐる。それに比べてこの澡堂の客席の素晴らしさ。

ひろ／＼とした宏大な室に、大型ソファといつた坑が、カフエーのボックス然と幾十となく設けられ、坑にはスプリングはないが厚い綿の座蒲團を敷き、其上に白い敷布をかけ、チャブ台風の小テーブルを坑の中央に置き、その左右に一人づつゆつくり坐れもすればまた／＼と横に

もなれるほど大きな坑である。

「何うぞこちらへ！」

ボーイが直ぐ飛んで来て、空いてゐる席に案内し、「お茶は何んに致しませうか」

と訊ねる。ふつ／＼お茶は龍井と香片の二種に分け、龍井とは日本風な滋味のある緑茶、香片は北支人が殊に愛好する花の香を匂はせた燻茶。

坑に腰を下ろして先づお茶を一杯啜りながらあたりを見廻すと、幾千百人のいづれも赤裸の浴客が、皆一様に白い大型タオルを腰に巻き、或は／＼ととなつて白河夜舟の高駢をかいてゐる者、或はあぐらをかいてお茶を飲み／＼伴れの友と談し合つてゐる者、或は小テーブルの上で四分一合くらゐ這入る錫の徳久利から焼酒を盃に獨酌しながら薄く切つたソーセイジか何かを摘んで舌なめづりしてゐる者、しきりに新聞に見入つてゐる者、按摩に肩を揉ませてゐる者、どれもこれも是れ盡く／＼のんびりした光景だ。湯にひたつた快感の次ぎのもつと大きな愉樂を心ゆくまで堪能してゐる。

ふと見ると、手近の柱に告がらしいものが額になつて掛つてゐる。